

1999 年度修士論文

都市近郊の里山保全 NPO に関する研究

ボランティアの参加動機と期待される社会的機能とのずれに注目して

東京工業大学社会理工学研究科社会工学専攻

98M43240 松村 正治

指導教官 土場 学

都市近郊の里山保全NPOに関する研究

——ボランティアの参加動機と期待される社会的機能とのずれに注目して——

1 序論	
1.1 研究の背景と目的	1
1.2 研究方法と論文の構成	4
2 先行研究の検討	
2.1 問題の所在	5
2.2 研究の枠組み	7
3 里山保全NPOの全国的な動向・実態	
3.1 歴史の変遷	10
3.2 マクロデータの整理	12
4 里山保全NPOの素顔	
4.1 調査対象NPOの抽出	14
4.2 恩田の谷戸ファンクラブ	15
4.3 町田かたかごの森を守る会／七国山自然を考える会	38
4.4 せたがや自然環境保全の会	50
4.5 調査結果のまとめ	59
5 里山ボランティアの参加動機と期待される社会的機能	
5.1 里山ボランティアにとっての保全活動の意味	63
5.2 里山ボランティア養成講座の射程	67
5.3 里山ボランティア・里山保全NPOのあり方	70
6 結論	75

1 序論

1.1 研究の背景と目的

里山の現状——消失と再評価

近年、かつてないほど里山(または里山景観を代表する雑木林)に人びとの関心が集まっている。その最たる理由は、一昔前までありふれた景観域であった里山が急激にその姿を失いつつあり、いま何らかの対策を講じなければ、多くの里山が消失してしまうという危機感にある。高度経済成長期以前、里山は薪炭林や農用林として人々の生業・生活と密接にかかわっていた。人々は定期的に間伐や下草刈りなどの管理を行っていたので、里山を持続的に利用することができた。ところが燃料革命・肥料革命以降、燃料は薪炭から石炭・石油などの化石燃料に、肥料は堆肥から化学肥料に取って変わられ、里山は経済的な利用価値を失った。その結果、現在では、都市の外延化の波に飲まれて開発されるか、あるいは管理を放棄されて林内の荒廃と遷移の進行を招かして、里山は量的に減少するとともに質的にも劣化しつつある(重松 1991; 石井ほか 1993)。

しかし、このような里山消失に対する危機感だけでは、里山への関心の高まりを十分に説明していない。いま里山が注目されているのは、里山の再評価というトレンド(里山の復権、里山ルネッサンス)を抜きにしては語れないからである。

学術的な再評価という点では、生態学の貢献が大きい。従来の生態学では、裸地が草地になり、さらに森林になるという遷移の中で、最終的に極相林(クライマックス)で安定するという見方が支配的であった。このため、環境評価の場面では、環境の価値を測定する指標として植生自然度が用いられ、極相林から近いほど価値が高いと評価されてきた。しかし、最近の研究成果によると、極相林といえども決して静的に安定しているわけではなく、たとえば、強風や枯死で高木が倒れたり、落雷によって野火が発生したりすることによって適度にギャップができ、それによって活力が与えられるというダイナミズムが明らかにされた(武内 1994)。この「ギャップ・ダイナミクス理論」が支持されるようになり、植生の価値を一元的にみる見方は後退を余儀なくされた。それとともに生物多様性の点では、原生自然よりも人手の入った二次的自然において、多くの動植物種を育む例が多数確認されるようになり、里山のような二次的自然であっても必ずしも原生自然より劣った自然ではなく、それとは異なった価値を有するものと評価されるようになってきた(鷲谷・矢原 1996)。特に日本の里山は、単なる照葉樹林の代償植生ではなく、古い氷河時代の生き残り(遺存種)であるカタクリ、カンアオイ、ミドリシジミ類、ギフチョウなどの動植物を温存してきた貴重な生息・生育空間であるという説が提出され、里山が固有の価値を有するものとして高く評価されるようになった(守山 1988)。

こうした学術的な評価の高まりに加えて、人びとの環境意識の高揚と身近な自然の減少にとともに、都市近郊におけるレクリエーション・自然探勝・環境教育の場として、以前にも増して里山が重要になっている。さらに、かつては都市近郊に広く見られた里山の激減に対するノスタルジックな感情も加わって、里山の価値が多面的に見直されつつある。

このように、里山の消失の進行とともに、その価値が新たに評価されるようになり、里山は保全すべき対象域として注目を集めている。

里山保全の必要性——保存と保全

ところで、里山のような二次的自然を守る方法は、原生自然を守る方法と大きく異なる。原生自然を守るためには、極力、人為を排除することが望ましいとされる。特に、原生自然の核心域(コア・エリア)へは、学術的な調査を除けば、原則的に人間の立入を禁止することが必要とされる。さらに、核心域のまわりには十分な面積の緩衝域(バッファー・エリア)を設け、その緩衝域のまわりに利用域を設定することで、核心域を利用域と分離することが求められる。

これに対して二次的自然は、人間の積極的な干渉があってはじめて成立する自然なので、人為を排除すると守ることができない。たとえば、里山景観を代表するクヌギ・コナラの雑木林の場合、自然の遷移に委ねると常緑広葉樹林へと移り変わってしまう¹³。

つまり、自然環境を守るというとき、ただ「守る」というだけでは十分ではなく、人為を排除するのか、それとも人為を介するのかの区別が必要である。普通、前者には「保存(preservation)」、後者には「保全(conservation)」の用語を当てて使い分けている(Norton 1986)¹⁴。したがって、原生自然は「保存」することが必要である一方、里山のような二次的自然は「保全」することが要求される。

かつて自然を守ることは、自然の「保存」とほとんど同義であった。したがって里山においても、原生自然と同様に自然の遷移に委ねるのがよいという考え方が優占的であった。これには、従来の進化論的な見方が影響していたものと思われるが、すでに説明したとおり、そうした見方が疑問視されるようになり、里山は継続的に管理(「保全」)することが必要との認識が定着しつつある。そこで、里山をどのように保全していくのか、とりわけ放置されて遷移が進行している里山を、誰が適切に維持管理していくのかという問題が浮上してきた。

里山管理にみられる社会的ジレンマ

里山を維持管理する経済合理的な動機がなくなってしまった現在において、誰が里山を管理していくべきなのだろうか。このことを検討するためには、再評価されている里山の価値を確認しておく必要がある。それはたとえば、氷河時代の遺存種の生育・生息空間としての価値、生物多様性が比較的高いという価値、都市近郊のレクリエーション・自然探勝・環境教育の場としての価値、などである。これらの価値はいずれも公益的な価値であることから、里山は公共財とみなしてよい。

ただし、里山には多くの民有地が含まれているため、公的に管理することは困難である。また公有地であっても、適切に管理するための資金が供給できないことが多い。このため、里山は公共財でありながら、管理が行き届かずに荒廃が進行している。

こうした問題の骨格は、社会的ジレンマ(Social Dilemma, SD)論によって表現できる(山岸1990)。言うまでもないが、社会的ジレンマとは、囚人のジレンマ(Prisoner's Dilemma, PD)を一般化したものであり、同様のメカニズムを内在している。Dawsによれば、各人が自己の利得のみを追求して「非協力行動(D行動)」を選択すると、その結果出現する社会状態は、全員が「協力行動(C行動)」を選択したときよりも悪くなってしまふという状況が社会的ジレンマである(Daws 1980)。

里山をめぐる問題に社会的ジレンマ論を適用すると、次のように定式化できる。すなわち、里山の保全活動は時間や労力といったコストがかかるので、一人ひとりが合理的な行動をとれば「非協力」(＝保全活動に参加しない)を選択する。しかし、全員が「非協力」を選択した場合は「協力」

¹³ 関東や関西以西の常緑広葉樹林帯の場合。

¹⁴ 森岡正博は、「人間のために自然を守る」のが「保全」で、「自然のために自然を守る」のが「保存」であると簡潔にまとめている(森岡 1999)。

(=保全活動に参加する)を選択した場合よりも結果が悪くなる(里山が減少、荒廃する)。こうした状況はまさしく社会的ジレンマであり、いわゆる「オルソン問題」と同型である¹⁵。

里山管理者としての市民ボランティアへの期待

里山をめぐる現状の問題を記述するには、社会的ジレンマ論は便利である。しかし、問題をこのように定式化しても、それは問題の解決にはつながらない。このジレンマを解消する突破口はどこにあるのだろうか。

社会的ジレンマ論では、前提として合理的な行為者が想定されている。したがって、このような仮定が適合する営利企業にとって、経済的に見合わない里山管理を行なう動機がないことは社会的ジレンマ論によって説明できる。しかしこのことを逆に考えると、経済合理性という観点を第一義としない行為者がいるならば、その彼(女)が里山を管理することが十分にありうることになる。このため、原則として無償で行動する市民ボランティアが里山の管理者として期待されている(重松 1991; 中川 1996; 倉本・内城編 1997)。

実際、政府でもなく営利企業でもない NPO が主体的にフィールドを持ち、ボランティア活動として里山管理を行なっている例は広く見られるようになってきている。また、政府の里山保全ボランティア養成施策として、活動意欲のある市民ボランティアを募集し、そのボランティアに里山の維持管理を委託するという市民参加方式で里山保全を図る動きも全国的に展開されている(木平 1996; 日本林業調査会編 1998)。

こうした現況を踏まえて、本研究では、里山保全NPOによるボランティア活動の実際を調査して、全国的に里山ボランティア養成施策が展開されるなかで、里山保全NPOと構成員である里山ボランティアの理想型を原理的に考察することを目的とする¹⁶。

¹⁵ 「オルソン問題」とは、(ロ)合理的な行為者は参加コストのかかる運動に参加しないため、運動の成果にただ乗りしようとする人(フリーライダー)が生じる、(リ)したがって合理的な行為者からは社会運動は生じない、というものである(Olson 1965=1983)。

¹⁶ 里山保全を行なっているNPOのほとんどは、特定非営利活動促進法(NPO法)で定められる法人格を取得しておらず、CBO(Community Based Organization)として位置づけられるようなボランティア組織である(萩原 1998)。このため、里山保全NPOの構成員はボランティアであることが普通である。このことを踏まえて、本研究では、里山ボランティアを里山保全NPOの構成員と同じ意味で使用した。なお、一般には、ボランティアの基本条件として自発性・無償性・公益性の3条件が挙げられるが、本研究では、個々の構成員がこの3条件を満たしているかどうかを不問にしている。ここで見られるようなボランティアに関する基本的な諸問題については、「ボランティア学」のテキストのなかに整理されている(内海ほか編 1999)。

1.2 研究方法と論文の構成

研究方法と論文構成は次のとおりである。

まず2章において、先行研究を検討し、問題の所在を明確化するとともに研究の枠組みを設定する。次に3章で、既存の調査データなどを参照して、里山保全 NPO をめぐる全国的な動向・実態を把握する。

本論文の骨格となるのは4章・5章であるが、4章では調査対象として都市近郊の里山保全 NPO を3団体抽出して、調査で得られた結果を整理する。この章は本研究の調査編に当たる。5章は分析編で、4章で得られた調査結果をもとに分析を行ない、里山ボランティアにとっての保全活動の意味を明らかにするほか、里山保全 NPO のあり方について考察する。最後に6章で結論をまとめる。

2 先行研究の検討

2.1 問題の所在

「ボランティア」＝「担い手」の破綻

里山ボランティア¹⁷は、当初、イギリスのBTCV(=British Trust for Conservation Volunteers:英国環境保全ボランティアトラスト)にならい、荒廃した里山を適切に管理する担い手としての役割が期待された(重松 1992, 1999)。しかし、実際に作業経験を重ねてみると、ボランティアが安全に作業できるのは、地形的には比較的平坦で、樹齢としては幼齢木からなる森林に限られることがわかってきた。また、たいていボランティアの作業能率はプロの林業家に比べると著しく劣るため、広い面積の森林を管理できないことも明らかになってきた。このため、奥山での森林整備はもとより、里山においてもその全域をボランティアが整備することは不可能である。森林／里山ボランティア¹⁸が次第に定着するにつれて、BTCVの制度がそのままには日本に当てはまらないこと、すなわち、ボランティアによる作業量の限界がはっきりしてきたのである(内山 1997; 山本 1998)。

このような作業量の限界性とともに、そもそもボランティアを森林整備の担い手としてみなすことについて問題を投げかける言説もある。山本信次は「仮に市民が実際に『労働力』として、すなわち森林管理の『担い手』として機能しうるとしても、『安価な労働力』として機能することはただでさえ低位の林業労働条件をさらに低位固定することにつながりかねず、むしろ都市住民と農山村住民を乖離させることとなる」(山本 1998: 28)と指摘し、ボランティアを安上がりの労働力とみなすとき、都市住民と農山村住民との距離が一層広がりに留意を求めている。

また、「ボランティア計画のジレンマ」とも呼べる次のような問題もある。すなわち、里山管理の担い手としてボランティアをみなしてしまうと、里山保全を最上位課題に設定したとき、不可避免的にボランティアを里山に動員していこうという文脈が作り上げられやすいが、自発的に行なっている行動に対して外的な報酬が与えられると「内発的動機付け」が失われるので、社会計画としてボランティアを動員することは困難である、という問題である。そもそも、英語のボランティア(volunteer)が自由意志を意味するラテン語のvoluntasを語源に持つように、ボランティアとは自発的に行動するのだから、「ボランティアを動員する」とは論理矛盾である¹⁹。

さらに、ボランティアは無償で活動するから、少しでも作業すれば微力ながら森林整備に貢献することができ、作業能率が低いことは問題にすべきでないと思われがちだが、そうした見方に疑問を投げかけるような研究があることに目を向けておく必要がある。

経済学のノンプロフィット・エコノミーの分野では、ボランティア活動と金銭的寄付の比較という観点から研究されてきた蓄積がある(山内 1997)。経済学では、「ボランティア活動＝時間の寄付」「金銭的寄付＝金銭の寄付」と捉え、個人がボランティア活動と金銭的寄付をする場合の最大化問題を考えることになる。つまり、限られた予算を消費財や金銭的寄付に配分する問題と、限られ

¹⁷ 1999年6月24～25日に開催された(社)日本造園学会主催のランドスケープセミナー「身近な自然の再生とランドスケープの役割」の場で、倉本宣は「二次的な自然を活動の場とするボランティア」を「里山ボランティア」と定義した。

¹⁸ 「森林ボランティア」は「一般市民の参加により、造林、育林などの森林での作業(森林や林業に関する普及啓発活動として行うものを含む)をボランティアで行うこと」と定義される((社)国土緑化推進機構 1998)。したがって、「里山ボランティア」は「森林ボランティア」に大部分が包含されるが、前者の場合、農地での作業も含まれることと、後者の場合は、里山に対して奥山で作業するボランティアというニュアンスが含まれることがある。

¹⁹ 田尾雅人は、このジレンマを「アソシエーションの価値とビューロクラシーの経営管理の相克」として捉えられている(田尾 1997)

た時間を労働・余暇・ボランティア活動に配分する問題を同時に考えるわけである。このタイプの問題は、ベッカーに代表される「時間配分の理論」(Becker 1965=1976)を応用することによって分析できる。

個人の効用に影響を与えるのは、彼(女)自身のボランティア活動や金銭的寄付であると仮定する。よると、ボランティア活動の機会費用(=市場賃金率)の上昇は、代替効果を通じてボランティア活動を抑制する方向に働く。つまり、賃金水準の高い人は、自らボランティア活動をするより、市場で稼いで金銭的寄付をする方が合理的である。また、市場労働が負の効用を与える場合には、ボランティア活動は促進され、逆に正の効用を与える場合には、ボランティア活動が抑制される方向に働く。すなわち、市場労働が苦痛であれば、ボランティア活動は、それ自身の効用をもたらすと同時に市場労働からの開放という二重のメリットを与えるのに対し、市場労働が楽しければ、ボランティア活動をするよりも、市場で所得を稼ぎ、そのなかから金銭的寄付の方が合理的である。

「ボランティア」を定義するときの一つの条件として、対価を求めない人、無償で活動する人という条件がある。このため、ボランティアはそのような人として理解されやすいが、機会費用を考慮すれば、ボランティアは無償で活動するのではなく、もちろん対価を受け取るのでもなく、対価を支払って活動する人なのである。これに気付けば、機会費用に見合うだけの森林整備作業ができないボランティアについては、ボランティア活動に費やす時間を、彼(女)が機会費用分を受け取れる活動に費やして、そこで得た収入をプロの農家・林家に支払って作業を依頼する方が森林整備にとって効果的である(こうした問題を「ボランティアの機会費用問題」とする)。

「ボランティア」=「学習者」への転換

このように、最近の森林／里山ボランティア論では、ボランティアを森林／里山整備の担い手としてみる見方は背景に退きつつあり、また、そうした見方にはいくつかの内在的な問題を抱えていることが明らかになった。そこでにわかに勢いを増している言説は、ボランティア活動を環境教育の体験学習活動と読み替えようというものである(内山 1997; 山本 1998)。

たとえば、山本は「今後の森林管理における市民参加活動、特に民間非営利団体の存在意義は、ボランティア活動としてのみならず、『森林ボランティア』という『体験学習』活動を通じて、森林問題を自らのものとして捉える市民を増加させ、様々な形態で森林管理に参加することを促すものであり、非常に重要である」(山本 1998: 27)と述べている。また、内山節や山本もメンバーになっている「森づくり政策」市民研究会が、1997年5月に提出した政策提言『新たな森林政策を求めて——森林ボランティア活動をすすめる市民からの提言』の中でも、ボランティアの第一の任務を、「森を順調に育て、次世代の森づくりにつなげていくこと」としたうえで、「このような[森林整備]作業をすすめながら、森林ボランティアは、その作業をとおして学んだことを広く市民に伝えていくという第二の任務をもっている。森や生物に代わって、森林の現状や森林の手入れの重要性を伝えていくこと。さらに、プロフェッショナルな森林での仕事をする人の重要性や、今日の山村の状況、森林経営者がかかえている矛盾、新しい森林の利用と管理の体系をつくりだす必要性などを、広く市民の間に語り伝えることによって、全市民的な森林管理への参加を促していくことも、また森林ボランティアの重要な役目である」(「森づくり政策」市民研究会 1997)とボランティアの役割を明確に位置づけた。

このように、ボランティア活動を森林整備作業というよりもむしろ、環境教育活動として積極的に捉える動きが顕著になっている。なるほど、ボランティア活動をそのように捉えれば、ボランティアを

森林整備のために動員することが重要視されなくなるため、「ボランティア計画のジレンマ」および「ボランティアの機会費用問題」を回避することができる。また、ボランティアによる作業量の限界という問題も、次のようにブレークスルーできる。

たとえば、プロの林業家ならば1人で作業できる面積を、素人のボランティアならば10人かかってやっと作業できるとしよう。ボランティアを森林整備の担い手としてみた場合、ボランティアがプロの10分の1しか作業ができないという非能率性は、作業量の限界を規定してしまうものとして問題視されてしまう。しかしながら、ボランティアを環境教育の対象者としてみた場合には、同じ面積でボランティアはプロの10倍も学習できる(しかも、プロは学習済みだから教育効果がない!)こととなり、非能率的とされていた問題は逆に能率的なものとして評価が逆転する。

以上のように、森林／里山ボランティアの役割は整理されているが、こうした整理はかなり観念的であり、現場のありふれた声に耳を傾けることないまま、一人歩きしてしまっているように感じられる。はたして森林／里山ボランティアは、社会的に期待されているように、環境教育の体験学習者としての役割を担っているのだろうか。それを検証するためには、生身のボランティアにアプローチすることが必要だろう。

2.2 研究の枠組み

「社会的ジレンマ論」から「新しい社会運動論」へ

里山にみられる現状の問題を大まかに概観するには、社会的ジレンマ論が有効だった。しかし、解決可能なジレンマとは本来的にジレンマではないから、社会的ジレンマという問題設定は、ジレンマの解決法を主題化したときに論理矛盾を引き起こす。(永田 1988; 井上 1995)。したがって、どこかにジレンマを解消する鍵があるとしたら、すでに錠は開いているのだ。そして、本研究で取り上げるような里山保全NPOが存在することは、一人ひとりが合理的な行動をとれば里山ボランティアに参加しないはずだから、すでに錠の一部が開いてしまっていること、つまりジレンマ構造が部分的に崩壊していることを意味している。

ジレンマ構造が崩壊する問題を、佐藤嘉倫は「第3オルソン問題」と名付けた(佐藤 1991)²⁰。この問題に対しては、一方で資源動員論からのアプローチが紹介されてきたが(長谷川 1985)、他方の新しい社会運動論のアプローチこそ、問題に挑戦する手法として適当と考えられる。

新しい社会運動論(Theory of New Social Movement)とは、環境保護・エコロジー運動、女性運動、エスニシティをめぐる運動、平和運動、地域分権運動などに代表される1960年代以降の非労働運動型の「新しい社会運動」を対象としてヨーロッパで生まれたパースペクティブ²¹である。アメリカでもこうした運動を契機に新しいパースペクティブが生まれたが、それはヨーロッパのものとなり、資源動員論(Resource Mobilization Theory)と呼ばれるものであった。両者の特徴を比較すれば、新しい社会運動論が社会運動の価値や意味を問うのに対して、資源動員論は戦略的有効性

²⁰佐藤は、いわゆる「オルソン問題」を「第1オルソン問題」と呼び、集団規模が大きくなればなるほど集合財の最適供給量と実際の供給量との差が増大しやすくなるという問題を「第2オルソン問題」として、問題を3つに分化して整理した(佐藤 1991)。

²¹長谷川公一によると、新しい社会運動論も資源動員論も、統一した概念体系や分析枠組み、命題群を共有しておらず、理論というよりアプローチないしはパースペクティブというべき拡散的な水準にとどまっている(長谷川 1990)。

に着目するといえる。また、代表的な新しい社会運動論者のメルッチMelucciの言葉を借りれば、新しい社会運動論がもつぱら「なぜ(why)」動員されるのかを問い、資源動員論は「いかに(how)」動員されるかのみを問題にする(Melucci 1987=1997)。

新しい社会運動論が「第3オルソン問題」の挑戦に有効と思われるのは、里山保全活動を射程に入れながら、社会的ジレンマ論では処理することの難しい価値や意味に焦点を当てているからである。新しい社会運動論は、プラグマティックに(社会的ジレンマ論や資源動員論から)里山保全ボランティアをいかに動員するかという問題を立てるのではなく、視点をずらして問題を捉える視座を提供する。すなわちそれは、解決不能なジレンマを構造を変形しながら真正面に解こうとせず、まず運動の志向する価値や開示する意味に注目して、「なぜボランティアが里山保全活動に参加するのか」という問題にアプローチすることである。

「新しい社会運動論」と「環境問題の社会的リンク論」との接点

こうしたアプローチは、鬼頭秀一が提唱する「環境問題の社会的リンク論」とも通底する。鬼頭は、人間と自然との関係を「社会的・経済的リンク」と「文化的・宗教的リンク」という2つの要素で分析することを提唱した。そして現代社会の特徴を、その2つのリンクが切断されている「切り身」の関係として表現し、伝統社会において典型的であるような、2つのリンクが不可分な形で存在する「生身」の関係を回復すべきであると指摘した(鬼頭 1996)。また、諫早湾や奄美大島などの現在の環境保護運動を調査し、それが一見ムツゴロウやアマミノクロウサギの権利を守る運動にみえるものの、「地元」²²にとっては「かかわりの全体性」を守ろうとする運動だったことを明らかにした(鬼頭 1998)。

Melucciの新しい社会運動論と鬼頭の社会的リンク論とが重なる部分とは、運動の見える領域のみならず、見えない領域にも分け入っていかうとしている点に共通性がある。Melucciは、今日の社会運動が集合行為における潜在的側面(「運動」と可視的側面(「動員」との新しい関係に依拠していることに注目し、次のように政治還元主義を批判する。すなわち、「政治還元主義では、複合社会の出現という行動変化の問題が退けられ、今日の集合行為の社会的・文化的側面が完全に無視されてしまう。その結果、集合行為の中でも測量可能な側面だけに目を向けることになる。いわば、『可視的側面しか見えない近視』状態に陥ることとなる。こうしたことにより、現代の社会運動の可視的行為は、実際には水面下にあるネットワーク内での新しい文化コードの生産に依拠しているということが無視されてしまう。」(Melucci 1987=1997: 41-2)

一方、鬼頭も「環境保護運動における『自然を守る』ということそのものの意味を、普遍的な視点からみた環境の価値の問題に単純に集約せず、地域における文化的・歴史的背景をもったあり方と普遍的な視点の交差するところを、よりダイナミックなカタチで分析していくことが、曖昧模糊でとらえどころがないと言われている、『日本人の自然観』をあきらかにすることになるのではないだろうか」(鬼頭 1999: 166-7)と語り、「潜在的側面」の重要性を指摘している。

Melucciと鬼頭を参照することによって、現在の自然保護運動やこれを含む新しい社会運動においては、顕在的側面(政治的・経済的側面)だけに注目するのではなく、潜在的側面(社会的・文化的側面)も視野に入れる必要があることに気付かされる。とりわけ、本研究で対象とする里山保全運動は、社会的・文化的側面が強い運動であるようにみえることから、こうした視角は重要であ

²² 鬼頭は「地元」に「よそ者」を対比させ、両者が環境保護運動の中でどのように変容していくのかを理論的に考察した(鬼頭 1998)。

ろう。実際、里山保全活動の中には、間伐・枝打ち・下草刈りなどの「生業(サブシステム)」はもちろん、山菜採りや草木染め、蔓・竹細工など「遊び」の要素を含む「マイナー・サブシステム」²³が含まれていることは、社会的・文化的側面が強い現れとみられる。したがって、本研究においては、里山保全運動を皮相的に政治的・経済的側面からのみ捉えるのではなく、社会的・文化的側面にも鋭く切り込んでいくことが求められよう。

こうした分析の視角を得て、本研究では2.1で示した問題意識のもとで、個々の里山ボランティアにとっての活動の意味の実際を明らかにすべく、現場でボランティア活動を行なっている都市近郊の里山保全 NPO に所属し、ボランティアと活動をともにして参与観察を行なうとともに、インタビューを実施することにした。

²³ たとえば、農家や林家の人たちによる伝統的なアユ漁やサケ漁、山菜採り、水田での水鳥猟、養鯉など、主たる生業活動の陰にあっても、脈々と受け継がれている副次的な生業活動のこと。経済的には副次的であっても、当事者の担い手の人たちは情熱を持って、また誇りを持って取り組んでいる(松井 1998)。

3 里山保全NPOの全国的な動向・実態

3.1 歴史的変遷

自然保護運動における里山保全運動の位置

図1は日本における戦後の自然保護運動のタイプ別展開を示したものである。

天然林伐採・山岳道路反対運動とリゾート開発反対運動は、多少のずれはあるものの、ほぼ同時期に2つの大きな波がある。これらの運動の性格は、乱開発から自然を守ろうという反開発運動で窺うため、2度の乱開発期にピークを迎えている。1970年頃のピークは、1957年の国有林生産力増強計画を契機に進んだ奥地の国有林開発、および1965年の新全国総合開発計画から始まる第1次リゾート開発ブームが、自然破壊や渇水期の水源枯渇などの問題を引き起こした時期に相当する。また1990年頃のピークは、1987年の総合保養地域整備法(リゾート法)により促進された第2次リゾート開発ブームの時期に当たっている。また、こうした運動が一定の成果を上げた後も、守られることになった山・森に対する思いや愛着が強い人々が「○○の山・森を守る会」などの形で存続し、行政と一線を画しつつもパートナーシップのもとに定期的に保全活動を継続するケースも少なくない。

ナショナル・トラスト運動は、反開発運動の延長線で森を守るための手法として1970年代半ばから展開し始めた。1980年代半ばからは住民と行政のパートナーシップのもとにみどりを保全する手段として、また、1990年代にかけては基金の設置による行政主導的なローカル・トラストとしても発展してきた。一方、里山保全運動は、1980年代半ばから里山・里地の身近な緑も保全運動の対象として認識され始め、近年急激に盛んになっている。

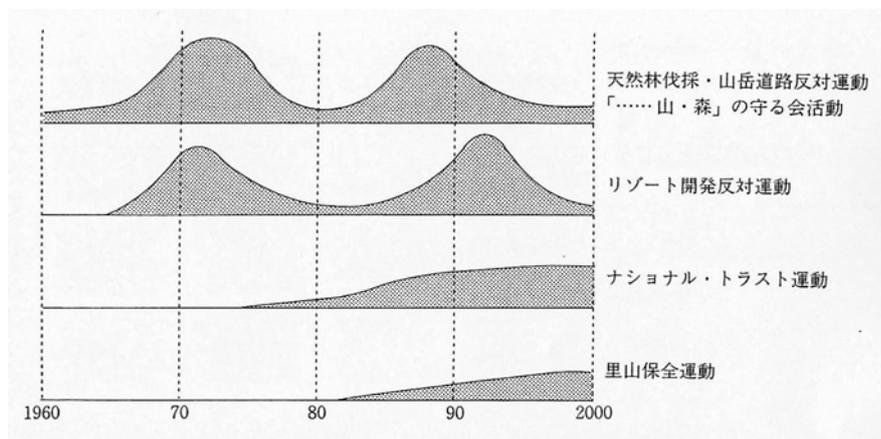


図1 みどり森林をめぐる自然保護運動の変化概略図

出典: 依光(1999: 170)

森林／里山ボランティアの広がり

里山保全運動の盛り上がりを自然保護運動のなかで位置づけると、上のように整理されるが、「里山」よりも「ボランティア」に重心を置くならば、森林／里山ボランティア活動の時系列的な推移を概観する必要がある(ぐりーん・もあ編集部 1999)。

森林ボランティア活動の先駆けは「草刈り十字軍」(富山県)の活動にあると言われている。1974年に、除草剤の空中散布に反対し、その対案として市民が下草刈りを請け負う活動として始まったもので、自然保護と林業支援とを目指した活動である。その後1983年になって「森林クラブ」(東京都)が、1988年には「浜仲間の会」(東京都)が、大雪による林業被害からの復旧に関わったことが発端になって、林業支援としてのボランティア活動を開始した。その間の1986年には、「21世紀の森林づくり委員会」が「国民参加の森林づくり運動」を提唱し、森林ボランティア活動を促進する基盤ができた。

1990年代に入る頃からは、自然保護や林業支援とも距離を置いて、森林で楽しむことを全面に押し出したNPOが登場してきた。たとえば、1989年に活動を開始した「玉川きずなの森」(神奈川県)や、1990年から活動し始めた「雑木林で遊ぶ会」(茨城県)などはそういった団体である。このような団体の活動は、下草刈り、間伐などの森林作業だけでなく、炭焼きやクラフト、野外料理などの遊び的要素が含まれていることに特色がある。都市住民が遠い奥山の林業地まで足を運ぶのではなく、生活圏内の森林(里山)を活動場所としたことも、それまでにはないことだった。こうした森林ボランティアからの流れと、里山保全運動の高まりが合流して、現在、里山ボランティア活動が拡大している。

国・自治体の森林／里山ボランティア支援施策の現在

林野庁は、森林／里山ボランティア活動に関する情報を収集・整理・提供するネットワークを整備するとともに、ボランティアグループ等の研修などを行なう「国民参加の森林づくり推進事業」を、1996年度から実施している(事業期間は、2000年度までの5カ年。)また、1999年度補正予算には「森林の整備活動支援事業」が盛り込まれ、「森林ボランティア活動を行う民間の非営利団体の活動を支援するための資金を、(社)国土緑化推進機構(予定)に造成し、同機構が非営利団体の活動を支援するために助成金を出す」(林野庁 1999)として、およそ3億円が計上された。

このように、国による森林／里山ボランティア支援施策が講じられているほか、自治体レベルにおいても数多くの支援施策が展開されている。たとえば、福島県では「国民参加の森林づくり推進事業」でボランティアグループのネットワーク化が図られている。また、神奈川県では水道料収入の一部を森林整備費用に充当する「水源の森づくり」事業を開始し、その中でボランティアによる森林整備が進められている。そのほか、「フォレストサポートクラブ」支援事業で県民参加を後押ししたり(山梨県)、「里山活性化対策モデル事業」で地域住民の活動を支援したり(長野県)、里山保全モデル事業と「間伐支援隊」の育成を進めたり(愛知県)、「もりメイト」育成など「市民参加の森林づくり事業」を進めたり(広島市)、枚挙に暇がない。

3.2 マクロデータの整理

設立年

里山ボランティア活動の近年の盛り上がりを定量的に把握するため、ここで『森づくり関連市民グループ、団体、機関及び林家リスト(概報)』(森と市民を結ぶネットワーク協会編 1998)の調査データを利用する。この調査は、全国の130の森づくり関連団体を対象にして、活動に参加するために必要な情報等を収集したものである。したがって、これは森林ボランティア活動の調査データであるが、里山ボランティア活動と森林ボランティア活動の相関は高いとみられることから、里山ボランティア活動の動向を概観するにはこのデータは適当と判断した。データから団体の設立年を拾ってみると、図2に示すような結果が得られた。なお、7団体の設立年が不明だったため、以下の結果は123団体についてのものである。また、調査対象の市民団体はほとんどが任意団体であるため²⁴、全国の団体を網羅できていない可能性がある。

これによると、調査対象となった団体は1980年代半ば以降に設立した団体が多く、1990年以降に設立し、活動歴10年未満の団体は81団体(65.9%)で、過半数を優に越える。特に、48団体(39.0%)は1995年以降に設立した団体であり、設立してまだ間もない団体もかなり多いことがわかる。

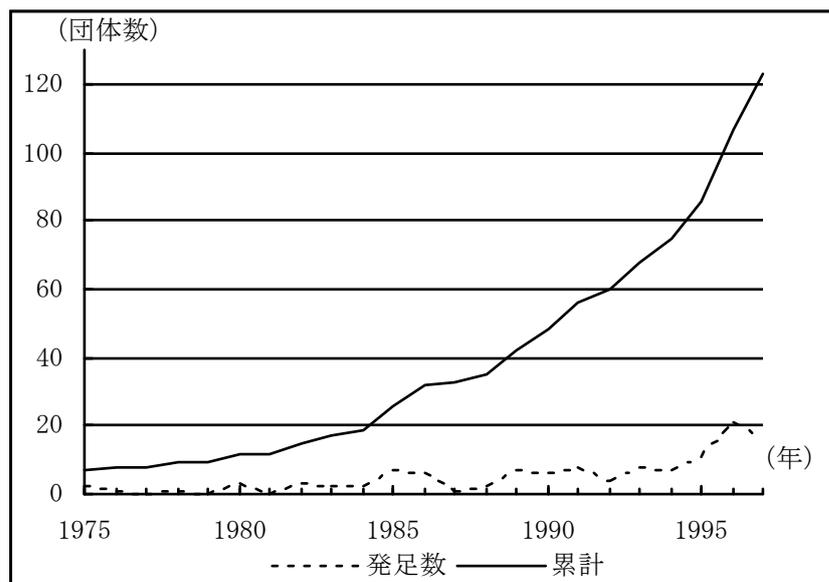


図2 設立年別団体数

²⁴ 1997年10月に林野庁が森林ボランティア活動を行っている市民団体を対象に行なったアンケート調査結果によると(調査対象280団体のうち145団体から回答)、任意団体81%、社団法人8%、財団法人3%、その他法人8%となっている(日本林業調査会編, 1998:21)。

活動内容

同じデータを用いて、活動内容別の実施団体数を整理したのが図3である。

ここでは、間伐・下草刈りなどの作業的・林業体験的活動が多だけでなく、植物観察を中心とした環境教育的活動や、野外料理、クラフトなどのレクリエーション的活動も多くの団体で実施されていることが確認できる。ボランティア活動といえども、かなり遊び的要素が含まれていることが特徴的である。

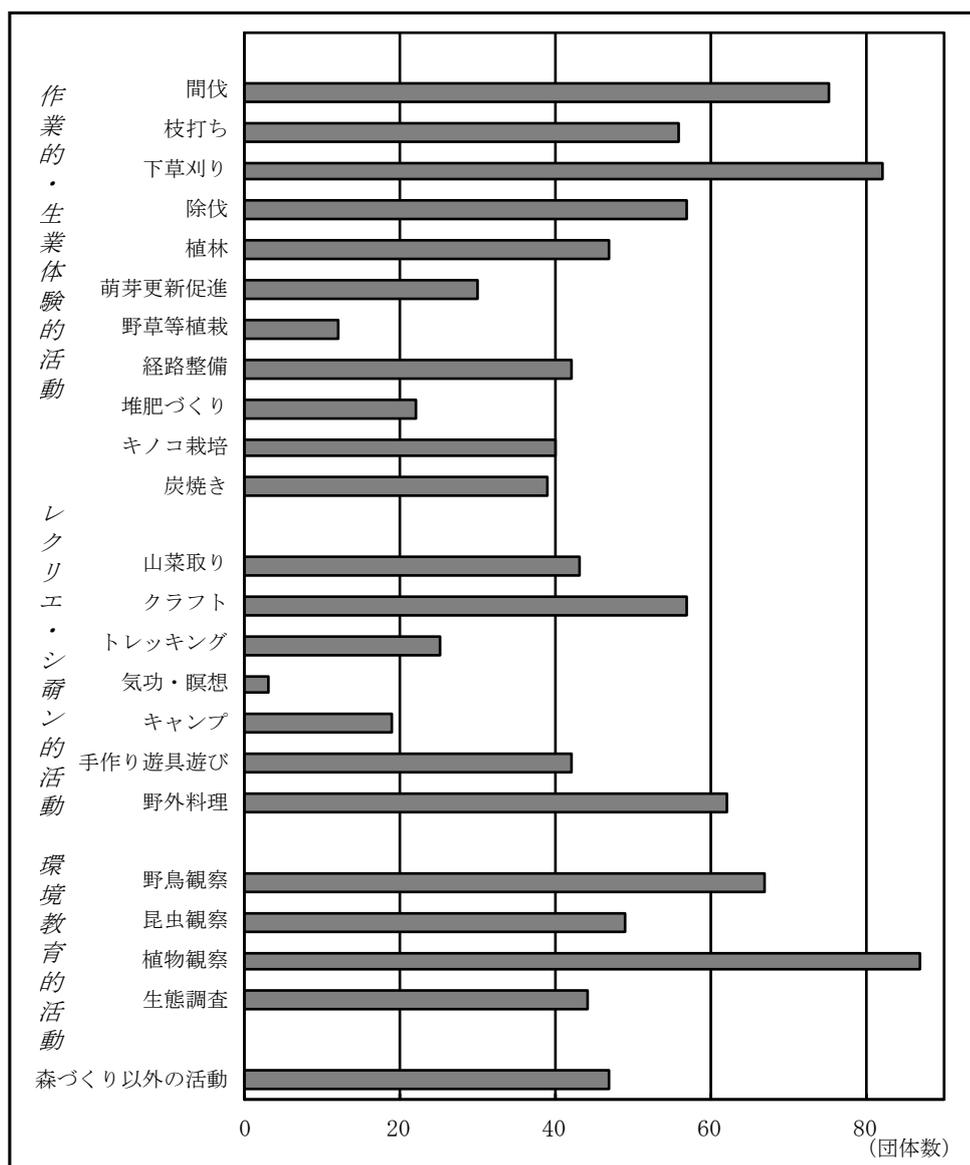


図3 活動内容別実施団体数

4 里山保全NPOの素顔

4.1 調査対象NPOの抽出

調査対象 NPO の抽出にあたって、まず、(田)全国的に団体の存在が公表されていること、(用)活動実績が5年以上であること、(火)首都圏の里山をフィールドとしていること、これらの条件を満たす団体から選ぶことにした。団体の性格がある程度はつきりしている必要があることから(田)と(用)の条件を、また、調査の利便性を考慮して(火)の条件を課した。具体的には、『森づくり関連市民グループ、団体、機関及び林家リスト(概報)』(森と市民を結ぶネットワーク協会編 1998)と『森林ボランティアの風』(日本林業調査会編 1998)に重複して掲載されている団体のうち、団体設立年が 1994 年以前で、活動場所が東京都もしくは神奈川県の団体を選別した。

さらに、選別された団体のなかから、行政との距離という観点からみてタイプの異なる下記3NPOを抽出した。

- ・恩田の谷戸ファンクラブ——市民運動型
- ・町田かたかごの森を守る会／七国山自然を考える会——中間型
- ・せたがや自然環境保全の会——ボランティア活動型

行政からの距離という観点を取り入れたのは、始発として市民運動として里山保全運動が起こり、その運動の結果残された里山の管理を運動団体が担うことになるというケースを想定したからである。つまり、当初はフィールドの保全を訴える運動から始まり、それが成功してからは、フィールドの適切な維持管理を行なう活動へと移行するというシナリオを、一つのプロトタイプとして思い描いたからである。これを単純化すれば、量の確保から質の維持への転換、また市民運動からボランティア活動への転換として整理することもできる。

抽出した3団体をこの想定シナリオに照らし合わせてみると、「恩田の谷戸ファンクラブ」は民の「植物ボランティア」を母体として形成されているため、ボランティア活動としての色彩が濃く、相対的に行政との距離は近い(「ボランティア活動型」)。また、「町田かたかごの森を守る会／七国山自然を考える会」は、当初は市民団体として現在の活動場所の保全を訴えていたが、運動の成果として土地が担保されたので、現在では行政から管理を委託されており、市民運動からボランティア活動へ移行しつつある。このため、行政からの距離という点では、前二者の中間に位置するものと判断した(「中間型」)。

4.2 恩田の谷戸ファンクラブ

概要

1991年、住宅造成地に隣接しながら昔からの原風景をそのまま残す「恩田の谷戸」(横浜市青葉区)がテニスコートになるという噂が立ったので、その谷戸を守ろうという地元住民が集まり「恩田の谷戸ファンクラブ」(以下、「OYFC」(=Onda no Yato Fan Club))が設立された。活動場所の谷戸は公道以外すべて民有地であり、そこで農業従事者が生業を営んでいるので、あからさまな里山保全運動を展開するのではなく、「農家の応援団」を自認しているところが、この会の特徴である。

設立当初は、谷戸を歩きながらの自然観察・調査等の「ながめる」活動の中心だった。しかし、1993年からは地主の許可を得て、畑を耕したり田を復元したりするようになり、「かかわる」活動へと変化した。この頃から、土に穴を掘る伏せ焼き法で炭焼きを始めたが、1997年には会の活動に協力的な農家の指導のもとで、窯を使った本格的な炭焼きも始めた。

団体のメンバーが「恩田の谷戸」と呼ぶ谷戸は、番匠谷と牢場谷という2つの谷戸があり、鶴見川の支流恩田川のさらに支流の奈良川の支源流部に当たる。この谷戸は、横浜市内では数少ないゲンジボタルの自生地であるほか、サワガニやホトケドジョウなど良好な水・水辺環境を表徴する生物が生息するところである。1998年に大規模な農地造成が行なわれ、牢場谷の大部分埋められて谷戸の原風景は消えてしまったが、それでも次の世代に谷戸の景観を残すために活動を続けている。

現在、会員数は約120名であるが、普段の活動に参加する人(コア・メンバー)は平均して20名程度と参加率は高くない。コア・メンバーの構成は、男女比が6:4くらいで、年代は40~50代が中心である。また、会の代表が2人の女性であることは、全国的に見ても非常に珍しい。会の活動は不定期で、第3水曜日の定例会で決めていく。こうしたスタイルを取っているのは、会の活動場所が私有地であるため、活動に際して地権者と調整する必要があるからだ。

なお、参考のため、1999年度の活動報告を資料編に添付した。

調査方法

1998年11月に入会し、雑木林の下草刈り、落ち葉掻き、竹林の間伐、炭焼き、竹炭・竹酢液の販売、ホタル水路の整備、古代米作りなどを体験してきた。インタビューはコア・メンバーを中心に20名に対して行ない、活動への参加動機を中心に話していただいた。以下は、インタビュー結果を中心にとりまとめたものである。

調査結果

(1) 普通の主婦が会を設立するまで——THさん

恩田の谷戸を開発から守りたいと思い、市民運動の必要性を最初に考えたのはTHさん(52歳、女性)²⁵である。

THさんは「もともと普通の主婦」だった。それが、隣人に誘われて植物観察をするようになり、いつしかその隣人と近所に住む人と3人組で、あちこち自然散策に出かけるようになった。そうした散策をするなかで、「かたかごの森」という緑地をフィールドとして、草刈りをしたり、木を切ったりなど

²⁵ インタビューは1999年7月10日および2000年1月7日に行なった。

の管理活動を市から委託されて実践している「町田かたかごの森を守る会／七国山自然を考える会」(後述する)の存在を知った。当時はそのような積極的な保全活動を実施している自然保護団体が稀だったので、「汗をかいて活動をする会があることにショックを受けた」という。この衝撃が、THさんを市民運動の中心へと向かわせる一つの契機となった。

まずTHさんは、1987年に「町田かたかごの森を守る会／七国山の自然を考える会」に入会して「かたかごの森」の管理活動に協力するようになった。また、1989年には民間企業の社宅建設に反対して公園をつくらうという運動——最終的には「かしの木山自然公園」として公園化されて成功した——にも関わり、署名集めなどを行なった。こうした経験を積み重ねて、THさんが初めて運動の中心的な役割を担うことになったのは、自宅近くに計画された町田市成瀬の区画整理事業への反対運動だった。この運動では、THさんら4人が発起人となって「成瀬の自然を守る会」を結成し、反対署名を集め、陳情・請願を行なうなどの典型的な反対運動を進めていった。運動の結果、一部緑地が担保されるなどの成果を上げることはできた。さらに、THさんらが町田市の公園緑地である「かたかごの森」と「かしの木山公園」で市民活動を行っていたことが評価され、強烈な反対運動を展開したにもかかわらず、「成瀬の自然を守る会」は残存した公園緑地の維持管理を任されることになった。

ところで、この「成瀬の自然を守る会」の活動場所は恩田の谷戸と隣接している。町田市と横浜市青葉区の境界に尾根道があるのだが、その道に沿って町田市側に残された緑地が「成瀬の自然を守る会」のフィールドである。THさんはその尾根道を気に入っていたので、子どもが小学生だったときは、子どもを連れてそこを散歩することが多かった。そんなときは、ひととおり尾根道を歩いてから、昼食休憩をとるために横浜市側、つまり恩田の谷戸に下りてから引き返すのが定番コースだった。食事をとりながら谷戸を眺めては、「成瀬の自然を守る会」では町田市側の緑地保全しかできず、恩田の谷戸の保全運動ができないことを残念に思っていた。というのは、かつてその谷戸で「ホテルが異常発生しているのを見て感激した」ことがあり、恩田の谷戸には数多くのホテルが自生することを知っていたからである。

1991年6月、ホテルの異常発生を期待して谷戸に足を運んだが、そのときは期待していたほどは見られなかった。その代わりというわけではないだろうが、THさんらが「OYFC」を設立するきっかけとなる一つの大きな出会いをする。それは、谷戸で農業を営んでいるSZさんとの遭遇だった。THさんはSZさんから、「田んぼや畑をやっている、町田の子どもがいたずらして困る。畦を壊したり、水を抜いたりする。だから、テニスコートやゴルフの練習場に作るんだ」と言われた。いまとっては、「隣の町田から来たというので、それに当てつけたのかもしれないけど」と述懐するが、そのように聞かされたときは、「恩田の谷戸がテニスコートになる」と強い危機感を抱いたという。

町田市在住のTHさんは、恩田の谷戸が横浜市内にあるので横浜市内の自然保護団体に開発反対運動を「やってもらおう」と考えた。そこで、人づてに紹介された「緑区自然を守る会」という自然保護団体に連絡を取ってみると、あいにくその会は活動に終止符を打とうとしているときだった。しかし、その会のメンバーだったMBさんと、MBさんの知人のFJさんの横浜市民2名から協力を取り付けることができた。その後、恩田の谷戸の開発騒動は噂に過ぎないことが判明し、市民団体をつくる必要性は減ったが、せっかくメンバーが集まったからということと、また近いうちに開発の話が持ち上がるかもしれないからという理由で、MBさんとFJさんとそれにTHさんの3名が中心となって「OYFC」を設立した。1991年8月のことである。

会を設立して、THさんはできることから始めようと考えた。SZさんから「町田の子どもがいたずら

して困る」と言われたことが耳に残っていたので、本当にそのようなことがあるのか確かめるため、谷戸にある水田を見回る「田んぼパトロール」を始めた。パトロールといっても、週に3～4回、小学校が終わる時間帯に谷戸をぶらぶら歩くのだった。ほとんどの場合、パトロールは空振りに終わったが、歩くことで谷戸で農業を営む人びと、谷戸に土地を持つ人びとと顔見知りになり、気軽に話せる間柄になった。このようにして信頼関係を築いたことが、後に土地を借りて畑作や稲作を実践したり、農家の指導のもと炭焼きを体験するなど、会の活動を広げていくことにつながっていった。

現在は、ホテルの生息する小川の清掃、雑木林の整備、田畑での耕作などの活動を行なっている。こうした活動は、一見「恩田の谷戸」の保全にあまり関係しないように感じられるが、THさんはそのように捉えていない。「OYFC」のメンバーがフィールドに「貼り付」いて、「実践的な作業をしていけば[行政に]アピールできるだろう」という考えがあるので、どのような動機・頻度で活動に関わるかは問わずに、会員が「かかわる」活動を楽しめるように配慮している。「OYFC」の活動には市民運動の性格は読み取りにくいですが、THさんは、「恩田の谷戸」が担保されることを目標に運動しているのである。

(2)水平型で等身大の運営体制を目指して——FJさん

一方、会の設立発起人の一人であり、現在、THさんとともに代表を務めているのがFJさんである。「環境の市民活動に関わったのは恩田[「OYFC」]が初めて」と話すFJさん(50代前半、女性)²⁶であるが、設立に関わる前から自然環境への関心は高かった。

FJさんは36才になったとき、「人生約70年働けるとして、その半分。また年女だし」という理由で、その年を「人生の節目」と位置づけた。その節目の年に、「自分が成長する過程で、生き物の恩恵をたくさん受けていると感じていた」ので、その「恩返しをしよう」と考えて、「生き物が暮らす場所を確保するお手伝いをするため」に「(財)日本自然保護協会」のボランティア・スタッフになった。

仕事はデスクワークが中心で、内容は各種資料の作成、協会が主催するセミナーの手伝いなどだった。特定のフィールドではまだ活動を始めていなかったため、「デスクワークだけではバランスが悪いかな」と思い、協会が実施する自然観察指導員の講習会に参加し、指導員の資格を取得した。その後、「どこかに所属させてもらおう」と思って、「緑区自然を守る会」に問い合わせたところ、すでに活動は終わっていた。

ところで、FJさんが「緑区自然を守る会」に連絡をとったときは、ちょうどTHさんが恩田の谷戸と一緒に保全活動する人を探しているところだった。そこで「緑区自然を守る会」のMBさんは、FJさんとTHさんが別々に動いていることを知ったので、2人を引き合わせる仲立ちをした。THさんの紹介で初めて恩田の谷戸を見たとき、FJさんは「新鮮に感じられた」という。一目見てすぐに気に入ったFJさんは、THさんらと「OYFC」の設立発起人となった。

1991年11月に「OYFC」は設立総会を開いた。そこで決められた運営方針は、FJさんの意向に沿ったかたちとなっており、それは同時に、その後の会の性格を決定づけることになった。

たとえば、「OYFC」には「規約」がない。このことについてFJさんは、知り合いの自然保護団体のメンバーが「規則でガチガチして嫌だったから」、堅い文言が並ぶ「規約」をつくらなかったと説明する。その代替物として、会員に求められる基本的なルールを示すための「5つの約束」を掲げ、その「約束」を守れることが入会要件になった。「5つの約束」とは、(田)わたしは恩田の谷戸が好き

²⁶インタビューは1999年9月24日に行なった。

です、(月)わたしは恩田の谷戸から学びます、(火)笑顔であいさつをしましょう、(水)ごみはすてません持ち帰ります、(木)環境にやさしい生活を心がけます、以上の5項目である。

また、会費の決定にあたっては、「これこれに使うから会費をたとえば2,000円と決めるのではなく、私ならいくら払うかと考えて1,000円にした」とFJさんが語るように、客観的な算出根拠を明示してそこから導き出すのではなく、等身大の金銭感覚を優先して決められた。

ここにみられる特徴は、水平型で等身大の運営体制を目指していくという会の姿勢である。この姿勢は会の設立以来貫かれており、現在の組織体制も、農業班、水辺班、歴史班、炭焼き班、研修班の5つに分けて、それぞれ自主的に判断して動けるプロジェクト制を採用している。会報『恩田の谷戸ファンクラブ通信』の編集方針についても、「発信する人—受信する人」という図式を排除し、「みんなが勝手なことを言っていることをそのまま載せる」ことにしている。

こうした個人の自発性を最大限に活かして、創造的な活動を生みだしていこうとする姿勢の根源には、「先生のいないグループ学習が、一番みんながいきいきできると思うんです」というFJさんの信念がある。そして、この信念に裏打ちされた会の柔軟な運営が、以下にみられるように多様な人びとを引き寄せている。

(3) 「ながめる」活動が中心だった初期から続けて——FSさん・MEさん・KBさん

1992年から会の活動は本格的に始動した。フィールドとしている恩田の谷戸は、公道を除けばすべて民有地にあるため、設立当初は公道を利用しての自然観察(「谷戸歩き」と呼ばれる)が活動の中心だった。大学の先生や地域のナチュラリストなどを講師に招き、近所の自然が好きな人たちを呼んで観察会を開いていた。こうした「ながめる」活動を主に行っていた初期に入会し、今でも活躍しているメンバーとして、FSさん、MEさん、KBさんがいる。

FSさん(53歳、女性)²⁷は、THさんと同じように、自然観察会を入口として市民活動に関わるというルートをたどってきた。自然散策が好きなFSさんは、町田市内に残された里山的自然を案内してくれる観察会があること広報で見つけ、しばしばそれに参加していた。その観察会の講師を務めていたのが「町田の自然を考える市民の会」という自然保護団体のメンバーだったので、まずそこに入会した。

次に入会したのは、THさんらが代表を務める「成瀬の自然を守る会」だった。この会が区画整理事業への反対署名を集めることをねらって大規模な観察会を開いたとき、その観察会に参加すると同時に、活動場所が家から近いので入会することにした。

そして、1991年に「OYFC」が設立されたとき、「恩田の谷戸」の近くに住み、「成瀬の自然を守る会」の会員でもあったFSさんは、THさんから入会の勧誘を受けた。実のところ「恩田の谷戸」は、FJさんが勝手に「裏山」と呼んでいた場所で、夏の夜にはしばしば子どもを連れてホテル鑑賞に出かけていたところだった。つまり、FJさんにとってはきわめて身近な場所だっただけに、そこで活動するといふのですぐに入会を決意した。

「OYFC」での活動が始まるようになって、「[仕事をしていて]土日しか動けない立場では、あっちもこっちも無理」だから、活動場所が家から遠い「町田の自然を考える市民の会」からは足が遠のいていった。そのような「行くと日帰り旅行になってしまう」ような場所ではなく、「1時間で行って

²⁷インタビューは1999年8月4日に行なった。

帰れる場所」にある「恩田の谷戸」に頻繁に足を運ぶようになっていった。

この距離的な近さと、ソフトな運営体制ゆえに「午前だけとか午後だけとかでもいい」（つまり、一時的な参加でも十分許される）ことが相まって、「OYFC」は FS さんにとって「構えずにいられる」団体として感じられている。FS さんが設立当初からこれまで続けられた理由は、彼女の言葉をそのまま使えば、その「フリー」なところにあるという。

MEさん(55 才、女性)²⁸も、植物を知りたくて自然観察会に参加したのが起点だった。ある日の新聞に、横浜市緑区内にある植物を調べたいので協力してもらえないかという趣旨の記事が載っていた。その記事を読んだMEさんは、植物に詳しくなりたと思っていたので、「調査はできないけれど、何かお手伝いできることはないですか」と記事を書いた「緑区・自然を守る会」の代表に問い合わせしてみた。連絡を取ったのが遅くて調査には参加できなかったが、それが縁で「緑区・自然を守る会」に入会し、定期的に観察会に参加するようになった。その会は、横浜市緑区荏田にあった「赤田谷戸」の開発反対運動を行なっていたけれども、MEさんにとっての定例観察会は、当時、小学生だった子ども3人を連れて、「日曜日にハイキングがてら出かけるという感じ」と受け止められていた。

「緑区・自然を守る会」の活動は、「赤田谷戸」が開発され、フィールドを横浜市緑区新治に移して再出発した。しかし、新治に残る谷戸を「残してほしい」とか「水田を畑にしないほしい」と要望するようになって、地元の人から反発されるようになった。外部からの立ち入りを禁止する看板が立ったり、足を踏み入れると、地元の人から「どこから来たの」と怪訝そうに尋ねられ、警戒されるようになってしまい、活動を続けにくい状況に追い込まれていった。

そのようなとき、新治のフェノロジー(植物相)調査を行なうプロジェクトの話があった。ME さんは一番下の子が小学校に入り、幼稚園の送り迎えから解放されたので、「何かやってみよう」と思っていたので、そのプロジェクトに関わることにした。月に1度の定例観察会のほかに月3回の植物調査を行ない、新治のフェノロジーを3年間かけてまとめあげた。結局、「緑区・自然を守る会」は活動を終わることになったが、そのときに記念として出版した『カタクリの咲く谷戸に』に ME さんらの調査成果が記録されている(緑区・自然を守る会 1991)。

毎月の調査がなくなってつまらなくしていたとき、知り合いから「あなたが好きそうよ」と「OYFC」を紹介された。それで、1993 年くらいに入会して、観察会に参加するようになった。1年くらい経って、「何かお手伝いできることありますか」と中心メンバーに尋ねると、会計を勧められたので、会計係を引き受けることにした。

「OYFC」の活動が、「ながめる」活動から「かかわる」活動(田畑や雑木林の作業など)に活動の重心が移ってきたこと、また勤め始めたり、両親の世話などで忙しいことなどがあって、最近は活動に参加する機会が減っている。それでも継続しているのは、会計係という役割上、年に1度の総会には出席する義務があるものの、それ以外は「来て下さいと言われることがなくて、気が楽だから」ということだ。

KBさん(43 歳、男性)²⁹が市民活動に関わり始めたのは、1991 年に「多摩丘陵野外博物館」の活動に参加するようになってからだった。子どもに本を読んで聞かせる「語りの会」に参加していた

²⁸ インタビューは 1999 年8月2日に行なった。

²⁹ インタビューは 1999 年7月 27 日に行なった。

妻が、その会の活動を通じて 1990 年くらいに「多摩丘陵野外博物館」の存在を知り、一人息子を連れて観察会を楽しんでいた。妻と子どもが楽しそうにしているのを見て、KBさんも約1年遅れで観察会に出かけるようになった。

「多摩丘陵野外博物館」は多摩丘陵一帯をフィールドにしており、特定の活動場所を持っていない。活動に参加するようになって、KBさんはそうした活動形態の意義を認める一方で、「自分の身近なフィールドでも活動してみたい」という欲求も強くしていった。「OYFC」が家の近くの谷戸をフィールドにして活動していることを知り、興味を示していたところ、偶然にも両代表のどちらか(FJさんかTHさん)から勧誘の連絡が入った。「多摩丘陵野外博物館のKBさん」が近くに住んでいることを知って、代表が連絡を入れたのだ。いわば渡りに舟のかたちだったのでさっそく入会し、1992年の秋くらいから恩田の谷戸に足を運ぶようになった。

入会して2〜3年目に、地権者の好意により「OYFC」は畑を借りられるようになった。「多摩丘陵野外博物館」では自然観察会が中心であるが、その観察の舞台となるフィールドは、もっぱら雑木林や農地など人手が加わっている場所である。二次的自然を舞台に活動しているので、「どういう手を加えるのかが分かっていないと、そこにいる生物を知っても面白くないし、観察していても鑑賞しかしていない」、「これだけの手をかけているから、雑木林、谷戸がある、そういう全体性が分かっていないといけない。そうしないと本の知識だけになってしまう」とKBさんは考える。「多摩丘陵野外博物館」では農作業ができないので、「OYFC」が農業を始めた頃は、意欲的に農作業に関わっていた。

しかし、1996年春から「多摩丘陵野外博物館」の事務局を務めているので、現在は「OYFC」よりも優先せざるをえない。「多摩丘陵野外博物館」には代表がないので、KBさんは実質的な代表である。

「多摩丘陵野外博物館」とは、多摩丘陵をフィールドにして定期的に観察会を活動の中心に据えている市民団体である。この会の活動のなかでよく知られているものは、「たぬき実行委員会」である。1990年代初頭、多摩丘陵でタヌキの出没およびタヌキの交通事故死が話題になっていたので、「多摩丘陵野外博物館」の分科会的な活動として「たぬき実行委員会」を発足し、町田市内のタヌキについて綿密な調査を実施した。約5年にも及ぶ調査結果をまとめて、1995年5月には『いまどきの町だぬき』を出版し、そのなかで、タヌキが安全に道路を横断できるよう道路下にトンネルを設置することなどを提案した。この提案が町田市に受け入れられて、タヌキ用のトンネルが設置されたことは、一時期ちょっとした話題にもなった。

1991年から95年まで「たぬき実行委員会」に関わっていたKBさんが、前任から「多摩丘陵野外博物館」の事務局を引き継いだとき、「自分なりに新しいことをやってみよう」と思っていた。その矢先の1996年秋、たまたま東京新聞川崎版の編集長から、「多摩丘陵の自然度が落ちている実態を、『多摩丘陵野外博物館』として、連載というかたちで報告してみませんか」と話をもちかけられた。KBさんは事務局を引き継いでやる気になっていたところだったので、その話を承諾した。連載のタイトルは『丘陵の隣人たち』。毎週日曜日の連載だったため、1年間で49回分をこなし、KBさんがコーディネーターとなり、執筆・写真は会員や知人などで分担した。

この連載は「はっきり言って大変だった」ようだが、それにも懲りずに新たな企画として、1999年に「多摩丘陵野外博物館」のホームページを開設した。それだけならばいまどき珍しくないが、この会のホームページの目玉は、これまで会員から寄せられた自然情報が12年間で約10,000件集まっており、それをデータベース化して公開しているところにある(しかし、このデータベースは下手を

すると悪用されかねないので、パスワードを入れないと開かないように設定されている)。「1つの会が持っているだけでは情報もつたいないので、有効に使いたい」と考えて公開したこのデータベースから、「多摩丘陵の自然の変遷がわかるし、また今でも結構自然度が高いことがわかる」という。このデータについてKBさんは、「素人の集めたデータではあるが、それゆえに面白く、「そこには専門家が目を向けられない情報がある」と積極的に評価している。

このように、電気会社のサラリーマンとして仕事をしながらも、自ら先頭に立って活動を続けてきたことについて、KBさんは2つ理由を挙げた。1つは、「僕自身がサラリーマンだから」。会社員の付き合いは狭く希薄であるのに対して、市民活動には「自分自身が広がる面白さがある」という。たとえば、タヌキトンネルが実現したことを聞きつけた映画監督の高畑勲氏からKBさんは何回か取材を受けたことがある。このような出会いが生まれたのも、「市民活動をしていなければなかっただろう」と述べる。また2つめの理由は、「子どもがいたから」。「いまは自然のなかで遊ぶということが子どもには分からないし、その場所がない」と感じているKBさんは、大人が子どもに遊べる「ポイント[場所]を与えることが必要」と考えている。こうした親の責任を感じているから、活動を継続できるのだという。

(4) サラリーマンの社会参加として——FTさん・OBさん

「OYFC」には、KBさんのように他団体と掛け持ちしている会員が多い。これは、自然環境に関する市民団体に一般的にみられる現象であるようだが、「OYFC」のユニークな点は、他団体で中心的な役割を担っている人が多いことにある。ここに紹介するFTさん、OBさんもそのような「掛け持ち会員」である。ただし、彼らはこれまで紹介した会員とは少し異なり、自然環境の保全という切り口から「OYFC」に関わったというよりも、サラリーマンの社会参加という切り口から活動に参加しているところが特徴的である。

FTさん(56歳、男性)³⁰は、46歳の夏に心筋梗塞で倒れるまで典型的な「会社人間」だった。夜遅くまで残業し、週末も家で仕事をしたり、仕事先とのゴルフでつぶれる日々を送っていた。鉄鋼会社のサラリーマンとして、入社以来わき目もふらずに走り続けていた。そんなFTさんに対し、病気はそれまでの生き方を立ち止まって考えるきっかけを与えた。

一命は取り留めたものの、医者からは「2000ccの車が1500ccになったと思って下さい」と言われた。弱った体にはリハビリを兼ねて散歩するのがよいと考え、まずは週末に近所をぶらぶらと歩き始めた。しばらくすると、「どうせ歩くなら何か目的を持って歩きたい」と考えるようになり、地理や歴史が好きだったので、古い地図を片手に周辺地域を歩くことにした。そして、ノートにはその日歩いたルートを書き記すとともに、撮影した写真を貼りつけたり、神社仏閣・史跡のいわれなどを記録していった。歩いている途中で寺の住職や古くからの住人に声を掛け、昔話を聞かせてもらうこともあった。急に尋ねると怪しまれるかもしれないと思い、FTさんと妻と娘の3人だけが会員の「都筑に学ぶ会」という会をつくり、会名を刷り込んだ名刺も作った。

このような散歩を通じて地元地域に関心を持ち始めていた頃(1993年)、都筑地区センターで開かれた環境問題に関するシンポジウムに参加した。そこには、神奈川県内の市民団体が約20集まっており、そのなかの1つに「OYFC」があった。会場内でTHさん(「OYFC」代表)と話す機会が

³⁰インタビューは1999年8月31日に行なった。

あり、そこで谷戸の地名の話になった。恩田の谷戸には北に「牢場谷」、南に「番匠谷」という2つの谷戸があるが、THさんはそれらの地名の由来を知らなかった。「牢場」の由来について尋ねられたFTさんは、「牢場」がムラ境・クニ境などに作られた牢屋だという説があることを語った。会話の終わりにTHさんから「せっかくだから牢場谷に来てみませんか」と誘われたので、「恩田の谷戸」に行ってみることにした。

FTさんが初めて恩田の谷戸を訪れたとき、会員が15人ほど集まって「谷戸歩き」を行なった。「次もまた来て下さいね」と誘われたので2週間後に行ってみると、FTさんと2人の代表だけの3人しか集まらなかった。予定では「谷戸歩き」をすることになっていたが、自然観察よりも歴史への興味が強いFTさんは、「2週間前も歩いたので谷戸歩きは遠慮したい」と思っていた。このとき、郷土史の本などを読むなかで、恩田の谷戸の北部に横穴墓があるらしいことを突き止めていたので、横穴墓を探しに行くことを両代表に提案してみた。2人を説き伏せて探しに出かけてみると、期待どおり、一見すると防空壕のような横穴墓を発見することができた。その後、両代表から歴史班を作るよう勧められたので、1993年10月にFTさんが班長となって歴史班が誕生した。

発見した横穴墓（「熊ヶ谷横穴墓群」と命名された）は、当初、宅地造成のためにコンクリートで埋められる計画だったが、歴史班が中心となって横穴墓の保全を呼びかけた結果、将来掘り返せるように砂で埋めるように計画を変更させることに成功した。歴史班はこうした横穴墓の保全のほか、「地名調査」で地形と地名の関係を調べたり、「ちょっと昔ヒアリング」で地元農家から昔の生活の聞き取りを行なったりしてきた。

「OYFC」に入会したことは、FTさんが市民活動に「はまる」契機となった。現在、10を越える市民活動団体に所属しているが、最も優先順位が高いのは「早湊川をかなでる会」の活動である。FTさんはこの会の代表を務めている。

「早湊川をかなでる会」を設立するきっかけになったのは、鶴見川の支流にあたる早湊川の再生を願って1994年3月に開催された「よみがえれ早湊川」という住民フォーラムである。その会場で、FTさんは「よりよい街づくりにサラリーマンも休みの日に何かやってみたい」と呼びかけたところ、そこに居合わせた人が数人集まった。その後、彼（女）らが中心となって何回か会合を重ねるようになり、その年の7月に「早湊川をかなでる会」を設立した。FTさんは呼びかけた張本人だったので、世話人を引き受けることになった。FTさんは、「やれる人がやれる範囲でやる」という「OYFC」の精神を受け継ぎ、「早湊川をかなでる会」にも柔軟な運営体制を持ち込んでいる。「水（水質調査やクリーンアップなど）」「緑（自然観察など）」「太陽（歴史学習など）」の3プロジェクト制を敷いているのも、「OYFC」と同様である。

FTさんは、サラリーマンの社会参加についてこう述べる。「福祉・環境・文化などの分野において、地域にいま人は必要なんです。ちょっとでも関心を持ってほしい。行政任せでなく自分たちが、という気持ち。数の多いサラリーマンが貢献できる部分が多いんです。10分の1、100分の1でもいい。……楽しく自分でやれることをやればいい。好きなことは何やっても疲れなから」。

FTさんと同様に、サラリーマンの地域活動という切り口から「OYFC」に関わっているのがOBさん（55歳、男性）³¹である。OBさんは、「恩田はサラリーマンの地域参加、社会参加の一環。その一部分。2割くらいかな」と話す。

³¹インタビューは1999年9月27日に行なった。

OBさんがFTさんと異なるところは、「会社人間」から「地域人間」へと劇的に変化したタイプではないことだ。学生時代からさまざまな市民活動に関わり続けてきた。学生時代に関わっていたのは、当時盛んだったユースホステル運動である。これが「今で言う社会参加の原点だった」と振り返る。結婚してからは、自治会、住宅管理組合、PTAの役員などを務め、子どもが大きくなると、ミニコミ誌づくりなどの活動にも関わるようになった。現在は「OYFC」のほか、「青葉区川を楽しむ会」「日本尊厳死協会」「日本あるけあるけ協会」など、いくつもの市民活動に関わっている。

関係している団体のなかで、OBさんの優先順位が最も高いのは「じゃおクラブ」である。「じゃおクラブ」とは、1991年に生協の男子部のようなかたちで結成されたもので、従来の親父とは異なる生き方を目指す中高年の地域ネットワークである。当初、「じゃおクラブ」の会員は生協の会員である必要があったが、現在はそのような制約もなくなっている。なお、「じゃお」とは「親父(おやじ)」を逆さまから読んだものだ。

OBさんが「じゃおクラブ」に出会ったのは1992年である。このころはOBさんにとって、30年あまりのサラリーマン生活のなかで最もつらい時期だった。異動で採用担当の仕事に就き、主に新卒学生の面接をすることになったのだが、会社の人員計画が「採るより減らせ」だったので、自分の存在意義に疑問を感じてしまったからだ。そんなとき、生活クラブ生協で活動する妻から「あなた、『じゃおクラブ』に行ってみない？」と声を掛けられ、「妻の顔を立ててやるか」と軽い気持ちで出かけたのが入会のきっかけだった。

その後は、「じゃおクラブ」の活動を中心にして活動を四方に広げていった。そうした展開の先で、1996年頃に「OYFC」と出会ったのである。

OBさんが住む鶴見川流域には、流域をフィールドにしている市民団体のネットワーク組織「鶴見川流域ネットワーク」がある。その団体のメンバーが作った『バクの川・我ら鶴見川流域人』という鶴見川の自然を記録した映画があるのだが、その試写会に出かけてみるとFJさん(「OYFC」代表)が司会を務めていた。その会場で、「OYFC」が炭焼きを行なっていることを知り、「これはいい」と思って入会した。

ただし、OBさんは単に炭焼きを体験するために入会したわけではない。かねてから「都市近郊の農業を守りたい」という気持ちが強かったため、農業の営まれている「恩田の谷戸」の保全が、都市近郊の農業を守ることに繋がると考えていた。実際にその気持ちは、「OYFC」以外のところでも実践として表れ、生産者と消費者との顔の見える交流を目指した直売会「旬の元気市」を開くなどしている。

現在、OBさんは「OYFC」で研修班の班長を務めている。OBさんが班長になるまでの研修会では、里山環境が残っている公園や緑地を見学していた。しかし1999年は、OBさんの企画のもと、10月に三宅島を歩いて一周するという研修会に様変わりした。「自分には動物・植物などの専門性は何もない」と語るOBさんは、だから「側面からサポートするような、たとえば、何かをコーディネートするような、そういう方面でお手伝いできればいい」と割り切って考え、自分の得意分野であるハイキングを研修会に持ち込んだ。実はOBさんは、「じゃおクラブ」でもレクリエーション担当を引き受けており、そこではすでに大島、八丈島、三宅島一周のハイキングを成功させていたのだ。OBさんは「みんな環境問題に関心を持ってもらえればいいなあ」と期待しているため、「高さを求めるよりも、すそ野を広げることが大切だと思います」と話す。つまり、環境問題に関する専門性を追求するよりも、関心を持つ人を増やしていきたいと考えているため、谷戸の保全に直接的には関係ないかもしれないが、「側面からサポート」することになる研修会を導入したようだ。

自分の役割を「側面からサポート」することとして位置づけている考えの裏には、OBさんの組織論がある。彼の組織についての考え方は、「組織は創始者の理想を実現するためにある」という言葉に集約される。だから、「OYFC」においても、「両代表の理想を最大限実現させたい。それに賛同できないならば、別の理想を掲げて団体をつくれればよい。……お二人がどう考えるか、お二人の裁定に従おうと思っています」と考えている。

(5) 「濡れ落葉」になる前に「会社人間」から「地域人間」へ——IWさん・KTさん

典型的なサラリーマンの場合、つまり、ほとんど家と会社を往復するだけの毎日を送っている「会社人間」にとっては、定年後の暮らしをどのようにデザインするかが大きな問題になる。IWさんとKTさんは、その問題を地域参加を手がかりにして乗り越えることができた。

IWさん(62歳、男性)³²は、定年の3年前に「おやじの腕まくり」というキャッチフレーズの青葉区の講座に参加した。その内容は、定年後に「会社人間」が「濡れ落ち葉」にならないように、自分の住んでいる地域を知るために街を歩いたり、料理を作って家族に食べさせたり、老人ホームでボランティア活動を体験したり、というものだった。IWさんの言葉を借りれば、「要するに、会社人間とか横浜都民とか言われていて、子どもは女房任せ、町内は知らないよという親父の意識改革を狙ったもの」だった。「会社人間から地域人間になろう」と。

40数名の受講者がいて、そのうちの30名弱の同窓生が「おやじの腕まくり」という会を結成した。年齢構成は50代中心で、主な活動内容は、夏休みに地区センターで「子どもの工作塾」を開き、子どもに手作りおもちゃを教えることである。作業はかなり大変だが、子どもから「楽しかった」「初めて作った」「お父さんが感心していた」などの感想をもらうと、「有頂天になっちゃって毎年やってしまう」と言う。

IWさんは「おやじの腕まくり」を出発点として、その後いくつかの市民団体に所属することになる。まず、先に紹介したFTさんが「おやじの腕まくり」のメンバーだったことから、FTさんが代表を務める「早渕川をかなでる会」に入った。そして、FTさんから紹介されて、1994年頃に「OYFC」に入会した。また、「おやじの腕まくり」のメンバーの一人が「青葉区川を楽しむ会」という川をフィールドにした団体に入会したので、これにも入った。これら3つの団体にはほとんど同時期に入ったが、IWさんの中での優先順位は、「おやじの腕まくり」「青葉区川を楽しむ会」「OYFC」の順でなる。

「おやじの腕まくり」の次に優先度の高い「青葉区川を楽しむ会」では、自称「労務係」として、もっぱら肉体労働を担当しているという。かつて、この会の中心メンバーは女性で占められており、水辺の生物観察と水質調査が主な活動だった。そのなかで、年に1度「子どもを遊ばせるためにいかだ[いかだ遊び]をやっていた」。イカダの製作は力仕事であるから、このときばかりはメンバーの配偶者である「お父さん」が参加していた。その「お父さん」が「疲れた、やめよう」と言い出し、翌年からは中止することに決まりかけていたとき、IWさんらが入会してきた。このため、IWさんは入会直後からイカダの担当になっている。また、4月から11月の間は、月に1回、鶴見川の支流である矢本川の高水敷で草刈りを行なっているが、これも「労務係」のIWさんが担当者となっている。ちなみに、「青葉区川を楽しむ会」には、すでに紹介したFTさんとOBさん、さらに次に紹介するKTさんも所属している。

³²インタビューは1999年9月22日に行なった。

IWさんが「OYFC」にひかれる魅力の一つは「炭焼き」にある。IWさんは長野県の農家に生まれたため、「田起こし、田植え、稲刈りは当たり前環境」に育った。しかし、炭焼きはやったことがなかった。「昔はこたつに炭を入れてな。炭は貴重だったんだよ。炭や薪が燃料だったんだから。その炭が自分たちで作れることに感動してな、はまったんだよ」と炭焼きに夢中になった理由を話す。

以上の活動のほかに、IWさんは、これまで紹介した人には見られなかったタイプの団体にも関わっている。それは、「AOBA EVENT STAFF(略称:A.E.S.)」といって、横浜市北部にある公会堂などの音響・照明を引き受けるボランティア団体だ。これは、「おやじの腕まくり」と同様に、音響・照明が扱えるようになることを目指して開かれた区の講座の受講生が、卒業後につくった市民団体である。

IWさんは、ときどき妻から「よその草刈ってどうすんの。一銭にもならないのに」と言われる。また、「体動かすの好きか嫌いかと聞かれたら、ごろごろしている方が好きなんだけどなあ」と正直に話す。それなのに、なぜこれほど熱心に市民活動に参加しているのだろうか。IWさんの次の言葉から、彼がボランティア活動に関わっている理由がわかる。

「定年後の生活のリズムをつくる時、積極的に打って出ようと考えたんだよ。ジャンルの違った友達、おやじの腕まくりにとっての子ども、A.E.S.にとってのミュージシャンなど、違うジャンルのなかで体を動かしながら、いろいろな人と出会う。そういうリズムを選んだんだよ。……せつかく何かやるなら、楽しまなきゃいけない。草刈り、稲刈りして疲れたじゃあなく、のめり込むと充実感を味わえるよ。そうしないと面白くない。自分で自分を楽しまなきゃいけないし。悪いことは良くなきゃいけない。楽しまないで損でしょ。……でも、市民活動をやってるってのは、自分の思いこみ。他人に迷惑がかかったら考え直さなければいけないけど、ボランティアというより好きでやっているよ。……好きな人が好きなときにできることをやればいい。強制したらできなくなる。下手に義務感を持たせたら続かない。しかし、約束したことは守らないといけない」。

KTさん(59歳、男性)³³について語るためには、OBさんのところでも出てきた「鶴見川流域ネットワーク(略称:TRネット)」について触れておく必要がある。

鶴見川流域にはTRネットというネットワーク組織があり、流域をフィールドとする40以上の団体が所属している。KTさんは、TRネットに関わるいくつもの団体に所属しているほか、上流から下流まで各団体が催す数多くのイベントに参加したことがある。このため、KTさんは「鶴見川の渡り鳥」と呼ばれており、自身もそのように名刺に印刷している。

鶴見川の近くに住むKTさんは、子どもが小さいときは子どもとの散歩、犬を飼ってからは犬の散歩、その他ジョギング、サイクリングなどで、暇つぶしも含め気軽に川辺を歩いていた。それでも、鶴見川に深く関わるようになるまでは、「ゴミが一杯あって水も汚れていて、いつも汚い川だなあ」と思う程度だった。

50歳を越えた頃から、なぜか鶴見川に行くたびに「この川は多摩川の支流なのかなあ」、「鶴見川の源流ってどこなんだろう」と思うようになった。そしてだんだんと「鶴見川の源流を見たい、行ってみたい」との思いが膨らんでいった。

同じ頃、新聞や雑誌を見るたびに、定年後の男性を揶揄する「粗大ゴミ」「濡れ落ち葉」などの言

³³ 1999年7月8日に電子メールをいただいた。

葉が気になるようになっていた。「子どもから親離れを宣告され、カミさんとの会話も途切れがちになり、定年が身近な問題として見え始めるため、これからどうなるんだろう。定年後はどうすればいいんだろう」と、不安な気持ちが大きくなっていった。

1993年のある日、妻から「お父さん、これに参加してみたら？」と声を掛けられ、新聞の折り込みの中から一枚の広報を受け取った。そこには、『『第二回鶴見川・いきいきセミナー』受講者募集』と書かれていた。そのセミナーは、鶴見川流域総合治水対策協議会（建設省関東地方建設局・東京都・神奈川県・横浜市・川崎市・町田市）が主催のする講座で、鶴見川流域の治水・利水・自然環境・歴史文化などを、半年間にわたって座学とウォーキングを通して学ぶというものだった（資料編を参照のこと）。鶴見川の源流を訪れるイベントも組み込まれていたもので、これに申込んで半年間のセミナーを受講することにした。セミナー終了時に、TRネットに所属するいろいろな団体から入会の勧誘があった。KTさんは、セミナーで自分のグループの指導役だった人が代表を務める「鶴見川を再発見する会」に入り、セミナー終了後も鶴見川に関わることにした。

入会后、TRネットが年に4回発行している「鶴見川流域人新聞」が配布されるようになり、そこに掲載されている他団体のイベント情報にも興味をひかれ始めた。そして、徐々に各種イベントに参加するようになり、いくつもの団体の会員になった。「OYFC」も、KTさんが鶴見川流域に活動を拡張していくなかで出会った団体の一つである。

1996年、KTさんは鶴見川を題材にした自作の詩を55編集めて、『鶴見川のうた——渡り鳥のひとり言』という詩集を出版した。そのなかに、KTさんが「会社人間」から「社会人」に変化できた喜びが素直に表現されている。

私は今、『流域の渡り鳥』になってとても良かったと思っています。またTRネットの皆様には、言葉にならないほど感謝しています。ありがとうございます。

当然のことながらTRネットの皆様と親しくなれたのは、とても嬉しいことですが、それ以上に嬉しいことは、新聞等の「粗大ゴミ」「濡れ落ち葉」「ワシも族」の活字が恐らなくなったことです。また「流域の渡り鳥」になって得たことも沢山ありますが、最大のもは自分が変わったこと、つまり会社人間として生きてきたこれまでの価値観や人生観が変わり、これまでより心が豊かになり、生活するのが楽になったような気がします。また会社人間から社会人への、ハードルを超える手がかりを得たようにも思え、定年後も何んとかなるだろー、と考えられるようになったことです。そうです私は今55歳にして初めて、ピカピカの社会人一年生になれたのです。鶴見川よありがとう！！

(6) 「本拠地」で循環型社会を目指す——HGさん

(4)と(5)において4人の50～60代男性を紹介したが、彼らの間に共通するのは、いくつもの市民団体に所属していることである。また、OBさんを除けば、市民活動歴の比較的浅いことが共通している。このことは、「OYFC」の雰囲気や、ネットワーク志向の高いニューカマーにとって受け込みやすいものであることを示唆している。しかし、50代男性であっても、そうしたタイプとして括ることのできない会員がHGさんである。

HGさん(55歳、男性)³⁴は、16歳のときに家出して「東の新しき村」に行ったり、サラリーマン生活を始めてからも、コミュニケーション運動などの循環型社会を目指す運動に一貫して関わってきた。「資本主義の拡張に対して環境運動は撤退戦」ととらえ、「撤退戦のなか、いかにして農家と組んで反対運動をおこすのか」がHGさんの長年のテーマである。

このような考え方は、「OYFC」のソフトな運動戦略とは相容れない。「OYFC」の活動は、そのような新左翼的な運動ではないからだ。だから、HGさんが「OYFC」の活動に参加するようになったのは、運動理念が合致したからではなく、別のところに理由がある。

HGさんは、親が通勤族だったため幼い頃から引っ越しが多く、また自身も通勤族なので「本拠地」を持たない生活を送ってきた。子どもの頃、あちこち転校した経験から、自分の子どもには転校させまいと思って「本拠地」を持つことを決意した。「本拠地」としては、近くに谷戸が残っているような環境が良いと思い、横浜市青葉区に残る「白山谷(はくさんやと)」と呼ばれる谷戸のそばに居を構えた。そして、「自分の住む地域を好きになろう」と、近くを流れる奈良川・恩田川の水系をたどり、水源までさかのぼってみた。奈良川の源流を歩いていると、源流部の谷戸を埋めて福祉施設を建設する計画があり、それに反対する「奈良川源流を守る会」という団体があることを知った。HGさんはその活動に多少関わるようになった。

その後、「OYFC」が家の近くの谷戸で保全活動を行なっていることを知って、1995年末に入会した。HGさんの家のすぐ近くにある「白山谷」周辺は「恩田の森」と呼ばれ、「恩田の谷戸」と連続した緑地帯を形成している。HGさんの家から「恩田の谷戸」は奈良川源流よりもずっと近い位置にあるので、「OYFC」に入ってから、そこでの活動に力を入れるようになった。

HGさんは、現在、炭焼き班の班長である。「OYFC」が行なう炭焼きには、炭窯を使う本格的に炭焼きと、比較的簡単にできる原始的な伏せ焼きがある。会として初めて炭焼きに挑戦したのは、1994年に実験的に伏せ焼きを試行したときであった。それが、1996年から地元農家SZさんと協力して本格的な炭焼きを行なう体制ができ、炭窯をつくることから始め、その窯を使って炭焼きを始めた。雑木の伐採、竹の間伐から、炭材づくり、窯入れ、窯出し、そしてできあがった木炭・木酢液、竹炭・竹酢液の販売まで、炭焼きの工程を一通り実施している。

また、HGさんは農業班でも中心的な位置にいる。循環型社会を目指すHGさんは、「循環農業活動が主軸になるべきなんですよ」、「谷戸に合った作物を植えて、収穫することを1年かけて体験することがあるべき」と語り、谷戸で農業と炭焼きを行なって、循環型有機農業のモデルをつくることを主眼にしている。

農家のSZさんの協力があり、HGさんが入会した当初に比べて、農業班・炭焼き班とも活動が広がり活発になった。HGさんはこれを高く評価している。特に、SZさんが農産物直売所を設置したときに、設置の手伝いをしたり、販売に協力したりしたことは、HGさんの運動理念からみて積極的に評価できる活動であった。ただし、SZさんが会のメンバーとともに農業や炭焼きを行なうのは、少年時代を懐かしんで、昔の体験を復活させようとすることに狙いがあるが、谷戸を保全しようという目的からではないので、HGさんが思い描く理想の関係ではない。

(7) 日頃から農業に関わって生きる——IGさん・YSさん

しばらく男性の紹介が続いたので、ここで女性会員を2名紹介しよう。HGさんと同様に「OYFC」

³⁴インタビューは1999年9月15日に行なった。

では農業班に所属し、さらに自分でも畑を借りて野菜などを育てている IGさんと YSさんである。

IGさん(64歳、女性)³⁵の夫は銀行員だったので転勤が多かった。このため、地域活動にでも関わらないとなかなか友人ができない経験があるので、移り住んだ地域の市民活動に「ぱっと関わるのは全然億劫じゃないんです」と言う。団地に住んでいたときは、そこに自治会がなかったので自治会の設立を手伝ったり、近くに幼稚園がなかったので幼児教育の手伝いをした経験もある。また、女性学級の運営委員を引き受けたこともある。横浜市緑区にある現在の住まいに越してきてからは、PTA活動にも途中から関わったのであまり地域と深く関わっていなかったが、「OYFC」に入会してやっと地域と関わりを持つようになった。

IGさんが「OYFC」の存在を知ったのは、同じ町内に住む HSさんに紹介されたからである。HSさんとは、「(財)日本自然保護協会」が認定する自然観察指導員の資格を FJさん(「OYFC」代表)と同じときに取得した人で、いわば FJさんとは同期生であり、すでに「OYFC」の一会員でもあった。HSさんから「OYFC」のことを聞いた IGさんは、活動場所が家から近いので、すぐさま入会を決意した。

IGさんは、同じ自治会の人7~8名で農家から畑を約30坪借りている。家から歩いて15分程度のところにあり、すでにそこでは5年くらい農業を続けている。それまでも市民農園や学校農園などで農業歴を積んできたので、通算すると25年くらい「畑をやっている」という。畑で取れる作物は、家で食べる量の3分の1程度に及んでいる。

このように農作業に慣れているので、「OYFC」でも農業班に入っている。しかし、IGさんからすれば農業班に選んで入っているというよりも、「農業班にしか関われない」という意識が強い。

ただし、IGさんの農業班への関わり方は微妙だ。「自分が好き勝手にやるのならいいが、自分がしゃしゃり出ると……。ちゃんとやる人がいると迷惑になるのでは」と思っている。畑については、「自分でもやっているのだから、どうせやるならそっちをやった方がいいという気持ちもある」と言う。また、水田は谷戸でしか関わることができないが、特にこだわっているわけではない。ただし、「田畑のやっているところを谷戸の人はちゃんと見て」おり、「そうした様子を見ながら、会の活動の懸命さを計っているようなところがある」と考えているので、ほかの農業班のメンバーの自主性を尊重しながら、「谷戸の人」からは信頼されるように農業班に関わっている。

YSさん(52才、女性)³⁶が「OYFC」に入会したのは、農業という切り口からだった。

YSさんが農業に関わるようになった一番の原因は、自分が体調を悪くしたことだった。1978年に結婚して、その翌年からしばらく体調が優れなかった。微熱、寝汗、だるい、疲れやすいなどの症状があった。医者に行ったり、漢方薬を飲んだり、鍼灸を試したり、「ありとあらゆることをやった」が、検査の結果は「異常なし」だった。医者には、「あなたに差し上げる薬も注射もありません」と言われた。

1987年に無双原理に出会い、講師の先生から「腎臓に魚の毒が溜まっている」と指摘された。九州の佐世保市出身の YSさんは「刺身食べ放題」という環境に育ったが、上京してからは東京の魚は怖くて食べていなかったのだから、それを聞いたときは不思議に感じた。しかし、料理のだしにアゴ(トビウオ)を使っていたことに気づき、だしを使うことを止めて、食材、調味料にこだわるようになった。

³⁵インタビューは1999年7月22日に行なった。

³⁶インタビューは1999年8月9日に行なった。

た。それと同時に「野菜を作らなきゃいけない」と思い、1988年から「畑をやり始めた」。農業は「やってみたら、こんなに楽しいことはなかった」。魚を止め、だしを止め、気がついたら自覚症状が薄れてきた。以来、YSさんはシュタイナー式農業やオイルミーなどを学びながら農業を続けている。

YSさんが「OYFC」と関わるようになったきっかけは、1992年に緑区の環境講座に講演を聴きに来たことだった。その会場で、YSさんは「OYFC」と「レンゲの会」の存在を知った。水田耕作を実践してみたかったYSさんは、「レンゲの会」に入って「田んぼづくり」をやっていた。当時、「OYFC」では農作業を始めていなかったが、会員の拘束要件もなく「アバウトでいい」と言われて、こちらにも入会した。入会当初はたまにしか参加していなかったが、入ってすぐに畑作業が増えたので「恩田の谷戸」にも通うようになった。

YSさんの行為の背景には、「普通の生活者として、庶民としての文化をなくしてはいけない」、「何でもさりげなく、当たり前のようにやりたい」という基本的な考えがある。約2年前から書道となぎなたを始めたり、「50〔歳〕になったら和服党」と宣言して和服を着るのも、そうした考えに基づいている。このため、YSさんは現代では忘れられかけている伝統技術を身に付けており、「OYFC」の活動としては、「手作り味噌」「草木染め」「しめ飾り作り」などの講習会をこれまで開いたことがある。「テレビ、車はないけれど、精米器はある」という言葉に象徴されるライフスタイルがYSさんの生き方である。

(8) 30代は三者三様に関わる——ITさん・KNさん・HSさん

ここまでは、ほとんど50代以上の会員を紹介してきたので、次は30代男性メンバーITさん、KNさん、HSさんを紹介する。

「OYFC」の水辺班班長はITさん(36歳、男性)³⁷である。学生の頃、「漠然と環境問題に関心があった」ITさんは、風力エネルギーの研究をやっていた。会社員になってからは、北アルプスを歩くようになり、「こういう〔原生的な〕自然を守ろう」という気持ちを持っていた。一方で、二次的な自然についてはあまり重要視していなかったため、たとえば「トロの森〔狭山丘陵にある里山〕なんてどうでもいいと思っていた」。

1992年に会社の同僚から、無料でしかも1泊食事付だからバードウォッチング指導者養成講座(「(財)野鳥の会」主催)に行かないかと誘われ、それに参加した。講座の内容は、探鳥会と学習会との組み合わせで、山野の鳥、水辺の鳥の2回シリーズだった。ITさんは2回目の講座のとき、「(財)野鳥の会」に入会した。その後、探鳥会等のイベントに参加するようになった。この頃、家の近所(横浜市緑区)を歩いたら、幼少時と比べて様子が一変していることに驚き、何か自分にできることはないかと考え始めた。また同時に、原生自然だけでなく身近な自然の大切さも感じ始めるようになった。この年にはさらに、「(財)日本自然保護協会」にも入会した。

翌1993年、「(財)日本自然保護協会」主催の「NACS-Jの集い」に参加したとき、FJさん(「OYFC」代表)と出会った。そこで、「OYFC」を知り、FJさんに誘われるままに「谷戸歩き」に参加した。その場で入会しなかったが、それから2ヶ月ほどして「(財)日本自然保護協会」主催の自然観察指導員講習会を受けて指導員の資格を取得したとき、「フィールドを持って自然観察指導員

³⁷インタビューは1999年10月3日に行なった。

をやるのがいいかな」と思い、「OYFC」に入ることにした。

IT さんが入会してから間もなく、「谷戸の人」が空いている土地を指さして「ここを掘ってごらん。水が出るよ」と教えてくれた。メンバーの一人が試しに掘ってみると確かに水が出たので、そこをトンボなどが生息できるようトンボ池として整備した。そのメンバーと IT さんが中心になって水辺班をつくったが、いつの間にか IT さんが引っ張っていかたちになった。そうして自然に水辺班の班長になった。水辺班を手がけた当初、IT さんは水生生物について素人だったが、独学で勉強するとともに、谷戸での調査を積み重ねていった。

IT さんの活動の原動力は2つある。1つは、「子供たちが遊べる環境が必要だっていうのがありますね」、「徒歩圏で安全に自然とふれ合える場所があることを望んでいます」と話すとおり、自然の遊び場がなくなってきたことに対する危機感である。原動力の2つめは「人との出会い」である。「人との出会いというのが大きいですよ。個人では力が乏しいですから。こういう活動に出てくる人は、基本的に肩書き抜き付き合いができるので非常に気に入っています」と語る。

KNさん(35歳、男性)³⁸は、農業班の班長である。

学生時代、KNさんは基幹作物の歴史的推移や農地解放以降の農家の状況に興味を持っていた。卒業後、農家の「エコロジカルで快適な生活」の知恵を、現代に生きる都市生活者に伝えることができたならユニークな運動になるだろうと思い、農家の手伝いを始めることにした。その頃、新聞会社に勤務していたので、勤務体系が固定的でないことを利用して、取材でもないのに農家の人に話を聞いて回ったりしていた。つまり、最初から組織として環境保全に関わろうというより、まずは「向こう側[一次産業者]の日常に飛び込んでやろう」と考えていたのだった。

そのような活動をしているとき、横浜市栄区で農家から畑地を借りられる好機に恵まれた。そこで、「荒井沢緑栄塾楽農トンボの会」という団体を設立し、現在では1.7反の畑を耕している。これは、形態としては援農に近いが、収穫物を会のなかで消費している点と、農家がアドバイザーというかたちで関わっている点が特徴的である。KNさんの分析では、「『森づくり』というスタンスで里山に関わろうという人と、『農』によって里山を考えようという人には、現在相当の開きがあります」と言う。両者とも「保全」「活用」がテーマであるが、後者には前者にはない「自給」もテーマになっているところが大きく違うと見ている。

KNさんが「OYFC」に入会したのは1996年である。知人からその存在を聞いて代表のFJさんに連絡を取り、谷戸を見て回る機会を得て、入会を決意した。農家SZさんの指導のもとで、雑木林の除草刈り、椎茸のほだ木の菌打ち、間伐、畑作業、田んぼの起こし方、田植えの仕方、炭焼きなど、里山で生活する農家の知恵を学んできた。それと同時に、「里山を考える、保全するということは、そこに生きてきた人たちの知恵や暮らしを抜きには語れないことで、農家の生活と谷戸の保全が同時に成されるためにはどうしたらいいのか」が最大の関心事となった。KNさんが「OYFC」で農業班班長として率先して活動している背景には、そうした大きな関心がある。また、現在、この難題を解く手がかりを得ようと、ほかの市民活動にも積極的に参加している。

HSさん(37歳、男性)³⁹は「生物技術者連絡会」という団体を経由して「OYFC」に入会した。

「生物技術者連絡会」とは、環境アセスメントの生物調査を仕事にしている人が中心になって

³⁸ 1999年9月17日にファックスをいただいた。

³⁹ インタビューは1999年8月28日に行なった。

1995年に結成された団体である。生物調査を仕事にしている人のなかには、生き物が好きでその仕事を選んだ人が多い。しかし、環境アセスメントにおいて、植物・動物の扱いは小さい。綿密な調査を実施しても、影響予測の項目では、「影響は軽微である」とか「移植することにより影響を回避できる」などと平板に記述されることが普通である。生き物が好きで、生き物のためになるような仕事に就いたはずなのに、結局は開発に免罪符を与えてしまうことが多いのが現状である。こうした状況を改善すべく、「自分の置かれている地位をどう向上していこうか」という問題意識のもとに集まったのが「生物技術者連絡会」である。HSさん自身は生物調査員ではないが、建設会社で環境アセスメントに関わる業務に携わっており、こうした現場サイドの問題に関心があって参加している。

この「生物技術者連絡会」と「OYFC」の接点を説明するには、「OYFC」が農地改良と格闘してきた歴史について記す必要がある。

「恩田の谷戸」は、「OYFC」の設立以来、農地改良が進行するなかで保全活動を行ってきた。番匠谷は1992年と1995年の2度にわたり、農地改良工事が行なわれた。造成に際して水路が埋め立てられたが、地権者と交渉した末に了解を得て、小川を復元した（この小川は「復元の小川」と呼ばれている）。一方、牢場谷は1997年から農地造成が始まり、「OYFC」が活動していた田畑やトンボ池などが失われた。ホタルが発生する小川も埋め立てられたが、地権者との協議の結果、30m程度を原型を留めたかたちで残すことができた（これは「ホタル基金の小川」と呼ばれている。理由はSDさんを紹介するときに記す）。また、U字溝にする計画であった水路部分については、ホトケドジョウが生息できるように、素掘りの小川に変更した（これは「ホトケドジョウの小川」と呼ばれている）。

「生物技術者連絡会」が「恩田の谷戸」に最初に関わったのは、番匠谷が造成される前に水路の調査に入ったときである。この会の代表が「OYFC」のKBさんと懇意だったので、協力することになったようだ。その後、「生物技術者連絡会」のほかに「よこはま水環境研究会」、さらにHSさんが勤務している会社からも協力を得て、小川の復元工事を実施した。

HSさんと「OYFC」との関係は、工事の手伝いという一時的な関係で終わるはずだった。しかし、1997年4月にたまたま恩田の谷戸の近くに引っ越したので、「復元の小川はどうなりました」と尋ねに行ったり、補修管理の作業を手伝ったりするうちに、「OYFC」に入会することになった。

HSさんは炭焼き班の中心人物で、1999年2月に行なった炭焼きでは現場責任者を担当した。このときの経験から、炭焼きでは「責任者にかかる負担が大きい」と感じている。「[ボランティア活動だから]関わるときに関わればいいと言われても、それは難しい」と、現場に責任を持つ者としての苦勞を述べる。ボランティア活動として炭窯を使った炭焼きを行なうには、10名程度の人数が集まるのが望ましい。そのため、「『[次回の炭焼きに]来る人、手を挙げて』と尋ねて、『ハイ』が5人しかいなかったら、『私も行かねば』と思わざるをえない」というのがHSさんの本音だ。ボランティア活動だから強要できないところで、「どうやったら会員が参加してくれるかが問題」と責任者として感じる困難を吐露する。「生活の中でやれることをやればいい」ということと、「必要なことをやらないといけない」ことを、どのように調整していくかという問題が悩みの種となっている。

(9) 40代は散歩でばったり——TMさん・SDさん・NWさん

30代男性会員は三者三様に「OYFC」に集まってきたが、40代男性——TMさん、SDさん、NWさん——は、みな散歩が好きで、散歩のときに「OYFC」を知ったことが共通している。

TMさん(42歳、男性)⁴⁰は、1996年に「恩田の谷戸」のすぐそばに引っ越してきた。家族で谷戸に散歩に行くと、「OYFC」が立てた「田んぼにはいらなくてね」「かわくまであぜにのらないで」という看板が目についたので、会の存在は知っていた。1997年の早春に谷戸を訪れたとき、炭焼きの材料にするためのクヌギを伐採しているところに遭遇した。そのときに会員から勧誘されたので、その場で入会した。

学生時代は地質学が専門だったので、現地調査のために野外に出ることが多かった。卒業後は建設会社に入り、仕事やプライベートで、白神山地、屋久島、小笠原諸島などにも出かけた。自然には親しみを感じていたが、時間的な制約と、転勤で住む場所をあちこち変えていたため、入会するまではほかの市民活動に関わる機会はなかった。

実家はむかし兼業農家だったから、幼少時は田畑で遊んだ経験がある。「私自身は農業にこだわっているわけではないんですよ」と言うが、むかし見た農作業のやり方を体で覚えているので、農業班の重要なメンバーとなっている。

TMさんが両親を恩田の谷戸に案内したら、「昔の故郷のようだね」と言われた。いまは残っていない故郷の谷戸は、原風景としてTMさんの脳裏に残っている。ドジョウやモロコ、ナマズがいたり、食虫植物であるモウセンゴケが生えていたりした。それが70年代になって、開発の波が押し寄せてきた。「私たちは小学校の時にそういうところで過ごした最後の世代かもしれないね」と語る。そうした意識から、しばしば6歳になる息子を「恩田の谷戸」に連れてゆき、一緒にカブトムシやクワガタを捕まえている。谷戸で捕ったカブトムシの幼虫は家で飼って、「殖やしてから谷戸に放したいなあ」と考えている。また、谷戸で拾ったドングリを庭で育てて、大きくなってから植え戻すことなども行なっている。

SDさん(42歳、男性)⁴¹は、昔から山が好きだったので、学生時代にはサークル仲間と2000～3000m級の山を求めて山登りに出かけていた。今でも日帰り登山を楽しむほか、散歩も趣味にしている。

1988年、「恩田の谷戸」のそばに引っ越してきた。散歩がてら近所を歩いていたら、SDさんの原風景である谷戸を発見した。3歳から25歳まで横浜市港北区で育ったSDさんにとって、谷戸は「当たり前の世界」だった。その原風景がみるみるうちに消失していったなかで、「恩田の谷戸」は「昔のまんまじゃん」と思わせる景観が残されていた。

TMさんと同様、SDさんも谷戸を散歩しているときに「OYFC」の看板を見つけて、会の存在を知っていた。また、小川を復元したことが新聞に載ったのを読み、会の活動に感心していた。しばらくは存在は知っていたし、気にのなってもいたけれど、関わってはいなかった。

あるとき友人から、町田市能ヶ谷にある「能ヶ谷谷戸」が宅地造成で消失することを聞かされた。その場所に行ってみると「けっこう大木がいっぱい」で、「特に秋は夕日とカキの木の風景が素晴らしかった」。造成されるまで1年ばかりの時間があつたので、何度も足を運んで、消える間際の谷戸の景観を写真に納めた。

ある日、「能ヶ谷谷戸」の開発反対運動に関わっていた人から、自宅近くの「恩田の谷戸」でホテルが見られることを教わった。「ホテルを見たい」と思ったSDさんは、その人から「OYFC」のKBさ

⁴⁰インタビューは1999年8月9日に行なった。

⁴¹インタビューは1999年7月31日に行なった。

んを紹介された。1997年、SDさんはKBさんと連絡を取り、「恩田の谷戸」のホテルの発生場所を案内してもらった。そこで、入会することを決めると同時に、「恩田の谷戸ホテル基金」にお金を寄付した。

「恩田の谷戸ホテル基金」とは、ゲンジボタルの自生地となっている恩田の谷戸を流れる小川が、農地造成にともなって消失するという話が生じたので、小川の保全を目指して設立されたものである。結果的に買い取りはできなかったが、30m程度の小川(「ホテル基金の小川」)を自然のまま残すことができた。

入会してもしばらくは自治会の役員をやっていたために、ホテルの発生期以外は、ほとんど活動には参加していなかった。しかし任期が切れてからは、子どもと一緒に「OYFC」の活動に参加することが多くなった。SDさんは金融機関に務めていて、「資本主義のまっただ中にいるから、プライベートな時間は、それと対極的なことをしたい。数字に追われない時間を過ごしたい」という欲求がある。だから、「外で体を動かすのが好き」であり、「雑木林の管理にエネルギーをかけたい」と思っている。下草刈りなどの管理作業は、「お金もかからず、極めて体にいいレジャー」とみなしている。

また、「仕事ではプライベートな付き合いはできない。それだけの人間関係から脱したい」と考えているので、こうした活動に関わることで、「職場と家庭だけの世界」から抜け出ることができることにも楽しさがある。自治会の役員を務めたときも、「肩書きを捨てて一人の住人としてつきあえたのが、結構楽しかった」と振り返る。会社の上下関係とは違う人間の付き合いは、「煩わしいところもあるけれど、プラスマイナスを考えたら、プラスが多いと思う」と評価している。

NWさん(53歳、男性)⁴²は、「恩田の谷戸」の近所に引っ越す前の2年3ヶ月間、秦野市渋沢に住んでいた。NWさんが散歩を楽しむ始めたのは、身近に自然があふれている渋沢に住むようになってからだ。道があるところはすべて歩き、そこで見た景色をもとにオリジナルの地図を作った。また、近所の豆腐屋の主人から蔓細工を習い、散歩中に採集した蔓で籠を編む楽しみを覚えた。同様に、NWさんの妻も夫とともに歩くうちに散歩が好きになり、リースを作ることが趣味になった。それまで都会暮らしが長かった彼女は、「渋沢に越して、人生観が変わった」、「身近なところに自然があって、大好きになった」と話す。

1996年に谷戸の近くに引っ越してきてからも、NWさんはすっかり散歩がお気に入り、近所を歩いて蔓や竹を採集して蔓細工・竹細工に仕上げたり、本職の画家として近所の自然を絵の題材にするになどしていた。

ある日、「恩田の谷戸」を散歩していたら、会のメンバーが草刈りをしていたので、「何してるんですか」と話しかけた。そのときに少し立ち話をする機会があり、「OYFC」の存在を知った。1998年の雪が降り積もったとき、写真を撮りに谷戸を歩いていたら、同じように写真撮影に来ているKBさんがいた。NWさんの妻が「谷戸でなにかやっている会があるのよね」と話しかけてみると、KBさんは「私も入ってますよ」と答えた。「誰でも入れるの?」「入れますよ」「誰に言えばいいの」「私でも構いませんよ」と会話が続き、NWさん夫婦は入会することにした。「散歩が好きだから、会に入らなくても[谷戸を]歩いているけど、みんなで草刈りして食事するのは楽しいね」と、妻は入会してからの感想を述べる。

⁴²インタビューは1999年8月18日に行なった。

NW さんの仕事には平日・休日の区別があまりないので、会の活動日となる休日でも「仕事をしなければいけないときもあるから、責任ある仕事は引き受けられない」と言う。また、「いつ引っ越してしまうか分からない」ので「深入りすることはできない」と、自分のスタンスの取り方について述べる。

(10) 「ボランティアには責任がある」——KUさん

KUさん(女性)⁴³は、「OYFC」に関わる前から、植物管理のボランティア活動を実施してきた経験がある。

最初は、社宅に生えている植物の管理から始まった。テレビ番組「趣味の園芸」などで勉強しながら、次第に植物の知識を増やしていった。その後、ハーブ園の維持管理に10年近く携わったり、夫の仕事の関係でアメリカに渡ったときも、郡立ハーブ園で施設ボランティアとして活動した。

「私が好きなのは有用植物なんですよ」と語るKUさんは、家の庭に約140種の有用植物を植えている。そんな植物好きのKUさんに対して、「OYFC」を紹介したのは家主である。実は、家主の兄はIGさんに「OYFC」を紹介した会員のHSさんなので、家主は会のことをよく知っていたのだ。

「OYFC」代表のTHさんは、「恩田の谷戸」に生えている植物のことならば誰にも負けない「本格派」である。民俗植物学に関心があるKUさんは、入会してTHさんという「植物好きの本格派」に出会えたことを嬉しく思っている。ときどき、THさん、MEさんと3人で植物調査をするのがとても楽しいと感じている。

一方、アメリカでのボランティア活動を通じて、「ボランティアには責任がある」ことを実感しているので、「やれる範囲でやれることをやる」という考え方と衝突することがある。会員が活動日にあまり集まらないときは、「作業はきつい。みんな、なかなか作業はやってくれない」という思うこともある。

(11) 普段は触れることのない世界を求めて——TNさん

TNさん(26才、女性)⁴⁴は小学校に勤めている。1998年夏、横浜市教育委員会主催で教員向けのボランティア体験講習会があった。環境コースと福祉コースがあつて、環境コースに申し込もうと思ったが、定員オーバーで福祉コースに参加した。福祉コースでは地域作業所に行つて、ボランティア活動を体験した。TNさんが参加できなかった環境コースでは、いくつかの自然保護団体がボランティア活動のプログラムを提供することになっていて、「OYFC」は、そうした市民団体の一つだった。

講習会の終了後に成果を発表する会合があり、その場にOBさんが「OYFC」の研修の様子を報告しに来ていた。環境コースに興味があつたTNさんがOBさんに声を掛けてみると、OBさんから「恩田の谷戸」に来よう誘われて、秋の稲刈りから活動に参加するようになった。

TNさんは茨城県出身で、子どもの頃は周りに自然が残されていたので、「自然を守りたいなあ」という漠とした気持ちがあつた。学生時代は国文学を専攻し、植物に関心があつたので、卒論では「源氏物語と植物」をテーマにし、日本人の自然観について論じた。そうした自然に対する関心は衰えず、今では俳句を詠むことを趣味にしている。また、生け花を5～6年習っていたので、「一応、[人に]教えられる資格」を持っている。

⁴³インタビューは1999年9月14日に行なつた。

⁴⁴インタビューは1999年7月13日に行なつた。

「OYFC」への入会動機は、このような自然への関心からだけではない。就職してから横浜市でひとり暮らしを始めたので、「周りに知り合いが少なく、近くの人と関わり合いたいという気持ちもあったと思う」と話す。実際、TNさんは多方面の活動に関わっている。たとえば、手話、英会話、コーラス、天文などのサークル活動に関わったり、「野毛大道芸祭」や「YOKOHAMA 本牧ジャズ祭」「いかだで遊ぼう谷本川」などにイベント・スタッフとして参加したりしている。

だから、「OYFC」での楽しみは、「普段、関わらない人と共同作業できる」ことや、「上司でも友達でもない年輩の方と楽しめる」ことに見出している。また、「作業自体、つまり体を一緒に動かすのが好き」でもあるが、「いろいろな話、たとえば、自然のことだけでなく、ビジネス系の話なども面白い。会社で働いたことがないから」と話すように、普段は触れることのない世界の話の聞けることにも楽しさを感じている。

4.3 町田かたかごの森を守る会／七国山自然を考える会

概要

1975年、七国山のみどりに関心を持つ地元の小学校PTA11名が「七国山自然を考える会」を設立した。活動場所は東京都により「七国山緑地保全地域」(以下、「七国山」とする)に指定され、緑地として永続的に担保されている。設立当時から自然観察・調査やごみの清掃などを実施してきたが、現在は東京都とパートナーシップを組んで竹林の間伐、維持管理活動を実施しているほか、萌芽更新の実験なども行なっている。

一方、「町田かたかごの森を守る会」は、1985年に「七国山」近くのカタクリの群生地を保全するよう「七国山の自然を考える会」の会長が町田市に要望書を提出し、翌1986年に地権者と市との間で10年間の借地契約が締結されたのを機会に設立した。「七国山自然を考える会」を母体に成立しているので、メンバーの多くは2つの会に所属している。設立当初は民有地であった「かたかごの森」も今では市が買収して市有地となっている。カタクリ、キツネノカミソリ等の群生地である雑木林の保全が会の中心的な活動である。

2つの会の会員数は現在65名程度であり、コア・メンバーは20名程度である。ただし、「七国山」での活動には、東京都が都民との連携を目指して募集した「自然ふれあいボランティア」が20名程度が加わる。コア・メンバーの構成は、男女比が7:3くらいである。年代別では60代が最も多く、40～50代も少なくないが、会長・副会長・事務局長などの幹部はほとんど60代以上である。また活動日は、東京都や町田市と連絡調整して決められる。2つの会ともおよそ月に1回程度のペースで活動している。

なお、参考のため、1999年度の活動計画を資料編に添付した。

調査方法

1999年3月入会し、竹林の間伐、萌芽更新調査、林内の清掃、付近の小学生への環境教育などを体験してきた。インタビューは12名に対して行ない、活動への参加動機を中心に話していただいた。以下は、インタビュー結果を中心にとりまとめたものである。

調査結果

(1) 先進的なパートナーシップ型運動——KSさん

「町田かたかごの森を守る会／七国山自然を考える会」(以下、「かたかご／七国」とする)の会長はKSさん(76歳、女性)⁴⁵である。KSさんは会の立ち上げから一貫して中心的な役割を果たしてきた。まずは彼女の活動歴、すなわちこの会の歩みを辿ってみよう。

KSさんは1960年に杉並区から町田市に引っ越した。当時、家の周りは「自然がいっぱいで、タヌキやイタチが庭に遊びに来ていた」ような環境で、また森林が多く残っていたので、「昼間も薄暗くて、夜は一人では歩けないような状態」だった。しかし、間もなく公団や大手民間企業による大規模な宅地開発が始まった。

「町田の緑に憧れて、子どもをその中で育てたいと思っていた」のに、みどりは次第に失われていった。そのような状況を憂い、子どもが小学校に上がったとき、町田市教育委員会主催の市民講座「町田の自然教室」に参加した。その講座で、講師を務めていた「多摩丘陵の自然をまもる市民

⁴⁵インタビューは1999年9月16日に行なった。

の会」の代表を知り、それから3年間ほど、その人に付いて自然観察をしながら動植物の勉強をした。

1975年5月、近所にある「七国山」が開発されるという噂を聞きつけたKSさんが中心になって、「七国山」の自然を守るために「七国山自然を考える会」を立ち上げた。当時、KSさんはPTAの副会長をしていたので、PTAの仲間11人が発起人となった。

KSさんによると、その頃は自然保護団体が「雨後の竹の子のように」設立されたが、行政・開発業者にとっては「何でも反対する過激なゲリラ的な活動団体」とみなされていた。また、一般には地権者からも「お前ら、木一本持っていないじゃないか、何を言う」と反発されていた。「地主さんだって好きで開発するわけではないはず」と思っていたKSさんは、「反対運動はやめよう。地主さんと腹を割って話をし、どうやったら緑を守っていけるか考えよう」と決意し、その考えが会の運動方針となった。

守りたいと思っていた七国山周辺については、会を発足させた年の12月に東京都から「七国山緑地保全地域」として指定され、将来にわたって担保されることになった。「七国山の自然を残したい」という設立当初の目的はすぐに達せられたが、KSさんらの運動が大きな成果を上げるのは、「七国山」が保全されてからである。

1982年、「七国山」に隣接するところにマンション建設の話が持ち上がった。このとき、建設は止めようがなかったので次善の策を検討しようと、会が独自に行なっていた植生調査結果をもとに、東京都と開発業者に保全のための陳情書を提出した。それが認められて、都および業者と貴重な植物の保全方法について話し合うことができた。最終的には企業側が理解を示したことで、マンションを高層化して緑地面積を増やすとともに、開発によって失われるはずだった樹木・野草を約800本移植することに成功した。

このマンション建設問題では、企業側から大きな譲歩を引き出すことに成功し、会の活動としては一定の成果を上げることができた。しかし、これよりも大きな成果を上げたのが、25年にわたる活動のなかでKSさんが「一番の成果」と自負する「かたかごの森」の保全である。

「かたかごの森」は、もともと地権者によって大切に保全されたカタクリが群生する民有地だった。KSさんがその場所の保全に乗り出した1985年当時は、盗掘によってカタクリの株数が年々減少しているときだった。「かたかごの森」は「七国山」から地理的に少し離れていたものの、こうした状況を知ったKSさんは、意を決して地権者を訪ねてみた。地権者に今後カタクリをどのように保全しようと考えているか尋ねると、先祖伝来の森なので残せば一番良いこと、相続が発生すれば土地を手放すかもしれないこと、多忙のために管理に手が回らず盗掘されていることなどを聞くことができた。維持管理が問題になっていることが明確になったので、KSさんは所有者に対して、場所の管理は「七国山自然を考える会」が引き受けるので、市と借地契約を結んでどうかと提案した。すると、所有者から「そういうことが可能なら考えてもよい」と返事をもらえたので、今度は市に地権者との借地契約を結ぶよう要望書を提出した。

すでにこのとき「七国山自然を考える会」は、みどり保全に貢献していた実績が買われ、行政サイドから信頼できる団体として認識されていた。また、「民権の森」という緑地の管理団体となって草刈り作業を行なっていたので、管理作業を任せられる団体としても評価されていた。このため、KSさんの要望は実現され、1986年、町田市は地権者と10年間の借地契約を締結した。現在では、こうした行政とのパートナーシップにより市民団体が公園緑地の管理作業を行なうことも珍しくないが、当時においては画期的な試みだった。

借地契約が結ばれたことを契機に、「かたかごの森」の管理作業を行なう団体として「町田かたかごの森を守る会」を発足させた。メンバーはほとんど「七国山自然を考える会」と重複していたが、このように2つの名前を掲げることにしたのは、「七国山」が東京都の指定地域である一方で、「かたかごの森」は町田市と借地契約した場所であるから、便宜的に使い分ける方が良いと判断したからである。

借地契約後、盗掘防止のために「かたかごの森」は周りを柵で囲われ、カタクリ、ヤマユリ、キツネノカミソリが開花する時期に一般開放される以外は、原則立ち入り禁止とされた。その柵のなかで、「町田かたかごの森を守る会」は市から委託される管理作業を着実にこなしていった。1994年に地権者が死亡して相続が発生したとき、市が「かたかごの森」を買収して市有地となったのは、会の活動が評価されたことの証しであろう。

KSさんは数年前に体を悪くしてから、頻繁には活動に参加できなくなった。それでも、11名で会を立ち上げたときの情熱を失わず、「かたかご／七国」の会長として、精神的支柱となって活動している。彼女の衰えない熱意は、「七国山自然を考える会」創立20周年と「町田かたかごの森を守る会」創立10周年を記念して作成された『記念誌』のなかの次の文章に表れている。

人間がみどりを保護しているのではなく、私達人間がみどりに保護されて生きてると云う事実を自覚し、再認識してみどりに感謝しなければならないのです。そしてそれを持っている地主さん達の苦労をよく理解してほしいのです。私達市民と行政と地主さんがしっかり手をつなぎ、共にみどりと云うものを考えて行くのが、今後の活動の課題だと思います。……一度失った自然は再び取り戻すことは出来ません。緑は人類はじめあらゆる生物の命のみなもです。みんなで大切に、みんなで考えて行かなければなりません。私達の可愛い子孫の為『次の世代』に少しでもよりよい環境を残してやるのが、私達大人の義務でもあり責任でもあります。さあ皆さん『目覚めて』下さい。そして『立ち上がって』下さい。

(2) 退職後の余暇潰しから生きがいへ——KYさん・KOさん・TUさん

KSさんは病気のため、最近は通常の活動日にあまり参加していない。普段は、KYさん、KOさん、TUさんなどの60代男性幹部が活動を引っ張っている。彼らの共通点は、定年後の余暇の過ごし方として、ボランティア活動を選択したことである。

KYさん(68歳、男性)⁴⁶は、現在「七国山自然を考える会」の事務局を引き受けている。しかし、会に関わる前は「環境問題に対して積極的に行動しようと思っていなかったし、意識もなかった」と言う。

KYさんは定年になる3年くらい前から、「定年後に何をしようか」と考えていた。趣味でよく山に登っていたが、身近なところで何かできないかと思案していた。そのような時期(1993年)、「かたかごの森」の開放日にカタクリを見に行っただ。そこで、KSさんと話をする機会があり、彼女の環境保全に対する熱意に感動し、「お手伝いしようか」と思って会に入った。

KYさんにとっては、余暇を楽しく過ごすことが活動に参加するきっかけだった。それが、「なんと はなしに首を突っこんじゃったけど、今となってはこれがなくなってしまうと、何をやっていいのかな

⁴⁶インタビューは1999年9月20日に行なった。

と思うよね」と話すように、今では大きな生きがいになっている。とはいえ、「抜けるに抜けれない感じになっている」とか、「これをやりたいという強い希望でやっているわけではないけど」と率直に述べるとともに、「責任感を持って、俺がやらなければと思っては、ボランティアをやっていけないよ」というスタンスの取り方は、KSさんと大きく異なるようにみえる。

KYさんが幹部の一人になったのは、「七国山自然を考える会」が設立20周年を迎えたときに『記念誌』を作ったことがきっかけになった。このとき、メンバーのなかでワープロを使える人が少なかったため、仕事でワープロを使っていたKYさんは重宝がられて「引っ張り込まれた」。

ところで、KYさんが事務局を務めている「七国山自然を考える会」の活動は、東京都とパートナーシップ事業である「自然ふれあい事業」を始めるようになって大きく変化した⁴⁷。この事業は、都が「自然ふれあいボランティア」を組織化し、そのボランティアが東京都指定の保全地域をフィールドとしてボランティア活動を実施するというモデル事業である。1997年度から東京都の東久留米、東豊田、七国山で実験的に始められ、現在では拠点を5カ所に展開している。この事業活動の目的としては、次の5項目が挙げられている。すなわち、(甲)「保全地域」が身近で大切な自然であることを知る、(乙)その保全のためには市民が積極的に関与していく必要があることへの理解を深める、(丙)実際に、保全のためのボランティア活動を継続的に実践する、(丁)活動の経験やノウハウを基盤として、自然の保全に必要な活動を主体的に計画し実施する能力を身に付ける、(戊)日常的に地球環境、自然保護、環境負荷低減に配慮した、行動する都民になってもらう、である⁴⁸。

東久留米、東豊田においては、その場所を活動場所としていた市民団体がなかったため、都が公募して何もなかったところからボランティア団体を組織化した。一方、「七国山」では「七国山自然を考える会」が活動していたので、公募で集まった人が会に入るかたちで、既存団体を母体とした「七国山自然ふれあいボランティア」が組織されることになった。

それまで「かたかご／七国」の活動は、「かたかごの森」での管理作業が中心で、「七国山」では年に数回の自然観察、ゴミ拾い・清掃などを行なう程度であった。それが、「自然ふれあい事業」を都と協力して実施していくことになり、「七国山」での下草刈りを中心とした管理作業が一気に増加した。このことにともない、戸惑いを覚えている会員が存在するが、それに関しては個別に記述する。

いずれにせよ、KYさんは都との交渉役として、必要な事務作業を着実にこなしている。しかしKYさんの場合、市民運動としての取り組みというよりも、ボランティア活動として事務を行なっているようなところがある。KYさんは、「現在でも、自分はそういう〔KSさんのような〕人間でないと思っている」ので、「行政に対しても、強引に反対しようということは考えていない」。「〔行政職員に〕『できない』と言われれば、『ああ、そうですか』という感じ」でパイプ役を務めている。

KOさん(67歳、男性)⁴⁹は、定年を迎えて「現役引退」し、「何かできることはないかな」と考えていた。茨城県の山間部で育ち、自然に親しみを持っていたので、1996年、まちだ市民大学(町田市教育委員会)「多摩丘陵学・自然論」を受講した(資料編を参照)。

これは、1992年から始まった生涯学習講座で、座学と野外実習から構成される。講座の特徴は、次の4点が企図されていることにある。すなわち、(甲)「町田市」の行政界内の自然だけではなく、よ

⁴⁷ 1999年10月27日に東京都多摩環境保全事務所自然保護課保全係の斎藤氏へ行なったインタビューによる。

⁴⁸ 1999年7月25日に「七国山自然ふれあいボランティア説明会」で配布された資料による。

⁴⁹ インタビューは1999年9月29日に行なった。

り広い多摩丘陵全体の自然を意識させること、(月)建設省・東京都・町田市などの行政関係者を必ず講師として招き、地域の自然がどのように担保されているのか、どういう制度があるのか、どのような取り組みがなされてきたかを知ること、(火)野外演習では講師を市民活動団体に依頼し、各団体のフィールドを訪ねて、自然愛好的に自然を知るだけではなくて、そこに関わっている市民団体を知ること、(水)イベント的な公開行事としてフォーラムを開催し、受講生以外にも開かれた講座であること、である⁵⁰。

この講座を受けて KOさんは、「町田に30年近く住んでいますが、会社人間だったので、町田っつもののが分かっていなかった」ことに気づかされた。たとえば、家から「七国山」が近いので、散歩でその辺りをよく歩いていたものの、「かたかご／七国」の活動については講座で初めて知った。講座終了後1年間くらいは入会しようか決めあぐねていたが、近所に熱心に活動している会員がいて、その人に入会を勧められて入ることになった。

入会するとだんだん楽しくなってきた、1998年には東京都の「ボランティアリーダー養成講座」に参加した。これは、「自然ふれあいボランティア」のなかからリーダーを養成するために開かれた講座である。1年間のリーダー養成講座を受けて、KOさんは「なんとなく、都の考えていることが分かってきた」。それは、「ボランティア団体が要求実現団体になったら、[都は]嬉しくないだろう。[都としては]自然を、みどりを理解してくれる人が増えることが大事と考えているようで、[ボランティア活動の]成果はそんなに考えていない」という認識である。KOさんは「みどりを理解してくれる人が増えるだけでも、税金の使いみちがあると思いますよ。草刈りしたいと思っても、夏の暑い日にやろうと思うと重荷になってしまう。そのへん、都は分かっているんだと思いますよ」と言う。

現在、KOさんは「町田かたかごの森を守る会」の事務局を務めている。「ボランティア活動するのは、楽しみということがないと、好きじゃないと……。やらなきゃいけないとか、義務感が出てくると窮屈になってくると思いますよ」とボランティア活動について語る。「電話すると、引っぱり出してしまうよう」だから、最近は活動への参加を促すような連絡は流さないよう気を使っている。

ボランティア活動に関わるようになって、「植生ってものが、3年くらいやって、初めてわかってきましたね。キツネ[キツネノカミソリ]、カタクリ、ヤマユリなどが実感として分かってきましたよね。親しみがわいてきましたよね。そうなるのはじめて植物がわかるような気がしますよ」と、植物に対する自分の気持ちの変化を語る。また、ボランティア活動の場が登山・ハイキングなどの情報交換の場となり、別な面での知識が増えたりすることで、「自分が豊かになりますよね。一人者の生活が狭く閉じこもらないで、豊かになります」と、ボランティア活動の副次的効果も評価している。

TUさん(65歳、男性)⁵¹が入会したのは1996年である。活動歴は短いですが、現在、「かたかご／七国」の会計を担当している。

TUさんは、今から15年くらい前、デパートで開かれていたバードウィークの催しに触発されて、「(財)日本野鳥の会」に入った。その頃は、大田区に住んでいたもので、ときどき多摩川の水鳥を観察して楽しんでた。とはいえ、それほど熱心なバードウォッチャーでもなく、仕事をしているときは典型的な「会社人間」だった。「それまでは、[ボランティア活動を]やってなかったね。暇ないもん。1日8時間じゃなくて、12時間以上でしょ。下手すりゃ、土日もないんだから。家庭のことなんて、女房にまかせてりゃ……。基本的には仕事だけだったね。仕事人間だったから、いま思えば気違いじ

⁵⁰ 1999年10月26日に町田市教育委員会まちだ市民大学推進室の古屋氏へ行ったインタビューによる。

⁵¹ インタビューは1999年10月17日に行なった。

みてるけど、あの頃はあの頃で楽しかったな。麻雀やったり、ゴルフ行ったり。私の現役時代は、仕事がどんどん増えていった時代だったから」と、会社員時代を振り返る。

定年を 1996 年3月に迎えた。翌月、カタクリの開花に合わせて「かたかごの森」を一般開放することを広報で知り、カタクリを見に出かけた。このとき、「町田かたかごの森を守る会」の事務局および会計を務めていた KH さんから勧誘された。ちょうど会社を辞めて暇だったので、「じゃあ、協力しましょう」と返事して入会した。

TU さんが「のめり込んだ」のは、KH さんが 1998 年に亡くなり、会計の仕事を引き継ぐことになってからである。まだ入会して2年目だったものの、「いいから、いいから」とほかのメンバーから勧められて引き受けた。いったん会計を始めてみると、次第に事務局としての仕事も引き受けざるをえなくなり、現在では「事務局的なこともやっちゃうね」という状態である。

このように、退職してからすぐにボランティア活動を開始したので、「ちょっときぎな言い方をすると、毎日が充実してるっていうか、ぼっとしていることはないね」と話す。会社の先輩から、「リタイヤしても、暇でしょうがない」とか、「パチンコしかやることない」とか言われていたので、定年後の生活に不安を抱えていたが、「危惧していたことを回避できた」と感じている。そのことは、次の言葉によく現れている。「[ボランティア活動を]やってなかったら、今頃、アルバイトでもいいから、前と同じ仕事させてくれと言ってたかもしれないね。でも、いまじゃ頼まれてもやらないね」。

また、「お日様のもと、緑のなかで体を動かしていれば健康にいいしね。血圧は現役時代、高めだったんですけど、今は安定してるしね。精神的なものもあるでしょうけど、アルコールの量も減ったし」と語り、ボランティア活動が健康面でもプラスに働いていることをうかがわせる。

こうした自身の経験を踏まえて、もうすぐ定年になるという知人に向かって、「地域のボランティアをやったらいい」とアドバイスしている。「来年、定年だったときは、日本一周旅行とか図書館で本を読むとかいろいろ考えてたけどね。テーマを決めて生活を設計できればいいんだよね。別にボランティアじゃなくてもいいわけだし、日本と世界の文学全集を読んだりしても、東京から大阪まで歩いてもいいし」と語り、TU さんにとってはボランティア活動が、定年後のテーマ性のあるライフスタイルの一つと考えられている。

(3) 「悪いことばかりしてた」けれど——SK さん

SK さん(59 歳、男性)⁵²は、現在、「かたかご／七国」の副会長を務めている。

SK さんは、父の職業が植木職人だったので、小さいときから山野草に親しんでいた。野草を採集するためにあちこちの山に行き、「悪いことばかりしてた」と言う。家のすぐ近くにある「かたかごの森」にも、「会ができる前から入って荒らしていた」。

1994 年頃、「かたかごの森」にカタクリを見に行ったとき、はじめて会の存在を知った。そして、約1ヶ月後に会が主催した野草の天ぷらを食べるイベントに参加して、入会を決めた。

このイベントは、ヨモギ、イタドリ、ハルジオンなどありふれた野草を天ぷらにして食べる行事で、この会の特徴的な活動の一つである。これには大きく2つの期待が込められている。1つは、食べる行為を通じて植物に興味を持つようになることへの期待、もう1つは、雑草と呼ばれる植物を見直すことで生態系全体への関心を持つようになることへの期待である。

SK さんは、入会した当初の方が現在よりも「よくやって[活動して]いたね」と言う。その頃は、平

⁵²インタビューは 1999 年 10 月 17 日に行なった。

日を会社がある山梨県で過ごし、休日に自宅に帰って来るという生活を送っていて、「知り合いが少なかったから、よく出ている」。当時は会員数が少なく、活動日には必ず何らかの食事を作って、休憩所で団らんするという「家庭的な雰囲気だった」。少ない人数ではあるが比較的出席率が良く、小さなイベントでも全員に連絡網を回して連絡を緊密に取っていた。ところが現在では、「自然ふれあいボランティア事業」でボランティアを集めたので、会員数が多くなり、「いまみたいに大所帯になると、なかなかそうはいかないけどね」とかつてのアットホームな雰囲気を懐かしく感じている。非常に面倒見が良かったKHさんが亡くなってから、KHさんを慕って入会したメンバーがほとんど脱会したのも、SKさんにとっては寂しいできごとだった。

また、「自然ふれあいボランティア事業」が始まってから、「かたかごの森」だけでなく「七国山」でも管理作業を行なうことになったのだが、それを契機に「七国山」での活動の意義がSKさんにはわからなくなったようだ。

「かたかごの森」と「七国山」の面積はそれぞれ、1ha強(買収分は0.56ha)と約10haである。「かたかごの森」の活動範囲は、買収分だけなので、会員による維持管理が行き届く広さなのに対して、「七国山」は広すぎて会員だけでは手に負えず、中途半端にしか管理できない。このため「七国山」には、必要に応じて業者が入って間伐や下草刈りなどを行なっている。また、「かたかごの森」はカタクリ等の開花時期に開園して、一般見学者に楽しんでもらえるのに対して、「七国山」は緑地という位置づけなので、公園とは違って利用者に楽しんでもらうという性格がない。もちろん、トイレやベンチなどが整備されておらず、利用者も近所の人が犬の散歩で通るくらいである。つまり、「かたかごの森」ではきちんと管理すれば、植物が見事に咲きそろって大勢の見学者に喜んでもらえるのに対して、「七国山」では、すべてを管理することは到底不可能であるし、精魂込めて管理作業を行なっても、会員以外に活動を評価してくれる人が少ない。このため、SKさんは、「七国山での作業の趣旨がわからない」、「きれいにして、散歩道を整備して、みんなが利用できるようにした方がいいんじゃないかと思うけどね」と不満を口にする。

入会当初よりは活発には活動していないとはいえ、ボランティア活動に関わるようになって、「環境に対して気を遣うようになった気がするね」と語る。「たばこの吸い殻を持ち帰ったり、ゴミを捨てるのに気を遣ったり」といった配慮を心がけている。

(4) 子どもの環境から考え始めて——YTさん

YTさん(58歳、女性)⁵³は、ボランティア活動に関わるようになる前から、40坪の畑を農家から借りて野菜を作っている。子どもがアトピー性皮膚炎だったので、無農薬の野菜を食べさせようと自分で作るようになった。また、洗濯するときに柔軟剤を使うと湿疹・アレルギーが出てしまうので、粉石鹸を使うようになった。このようにYTさんは、子どもの環境を考えながら、身の回りの環境に対して敏感になっていった。

1992年、「自然について勉強しようかな」と思って、まちだ市民大学の「多摩丘陵学・自然論」の1期生になった。自然観察会のような講座は期待して応募したのだが、講座はボランティアの養成を目指していた。卒業後、YTさんは同窓会の役員となり、同期の卒業生とともに1年間、「尾根緑道」という緑道を自然観察した。その翌年は、「忠生公園」が開園を控えていたので、開園される前に調査・観察しようと、フィールドを「忠生公園」に移した。そして1995年4月、しみん大学の同窓生

⁵³インタビューは1999年10月2日に行なった。

が中心となって「町田の尾根・谷戸に親しむ会」を結成した。「かたかご／七国」には、会を立ち上げて、活動が軌道に乗ってから入会した。

YTさんは畑作業に慣れているので、下草刈りなどのボランティア活動は「全然苦にならない」。「疲れていて気が進まないこともあるけど、行ってみると気が晴れるので、なるべく出席しようと思っている」と話すように、自然のなかで体を動かすことが良い気分転換になっている。

そこで、炊事当番制の問題が生じる。「かたかごの森」には付属施設として管理棟「かたかごの家」がある。ここでは炊事が可能なので、「かたかごの森」で作業があるときは、作業する人と炊事する人に分かれ、もっぱら女性のメンバーは炊事当番を引き受けることになる。草刈りをするために来たのに、部屋にこもって炊事することは、YTさんにとっては本意ではない。

また、たとえば野草の天ぷらを作るとき、当日の料理のほかに、野草を摘むためにも時間をかけなければいけない。こうしたことのために、YTさんなどの女性会員がKSさんから「呼びつけられる」ことに対して、YTさんは違和感を覚えている。

それでもYTさんは、「いろいろな人と出会えるのが楽しいですね」と、ボランティア活動の楽しさについて話す。そして、「自然保護なんてたいそうなことは思っていない」「自分の楽しむための活動だと思っている」と言う。だから、代表のKSさんとは違って「この場所を守りましょう」と呼びかけることはできないし、自分の活動については「本物ではないですよ」と謙遜する。それでも、「ここ〔活動場所〕がなくなってほしくないと思うし、活動していれば、何かのときに意見が言えることもあるし、そうすれば守ることにもつながるかもしれないし」と語り、楽しむための活動が社会的に貢献する可能性を意識している。

ところで、YTさんらが立ち上げた「町田の尾根・谷戸に親しむ会」の活動がユニークなので、ここに紹介しておこう。

「町田の尾根・谷戸に親しむ会」は「忠生公園」の開園前から、公園をフィールドとして活動していた。しかし、公園は一般に開かれていなければいけないという平等主義のもと、開園後は利用団体のうちの1つとしてしか扱われなかった。これに対して会としては、同じ町田市内にある「かしの木山自然公園」のように、市民がイベントを企画したり、運営に参加したりできる市民参加型公園にしていきたいという目標があった。「かしの木山自然公園」では、緑地保全・公園設置の運動に参加したメンバーが中心となって、「かしの木山自然公園愛護会」を結成し、樹木野草部会、野鳥部会、昆虫部会、耕作部会と4つの部会に分かれて、それぞれ独自にイベントを企画し、また、公園の運営にもかかわっている。そこで、「忠生公園」での事業を支援する施設ボランティアを町田市が公募したとき、会のメンバーがこぞってこれに応募するという手段をとった。つまり、公的に開かれた手続きに則って、「忠生公園」のボランティアを「町田の尾根・谷戸に親しむ会」のメンバーがほとんど占めることになったのである。

こうして、「町田の尾根・谷戸に親しむ会」は公園の施設ボランティアとして、市に意見を言えるようになってきた。「発言力を高めていくためには、仲良くして公園で貢献していくことが必要なんだと思います。でも、KSさん〔かたかご／七国会長〕はかたかごでも10年かけてあんなったわけだから、私たちひよっ子が1～2年やっただけで、私たちの意見がねえ……」と語るなかには、ねばり強く時間をかけて自分たちの意見を通していこうという意志がみられる。

(5) 「自然ふれあいボランティア」に入会して——ARさん・UMさん

1997年に東京都が「七国山自然ふれあいボランティア」を公募したとき、43名が集まった。しかし、

現在でも会員であるのは AR さんと UM さんなど数名しかいない。

ARさん(52歳、女性)⁵⁴は、幼少時から「七国山」の近くに住んでいた。家のそばを流れる恩田川にはウナギが生息し、川沿いには水田が広がっていた。川から一段上がったところは一面が麦畑だったから、子どもの頃は「丹沢までかけて登れる」と思ったこともあった。「ほんとう、開発されたよね」と感慨深げに話す。

ARさんは、町田市の広報を見て東京都の「自然ふれあいボランティア事業」を知り、ボランティアに応募した。父を数年前に亡くし、また娘が地方の大学院に進学したことから、「この年齢(とし)になったら、働いてもお金にならないし……、家にいてもなんなんで、ボランティアをやろう」と思ったことが応募した動機だった。「最初の動機は不純だった」と振り返る。

いつも庭を手入れしているので、下草刈りなどの作業は苦にならない。それよりも、ARさんはボランティア活動について「木から気が取れるような気がする。……[体の]中の循環が良くなるっていうのかな」と評し、「疲れるよりも体調が良くなることが多い」と実感している。こうした感じ方は、ARさんが3年にわたって週に1回、気功をやっていることが影響している。

入会してさまざまな人と知り合って、「個人的なことは話さないけど、……年輩の人が一生懸命にやっているのを見ると励まされるね」と、高齢者の活力に刺激を受けている。そして、「なんでこんな年をとって、元気なのか」と思うとともに、「体が動かなくなる前に、予防のためにボランティアをやるのはいいと思うけどね。……福祉にお金をかけるよりも、その予防でボランティアにお金をかけるのもいいと思う」と、老化防止のためのボランティア活動を肯定的に評価している。

最近「植物を覚えようという気にもなってきた」ので、現在の活動における目標は「植物の名前を覚える。まずは身近な植物から」である。

UMさん(54歳、女性)⁵⁵は八王子市に在住している。「七国山自然ふれあいボランティア」の募集記事は、町田市の広報に載せたので、ほとんどの人びとは市内在住である。UMさんが「自然ふれあいボランティア」募集の記事を見つけたのは、JR横浜線相原駅に置いてあった町田市の広報であった。活動場所である「七国山」を、家の近くにある「七国峠」と勘違いして、利便性を勘案してボランティアに応募した。実際は、家から「七国山」まで1時間近くかかるけれども、現在は、それだけ時間を掛けてもよいくらい楽しいと感じている。

UMさんは、若い頃から自然に親しんでおり、20代の頃には登山クラブに入って、南アルプスに登るなどしていた。結婚してからは、子どもが少し大きくなってから、高尾山に子どもを連れていたりしていた。「自然とか植物とかが好きだったから、こういうボランティアならできるかな」と思ったのがボランティアに応募の理由である。「自然ふれあいボランティア」の最初の説明会のとき、ボランティアになったからといって、「特権はありません」「出席率を争うものではありません」と説明されたから、気軽に入ることができた。

入会してから会のメンバーから植物の見分け方などを教わった。また、「野草の天ぷらなんかも、こんなものでも食べられるんだと思ってびっくりしました。スギナのお茶なんかもはじめて飲ませてもらいましたし」と、良い経験を積むことができたという感触がある。「同じ歩いていても楽しいです。ハリがあります」と話すように、視野が広がったことで、同じように散歩をしていてもより一層楽しくな

⁵⁴インタビューは1999年10月2日に行なった。

⁵⁵インタビューは1999年10月2日に行なった。

った。

UMさんは「好きなのは観察会だけど、ほかも嫌いではないから」と、下草刈りなどの作業にも積極的に参加している。しかし、次の言葉に表れているように、「かたかごの森」はともかく、「七国山」での作業はほとんど効果がないと感じている。「草刈りはそれほど戦力になっていないと思います。あそこを守るとのことだったら、人数が全然足りてないと思いますね。……ボランティア体験ということに意味があるんでしょうね。かたかごの森は、小さいので戦力になっていないと思いますけど。七国山はとても戦力にならないでしょうね。」

「自然ふれあいボランティア」に入ったが、「自分がボランティアをしているという意識はないですよ。楽しませてもらっているという感じです」と語るように、ボランティア活動を楽しみ体験としてとらえている。

(6) まちだ市民大学の受講生から入会して——NJさん・KWさん

NJさん(69歳、男性)⁵⁶は、1986年に「七国山」の近くに引っ越してきた。会社勤めしているときから「七国山」周辺をときどき歩いていたので、自然保護を訴える「七国山自然を考える会」の立て看板を見て、会の存在は知っていた。1996年に退職して「何かやることないかな」と思い、まちだ市民大学の「多摩丘陵学・自然論」を受講した。このとき会のメンバーと出会い、会の趣旨に賛同したので入会した。

NJさんは幼い頃は田舎の農家で育った。「山に行くと木を伐ったり、薪(たきぎ)をひろったりしていたので、余計そういうもの[自然保護]に関心があるのだと思いますよ」と、自らの自然への思いを分析する。そして、「もう周りにも自然が少なくなっているんで、七国山はぜひ残しておきたいと思っています」と「七国山」への愛着を語る。現在は、週に3～4日のペースで「七国山」周辺を散歩している。

会の活動のなかでは、「雑木林をどうまく育てていくのかに関心がありますね。……観察的なことはあまり興味ないんですよ。昔の農家的な感覚では、観察は好きな人がやってくれればいいと思うんですよ」と話すように、萌芽更新によってかつての雑木林を再生することに関心がある。

ところで、NJさんの関心は自然保護にとどまらない。現在、俳句、英会話、英語文献購読、テニスなどのサークル活動に参加している。これらは、会社員時代から少し始めていたものの、退職後に本格的に始めた。多方面に関心を持っているために、幹部のような活躍はできないけれども、「自分と考えを同じくする人がいるので、心強いし楽しい」と感じている。

NJさんは、「七国山自然を考える会」の活動だけに参加して、「町田かたかごの森を守る会」には関わっていない。「かたかごの森」の場合、カタクリ等の花の咲き方や、来園者の数、来園者から寄せられる感想文の内容などを通して、管理作業の成果が如実に感じられる。だから、もし関わるならばきちんと関わりたいと考えており、「中途半端になるといけないなあ」と思って「町田かたかごの森を守る会」の活動には参加していない。

KWさん(38歳、女性)⁵⁷は、夫が山登りをするので、結婚してから丹沢や中央アルプスなどを登るようになった。また、町田市玉川学園に引っ越してきて、庭に植物を植えている家が多いので、いつの間にか四季の移り変わりが気になるようになった。

⁵⁶インタビューは1999年10月2日に行なった。

⁵⁷インタビューは1999年10月6日に行なった。

入会したきっかけは、1997年にまちだ市民大学の「多摩丘陵学・自然論」に参加して、会員に声を掛けられたことである。最近が多忙のためにあまり活動に参加していないが、都合が良いときには参加している。「正直言って、作業は大変ですね。落ち葉掻きなんか、一日やると疲れますけど、気持ちいい疲れですよ」と、作業についての感想を話す。「七国山」までは歩いて40分程度かかるが、普段、運動らしい運動をしていないので、七国山までは歩いていく。これは、活動日が運動する日としてもみなされていることを示す。

「いま一番考えなきゃいけないのは環境問題ですからね。大きなところはできないけれども、小さいところからやってみようか」と語り、作業が役に立っているという実感がKWさんの楽しさにつながっている。

1996年からは趣味として俳句を始めた。「父が始めて、それに影響されて、はまりましたね」と話す。俳句を始めたことが、それまでよりも一層自然に対して興味が湧くようになった。一方、会の活動への参加は、「季語になっている植物が、実際にわかって良いというのがありますよね」と、俳句にも良い影響を与えており、俳句とボランティア活動が相乗効果を発揮している。

(7) ほかの団体の代表——HTさん・THさん

HTさん(77歳、女性)⁵⁸は、「みどりの町をつくる会」の代表である。この会は、1975年頃、町田市金井の開発計画への反対運動をするために設立された。運動の結果、当初計画よりも公園緑地の面積を増やすことなどができた。現在、会の活動は「尻つぼみ」の状態である。

市民運動を行っていたため、東京都の「みどりの監視員(現在は、みどりの推進員)」に指名された。KSさんも同じ「みどりの監視員」だったので知り合いになり、1985年頃、「七国山自然を考える会」に入会した。

その後、HTさんは「かしの木山自然公園」の設置運動に関わり、現在は「かしの木山自然公園愛護会」の昆虫部会で中心的な役割を果たしている。「七国山」や「かたかごの森」は、「かしの木山自然公園」と比べるとかなり家から遠いため、最近の活動には参加していない。脱会することも考えたが、KSさんから「名前だけでも入っていて」と引き止められている。

THさん(52歳、女性)⁵⁹は、「かたかご／七国」の活動に衝撃を受けて、それから市民活動を主体的に行なうようになった(4.2参照)。「成瀬の自然を守る会」や「OYFC」を立ち上げるまでは、しばしば「かたかごの森」まで足を運んで、下草刈りなどの活動に参加していた。しかし、2つの会の代表を務めるようになって、最近ではほとんど活動に参加していない。1999年、脱会を申し込みKSさんを訪ねたら、引き止められたので、現在でも会員である。

4.4 せたがや自然環境保全の会

概要

「(財)せたがやトラスト協会」は、賛助会員の中から世田谷の自然、特に植物に関心のある人々を「植物ボランティア」として育成しようと、1994年4月から5年間、講師を招いてボランティア養成講座を開いた。その講座の終了時に、せっかく習得した知識や技術を活用したいと元受講生らが

⁵⁸インタビューは1999年9月28日に行なった。

⁵⁹インタビューは2000年1月7日に行なった。

集まって 1999 年1月に設立したのが「せたがや自然環境保全の会」(以下、「SNECS」(= Setagaya Nature Environment Conservation Society))である。団体の目標は、古くから世田谷に生息する動植物、特に東京 23 区内では2カ所しか存在しないゲンジボタルの自生地を保全してこれを増殖すること、また絶滅危惧種に指定されている野草類や昆虫を保護して、次世代につながる良好な自然を残すことである。

主たる活動場所は、国分寺崖線上にある「神明の森みつ池」(以下、「みつ池」とする)と呼ばれる約2ha の斜面林である。ここには、ゲンジボタルが自生しているほか、キンラン、エビネ、ニリンソウなど貴重な動植物が見られ、東京都の緑地保全地区および世田谷区の特別保護区に指定されている。会の活動としては、「みつ池」での維持管理活動が第2・4木曜日に設定されているほか、協会が管理している緑地においてさまざまな活動があり、月の3分の1程度は何らかの活動日となっている。

現在、会員数は 31 名であるが、「みつ池」の活動には平均 20 名程度が参加する。また、月に一度の定例会には 25 名程度が出席し、参加率は極めて高い。会員の構成は、男性は 60 代以上の退職者が、女性は 40 代以上の主婦が多い。

なお、参考のため、資料編に 1999 年度の活動計画を添付した。

調査方法

1999 年5月に入会し、下草刈り、池の整備、堆肥作り、地域祭への出店などを体験してきた。インタビューは 10 名に対して行ない、活動への参加動機を中心に話していただいた。以下は、インタビュー結果を中心にとりまとめたものである。

調査結果

(1) かつての遊び場でのボランティア活動——KR さん

「SNECS」が発足したのは 1999 年であり、発足後の経過年数は短い。しかし、この会の母体は、「(財)せたがやトラスト協会」(以下、「トラスト協会」)の参加型ボランティア育成事業として 1993 年に組織化された「植物ボランティア」にあるので、実質的な活動歴は7年近くになる。なお、「植物ボランティア」については、環境教育の視点から事例紹介されている(小出 1996, 1998)。

まずは、「SNECS」の現会長であるKRさん(66 歳、男性)⁶⁰が、活動に関わるようになってから現在に至るまでの道のりを記そう。

KR さんは、中学・高校時代に生物部に所属して、昆虫採集や植物観察に親しんでいた。社会人になってからも、ときどき山に出かけたりするアウトドア派であった。KR さんのライフワークはチョウの標本を集めることで、これまで日本産のチョウの 85~90%を収集した。しかし、10 年くらい前からチョウの採集が難しくなった。このことを通して、チョウの生息環境が急速に失われていることに気づき、「チョウが生息できる環境を保持していこう」と考えるようになった。

1994 年、KR さんは「植物ボランティア」を紹介する新聞記事を読んで驚いた。里山保全を目的としてボランティア活動が、家から歩いて1分もかからない「みつ池」をフィールドにして実践されていることを知ったからだ。しかもその場所は、現在は柵で囲われていて一般には立ち入りが禁止されているが、昔は近所の人々の通り道になっていて、かつての KR さんの遊び場だったのだ。個人的に

⁶⁰インタビューは 1999 年9月 30 日に行なった。

思い入れのある場所で環境保全に役立てる活動を行ないたいと思った KRさんは、妻と一緒に「植物ボランティア」に入ることにした。

「植物ボランティア」の活動は平日が中心である。入会した当時はまだ会社勤めをしていたので、平日の活動にはほとんど参加できなかったが、1997年に退職してから本格的に活動を開始した。退職前から活動に関わっていたことに対して、「勤めの最中にやっておかないと辞めたときに困っちゃうから、無理してやっていたところもある」と話す。

1999年、KRさんらは、「植物ボランティア」を母体にして、「SNECS」という市民団体を立ち上げた。その経緯を説明するために、ある事件の概要を挿入しておこう⁶¹。

「植物ボランティア」は、「トラスト協会」の事業を支援するために組織化された団体であり、参加型のボランティアとしての役割を期待されていた。講座の内容も、組織化直後は植物観察会が中心だったが、次第にボランティアとして考えて行動することが要求されていった。具体的には、「みつ池」の自然環境を調査して、その調査結果をもとに適切に維持管理していくことになった。

1996年、萌芽更新の調査を実施するため、講師の指導により、15×15mの方径区を設定し、その中の樹木を伐採した。それまで、雑木林の作業としては下草刈りが中心だったので、この年にはじめて木を切り倒したのである。

現在、全国の森林／里山ボランティアの活動として、萌芽更新するための間伐・除伐は広く行なわれている。しかし、「みつ池」は東京都により緑地保全地区に指定されており、樹高1.5m以上の木は切ってはいけないと制限されている。そのため、この伐採行為に対して隣接住民から苦情が出され、伐採許可等の正式な文書を提出していなかったことと、区の担当職員の異動に伴う引継ぎの不備などが重なり、この樹木伐採事件は議会で取り上げられるまでに至ってしまった。それまで世田谷区から高く評価されてきた「植物ボランティア」の活動は、事件発生後は一転して、最終的には区長が陳謝する事態まで発展した。そして、区からの要請により、1998年1月から約1年間、「植物ボランティア」は「みつ池」での活動を自粛することになった。

この騒動をもって、「植物ボランティア」の講座は終了した。しかしながら、メンバーの熱意は衰えるどころか、かえってメンバー間の結束とボランティア活動の自立を促す結果となり、活動再開に向けての区や周辺住民との交渉も、「トラスト協会」に頼るのではなくボランティア自身が行なった。また、「みつ池」に入れぬ間にそれまでの活動の成果をとりまとめておこうと、調査結果を整理して報告書を作成した。

こうした努力が報われて、1999年から月に2回のペースで「みつ池」の一部に入れるようになった。それと同時に、「トラスト協会」から自立した市民団体を新たに作りたいという意見が強くなり、「SNECS」を設立する運びとなったのである。

現在は、樹木伐採事件後まだ間もないため、「SNECS」が活動するためには、3ヶ月ごとに活動計画と活動報告を世田谷区に提出することが要求されている。そうした資料の作成や、区との交渉などの事務作業については、KRさんが中心になって行なっている。

(2) 世田谷の貴重な植物を描く——KMさん

「植物ボランティア」の1期生のうち、現在、「SNECS」の会員として残っているのは3人である。そのうちの1人は、現副会長のKMさんである。

⁶¹ 1999年3月3日に(財)せたがやトラスト協会事業推進係の小出氏へ行なったインタビューによる。

KMさん(65歳、女性)⁶²は、世田谷区でも自然が比較的に残っている等々力溪谷の近くで育ったので、昔から自然観察を楽しむ習慣があった。一人であちこち植物観察に出かけたり、講師が案内する観察会に参加したりしていた。

1993年、「トラスト協会」主催の観察会に参加したとき、受講者がとても多くて講師一人では案内しきれないときがあった。そのとき、ボランティアがヘルパーとして補助的に説明しているのを見て、大いに刺激を受けた。その姿を「カッコいい」と思ったKMさんは、「私もあんなこと[ヘルパーの仕事]をしたいんですけど」と尋ねたところ、「ちょうどボランティアを始めたところなんで、入りませんか?」と、まだ養成講座を開始して間もない「植物ボランティア」への入会を勧められた。植物の名前を覚えたかったKMさんは、すぐに申し込んで1期生になった。

それから5年間、協会の講座は続いた。その間、植物の名前を知りたいというだけの動機で入った人は、ほとんど辞めてしまった。

講座の開始直後は、室内での講義と野外での観察という形式で月1回のペースで行なわれていたので、そのような人にも楽しめる内容だった。しかし、講座の目的がボランティアの育成にあるので、講師の後を付いて自然観察を楽しむつもりで申し込んだ人は、「端から順に発言させられたり、レポートを書かされたりして、それが嫌で辞めていった」。

講座では、「ボランティアとは何か」を繰り返し考えさせられた。そして、自分がなぜボランティア活動をするのか、活動の目標・目的は何かを明確にするよう指導された。このため、講座の1期生・2期生は、ボランティア活動を通して自分が目指す目標をはっきり定めている。KMさんの場合は、植物の生態精密画を習っていたので、「世田谷の貴重な植物の生態を描いて、残していきたい」という目標がある。ほかの人も、たとえば、植物の標本作りにのめり込んだり、キツネノカミソリの観察・調査に深く関わったりしている。KMさんは、自分の目標・目的を持つようにたたき込まれたことが、「すごく、いまの生き方にプラスになっています」と話す。

1期生であるKMさんの目から見て、7年近くの活動のなかで変わったことは、男性のボランティアが増えたことである。これに対してKMさんは、「会社で活躍された方が入ってきたので、骨がしっかりしましたね。……事務的なことが、芯がしっかりしましたね」と好意的に評価する。「SNECS」を設立したことについても、「男性の方がはいつてらっしゃって、随分、そういうことが盛り上がってきたんです」と語り、男性陣の役割が大きかったことをうかがわせる。

(3) 井戸端会議の雰囲気を残しておきたい——MNさん

会長のKRさんと同期の2期生で、現在も活動しているメンバーに副会長のMNさんがいる。

MNさん(49歳、女性)⁶³は、ボランティア活動に関わる前から「花とかそういうものは好きだった」。学生時代は、多摩丘陵や高尾山などに自然散策に訪れたり、卒業後も丹沢をフィールドとする「自然を楽しむ会」という団体の植物観察会に出かけたりしていた。

1994年、地元の同じコーラス・グループのメンバーであるIYさんから誘われたのが直接の契機となって、「植物ボランティア」の2期生となった。それ以来ずっと継続してきたが、観察会を楽しみにしていた人は辞めていった。この原因についてMNさんは、「女性は学校を卒業して以来、久しぶりに勉強して、主体的に考えることに慣れていなかった」ことを挙げる。ボランティアとして考えることを要求されたことが負担に感じて、「ばらばらと抜けてしまった」。後から入ってきた人は、観察会に

⁶²インタビューは1999年10月12日に行なった。

⁶³インタビューは1999年10月7日に行なった。

参加するというのではなくボランティア活動を実践したいという人だったので、講座で要求されることを当然のこととしていたから、ほとんど辞めていない。

2期生である MN さんも、ボランティアとして一人ひとり考えることの必要性を徹底的にたたき込まれ、「時間があるから」ボランティア活動に関わるのではなく、「目標を持って、そのために」実践するのだと考えるようになった。そうした変化のなかで、ボランティア組織には、連絡責任者のような対外的に必要とされるリーダーは必要だが、ボスは必要ではなく、誰もが同じレベルで考えることが大事と思うようになった。

だから MN さんは、現在の会の運営について心配している点がある。それは、KR さんのような「旧仕事人間」「リタイヤ組」が入ってきて、「仕事が早くなって、会議なども効率が上がった」が、その反面「マニュアル化されて組織化されると[メンバーが]考えなくなる」のではないかという心配である。

毎月第1木曜日の定例会は、10時から12時までの2時間で終了するように周到に準備され、そのように遂行されている。しかし、そのようなフォーマルな話し合いの場で「みんなの思いを果たしているのかどうか」を気に掛けている。こうした現状に対して MN さんは、「井戸端会議のように好きなことを言えるような雰囲気を残しておきたい」と、各自が考えていることを心おきなく話す重要性を訴える。また、「きっちり組織化されてから入ってきた人が多いから、どういう経緯で組織化されてきたのかを、説明しなきゃいけないと思っています」と話す。

樹木伐採事件以降、「SNECS」は活動する際に、世田谷区に対して各種書類を提出することが要求されている。MN さんの心配は、その書類に会が縛られることに対する心配である。MN さんは次のように言う。「危ないなって気がするんですよ。適当にゆるみがないとね。有能な社会人がいっぱいいるので、かえって危ない部分があると思うんです。できる人ができることをできるときにできるだけやる。辛くなったり、ノルマを感じたりしたら、いけないと思います。誰もができることをできる範囲にしておかないと……」。

(4) 5年間で「植物の先生」——IB さん

IBさん(63歳、男性)⁶⁴は、会のなかで「植物の先生」と呼ばれている。たいていの植物については、その名前を瞬時に言うことができるからだ。しかし、IBさんが植物について勉強し始めたのは5年ほど前からである。IBさんが「植物の先生」と呼ばれるようになるまでの軌跡を辿ってみよう。

定年が先に見えてきた50代の後半、高校時代からの友人に「利尻[利尻岳]に登らないか」と誘われた。IBさんの両親は北海道出身で、かつて利尻島には母方の親戚のニシン御殿があった。かねてからその跡を見に行きたいと思っていたので、利尻島に行くことにした。その頃から「自然に親しむ」ようになり、1995年、「みつ池」をフィールドにしてボランティア活動が行なわれていることを広報で知り、「植物ボランティア」に入った。活動場所の「みつ池」は、子どもが小さいときに、子どもを連れて遊びに行った場所で、IBさんにとっては身近な場所だったことが決め手の一つになった。

入会したときは会社で働いていたので、月1回の定例会にも毎月は出席できなかった。一方で、友人の誘いに乗って、白山や鳥海山などに登り、登山を趣味にしていた。

鳥海山に登るとき、その山に固有のチョウカイフスマを見たくて事前に文献調査したことがあった。

⁶⁴インタビューは1999年10月18日に行なった。

また、登っているときは、名前の分からない植物の写真を撮って、帰宅してから同定することもあった。振り返るとその頃が、植物の勉強を始めたときだった。

定年を迎えて、1997年から本格的にボランティア活動に関わるようになった。その年に、「みつ池」の植物の開花実績調査を担当することになった。この調査は、「みつ池」に何があって、大切なものはどのくらいあるかを調べることを目的としたものである。これを機会に「植物を覚えなきゃいけない」と思って、観察会に参加するようになったんだよね」と語る。週2回、「みつ池」で植物調査を実施するとともに、ほかの団体の観察会にも積極的に顔を出すようにしたIBさんは、いつしか「植物の先生」になっていた。「みつ池」にある植物をほとんどすべて覚えて、どの植物が貴重とされているかを説明できるようになった。現在でも、「東大農場・演習林の存続を願う会」と「稲城野草散策の会」の観察会に参加して、ブラッシュアップを図っている。

今後の「SNECS」の活動について、自分の役割を意識しながら、IBさんは次のように語る。「KRさんという非常に良いリーダーがいてね。SNECSについて言えば、KRさんを支えていってね。そうすることが、ああいうところを守ることになるから。……自分のできる範囲で、植物調査とかパソコンを使ったデータ整理なんかで、縁の下から支えていければと思っているけどね」。

(5) 生徒の異変から環境問題に目を向けた——TWさん

TWさん(61歳、女性)⁶⁵は、かつて教員を職業としていた。30代になって、教員として余裕が出来てきた頃、児童たちに異変が生じていることに気づいた。野外に連れていってもTWさんのそばにいて遊ばない子が増え、裸足になれない子が出てきた。そうした生徒の変化を感じるうちに、「漠然とした不安から自然に目を向けるようになった」。

動物の飼育が何かのきっかけになればと考え、学校でウサギの飼育を始めた。すると、次のような変化が生じた。「ウサギを媒介にして、普段喋らない子どもでも喋るんですよ。不登校の子が、自分が世話しないとウサギが死んでしまうと思って、ウサギのために登校していた例もありましたね。……いまの子は、人から世話されることばかりで、世話する機会が少ないんですよ。だから、そういう機会があると、子どもも責任感を持つというか……」。

教員の仕事は、母の介護のために辞めた。ある日、母を連れて「みつ池」のそばを散歩しているとき、柵の中から人声が聞こえたので、何か活動が行なわれていることを知った。「みつ池」を管理する「トラスト協会」の看板が立っていたので協会を訪ねてみると、会に入ることを勧められ、1996年に入会した。

学生時代はワンダーフォーゲルに親しみ、在職中は教員の仲間と植物観察会に参加していたので、入会したときにはすでに植物についてある程度の知識を持っていた。しかし、「ここに入って、継続的に目的を持って活動することを覚えましたね」と話すように、その知識を使って植物調査を実施し、調査結果から保全手法を検討しようという会の姿勢には驚いた。

「みつ池」のそばで生まれ育ったTWさんにとって、「みつ池」を含む国分寺崖線一帯はかつての遊び場だった。だからといって、愛着のある地域での活動に拘っているというわけではない。「たまたまトラスト[「トラスト協会」]の看板を見たので、みつ池で活動しているけども、どこにいても活動していたと思いますね。……もっと広く、自然の雰囲気を感じて、エネルギーを吸収したいなと思いますね」と語る。エコ・ツアーに参加して対馬列島や四万十川を巡ってみたり、区民農園で生ゴミを

⁶⁵インタビューは1999年10月25日に行なった。

活用しつつ野菜を栽培したりしているのは、TWさんの自然志向が表れている。

(6) 交渉役として自分を活かす——HCさん

HCさん(63歳、男性)⁶⁶は、60歳の定年を迎える前に病気で倒れたことがある。それまで商社マンとして懸命に働いてきたHCさんにとって、病気は自分の生活を見つめ直す一つの契機となった。それで、区報で知った定年後の生活設計講座に参加することにした。

その講座において、定年後には「(日)自分の得意なことをやること、(月)人に喜んでもらえること、(火)できれば、それが収入につながることを勧められた。このときHCさんは、「僕はお金は要らない。お金もらおうと、どうしても縛られるし。今まで商社でさんざん頭を使ってきたから、体を使おうと思った」。(火)には関心がないので、(日)と(月)を満たす活動として、「人のため、さらに地域のため」に、地域のボランティア活動に関わろうと思った。特に、体を壊してからは、健康増進のために体を動かす必要があったので、そのようなことができるボランティア活動に目を向けた。

まずは、「地元密着だし、人のためになるし、体を使うし」という理由で、災害時に消防隊員を後方支援するボランティアの養成講座に参加した。しかし、活動日が1年に数日しかないの、ほかの活動も探すことにした。このとき、「みつ池」における「植物ボランティア」の活動を知った。

1997年2月、「みつ池」が一般開放されて自然観察会が行なわれ、その場で焼き芋が振る舞われた。HCさんの取った芋はうまく焼けてなかったので、焼き芋を2本を受け取った。2本目の芋を食べているとき、KRさんの妻から「2本食べたから[植物ボランティアに]入らないとね」と言われたので、入会することにした。

現在、HCさんは副会長を務めているが、この役職は会長のKRさんに請われたものだ。「[会社員のとき]交渉は自分の仕事だったから、対外的な場面があるときに、自分のアビリティを活かせるかなと思って引き受けた。……植ボラではビギナーで、知識的にもプワーだけ」と語るように、自分の得意分野で貢献することを割り切っている。それでも、「フェノロジー、植物を覚える気力はないけど、入る前に比べれば知識は雲泥の差だよ」と、知らず知らずにうちに自然に関する知識が蓄積されている。

入会して最初に携わった作業が、木を玉切ることだったため、「木を伐るような、運動を兼ねた、いい汗かける作業をしたい」と考えている。個人的には、国分寺崖線の下を流れる野川をフィールドにして、野鳥のセンサス調査を実施しているが、これは健康増進のための運動でもある。

退職してからHCさんは、「SNECS」のほかに「トラスト協会」の「野鳥ボランティア」にも関わり、また趣味で絵も描き始めた。「いまは体が動くので、体を動かすことが中心。体が動きにくくなってから、俳句を詠んだりしてみたい」と語る。

(7) 人と会える接点としてのボランティア活動——KJさん

KJさん(56歳、女性)⁶⁷は、結婚してから墨絵を始めた。もともと植物が好きで、絵の題材として園芸植物を描くことが多かったから、「植物の名前を覚えたい」という気持ちがあった。

馬事公苑で開かれていた環境祭に出かけたとき、「トラスト協会」の存在を知り、その場で協会の賛助会員になった。その後、協会から届いた会報『TRUST』を通じて「植物ボランティア」の存在を知って、講座に参加することにした。

⁶⁶インタビューは1999年10月25日に行なった。

⁶⁷インタビューは1999年10月28日に行なった。

KJさんは、ボランティア活動について、「植物が好きだから、やってるかなあ」と話す。また、主婦で子どもがいないKJさんにとって、ボランティア活動は「人と会える接点」であり、ほかのメンバーと一緒に作業することについては、「作業、草刈りなんかも、みんなでわいわいしながらやると楽しいですし、気持ちいいっていうのか」と話す。

自分が楽しめるというので「植物ボランティア」に参加したKJさんであるが、関わる前には聞いたこともなかった「里山」という言葉を聞くと、敏感に反応するようになった。講座での学習を通じて、いつの間にか里山への興味が強くなった。

KJさんは、区の施設で開かれている陶芸教室にも参加している。陶芸教室と「SNECS」を比較すると、前者には共通の目標がないのに対し、後者は「共通の目標があって、一緒にやっているという実感がありますけど」と話す。

(8) 園芸の関心を基礎にして——TDさん

TDさん(68歳、男性)⁶⁸は、60歳で退職して1年くらい「遊んでいた」が、じきに退屈するようになった。会社で働いているときから、区民農園を借りて野菜を栽培するなど、園芸に関心があったから、1992年に世田谷区が主催する植木の講習会を受けてみた。1週間程度の講座で、公園で実技指導を受けるという内容だった。講座終了後、講習会のOBが「緑友会」という会を結成していたのでそこに入り、ボランティア活動として区内の小中学校の植木の剪定を始めるようになった。1993年には、「トラスト協会」に入会したが、「植物ボランティア」には関わらず、東京農業大学主催の成人学校や世田谷区のフラワーランドの講座で、園芸について学習した。

「[そのような講座を] 渡り歩いてきて、何やろうか」と考えていた頃、「トラスト協会」の会報『TRUST』でボランティア養成講座の受講生募集の記事があった。それは、「無原罪特別保護区」(以下、「無原罪」)において、「特別保護区自然環境保全ボランティア」と呼ばれるボランティアを養成するための講座だった。この講座は1997年から始まり、「トラスト協会」が管理する特別保護区において、管理活動を実施するボランティアを養成することを目的として行なわれた。講座は2年間で終了し、現在は自主活動という形態に移行している。TDさんは1998年4月から参加して、現在も「特別保護区自然環境保全ボランティア」として活動している。

2年目の講座が終了しようというとき、KRさんから「SNECS」に参加するよう勧められ、入会することにした。「植物ボランティア」のメンバーの多くは「無原罪」の活動にも参加していたので、現在の「SNECS」のメンバーには「特別保護区自然環境保全ボランティア」にも所属している人が多い。

現在、TDさんは「緑友会」の副会長を務めているほか、「特別保護区自然環境保全ボランティア」「SNECS」の活動に参加している。「何かしらんけど、忙しくなっちゃってるんですよ。……これ以上は物理的に難しくなる」と語るように、ボランティア活動に最大限の時間を割いている。その他に趣味として、20年近く区民農園で野菜を栽培したり、「手づくり蕎麦の会」に関わって、群馬県川場村でソバの播種・刈り取り・ソバ打ちを行なったりしている。

ボランティア活動を始めて、特別な変化は感じていない。ただし、それまで高血圧だったのが、いつの間にか正常になったことから、「健康にはいいですね」と語る。

(9) 「無原罪」を経由して「SNECS」へ——IMさん・HMさん

⁶⁸インタビューは1999年10月8日に行なった。

「無原罪」の「特別保護区自然環境保全ボランティア」養成講座を經由して「SNECS」に入会した人は、「SNECS」の会員数の4分の1程度である。TDさんのほかには、IMさんやHMさんなどが、そのルートを辿って入会した会員である。

IMさん(40歳、女性)⁶⁹は、幼い頃から環境問題に関心があった。小学校の卒業時には、トキの保護について作文を書いた。高校生のときは、「(財)日本野鳥の会」の探鳥会に参加していた。また、動物心理学を勉強していた学生時代には、「野鳥の会」という大学サークルに所属していた。さらに結婚してからも、リサイクル、ダイオキシンなどの問題に関心を持っていた。しかし、複雑で解決不能に見える環境問題に対して、どこかに絶望感、虚無感を感じていた。「人間は生きているだけで原罪だ、なんて思っていた」と言う。ちょうどその頃、「無原罪」のボランティア募集があったので、「無原罪という名前にひかれて」活動に参加することにした。「頭でっかちで、それからフィールドに入っていった」。

ボランティア活動に参加して、「草をむしったり、ホタルやメダカのことを考えたりすれば、罪滅ぼしになるのかなあ」と考えている。また、「人との出会いがとても素敵だなあと思いますし、……次の世代への橋渡しの役を果たせればいいなあと思っているんですけど」と、自分の役割を位置づけている。

IMさんの自然・環境への関心の源泉は、「子どものときにシカを見たこと」にあると感じている。このため、子どもに自然体験をさせたいという思いが強い。いまはネイチャーゲームに凝っていて、子どもが通う小学校でネイチャーゲームを指導するなどしている。

現在、「SNECS」のほか、「(財)日本自然保護協会」「(財)日本野鳥の会」「ネイチャーゲーム研究会」「ウミガメ研究会」「エルザ自然保護の会」など多数の環境NPOの会員となっており、多様な環境問題への関心の高さがうかがえる。

HMさん(52歳、女性)⁷⁰も「無原罪」を經由して、「SNECS」に入った。

1998年3月、「特別保護区環境保全ボランティア」養成講座の受講生を募集していることを知り、「時間的・年齢的にちょうど良い社会参加に思えたから」、この講座に応募した。月1回の講座にとどきどき休みながらも参加して、ようやく輪郭がつかめ、もう少し熱心に取り組もうと思った矢先、講座が終了して自主活動に移行することが判明した。状況をよく飲み込めないまま、「無原罪」で引き続きボランティア活動に関わるとともに、1999年3月の養成講座の最終回で、「SNECS」の発足を知り、これにも参加することにした。

活動を始めて、「自然に対する関心が深まりました。そして、ライフ・ワークに出会えたように感じています」と語る。現在は、植物の種を覚えることをテーマにしている。

⁶⁹インタビューは1999年12月9日に行なった。

⁷⁰1999年10月20日に電子メールをいただいた。

4.5 調査結果のまとめ

調査結果から、里山ボランティアの参加動機について整理したものが図4および表1である。なお、図4と表1の参加動機の丸数字は対応している。

ここでは、5章に入る前に結果の概要をとりまとめることに主眼があるので、詳細な分析は5章に譲る。以下に、図に示した参加動機の8分類を簡潔に説明しよう。

まず(目)の「次世代に自然を残したいから」は、THさん、FJさん、KBさん、KSさん、KRさん、IMさんなどに典型的な参加動機で、団体の中心メンバー、小学生程度の子どもを持つ親などに特徴的にみられる。たとえば、「かたかご／七国」の会長であるKSさんが「私達の可愛い子孫の為『次の世代』に少しでもよりよい環境を残してやるのが、私達大人の義務でもあり責任でもあります」と記したり、あるいは、「OYFC」の会員で「多摩丘陵野外博物館」の事務局を務めるKBさんの「いまは自然のなかで遊ぶということが子どもには分からないし、その場所がない」と話すなか、この動機を認めることができる。これは、自然保護運動の理念として掲げられることが多いので、「市民運動型」動機とする。

一つ飛ばして、(火)の「自然(植物)に関する知識を得たいから」は、FSさん、MEさん、KUさん、ARさん、UMさん、KMさん、HMさんなどに典型的な参加動機で、生涯学習として自然(植物)観察会に参加するような人にみられる。子どもから手が離れた40代以降の女性に特徴的である。たとえば、「OYFC」のFSさんは「町田の自然を考える市民の会」、MEさんは「緑区・自然を守る会」の観察会に参加したことがきっかけとなっていることはその一例であるし、また「かたかご／七国」ARさんや「SNECS」のHMさんが「植物の名前を覚える」ことを目標に挙げていることにも、この動機は認められる。これは、環境について学習しようとして活動に参加するため、「環境学習型」動機とする。

戻って、(月)の「農林業に携わりたいから」は、KBさん、OBさん、HGさん、YSさん、KNさんの参加動機で、里山のような二次的自然の保全手法を農業に学ぼうという人や、循環型農業を基盤にした社会を構想している人などにみられる。農林業の実践は、環境学習の視点から行われる場合、運動の視点から行なわれる場合、さらに自己充足的に農業に関わりたい場合とがある。たとえば、「どうい手を加えるのかが分かっていないと、そこにいる生物を知っても面白くないし、観察していても鑑賞しかしていない」と考えているKBさんは環境学習の視点からの例、「循環農業活動が主軸になるべきなんです」と説く「OYFC」のHGさんは運動の視点からの例、「[農業を]やってみたら、こんなに楽しいことはなかった」と語るYSさんは自己充足的に関わる例である。こうしたことから、これは「市民運動型」「環境学習型」の双方に含まれると判断した。

(水)の「狭い人間関係から抜け出したいから」は、IWさん、KTさん、HSさん、SDさん、KJさんなどに典型的な参加動機で、家と会社を往復するだけになりがちな「会社人間」や、家に閉じこもりがち主婦などに特徴的にみられる。前者の例は、「OYFC」の会員で「鶴見川の渡り鳥」であるKTさんが、「会社人間として生きてきたこれまでの価値観や人生観が変わり、これまでより心が豊かになり、生活するのが楽になったような気がします」と記していること、後者の例は、「SNECS」のKJさんがボランティア活動を「人と会える接点」と捉えていることに認められる。

(木)の「自分の住む地域に関わりたいから」は、FSさん、FTさん、OBさん、HGさん、IGさん、ITさん、SKさんなどに典型的な参加動機で、自分あるいは夫が「通勤族」であるため地域に根を下ろ

したいと考えた人や、自然観察を楽しんでいたが身近な場所にフィールドを持ちたいと思った人、まちづくりにはサラリーマンのビジネス経験を生かすべきと考える会社員などにみられる。たとえば、「転勤族」のHGさんが「本拠地」を持ちたいと思い、「自分の住む地域を好きになろう」と考えたこと、自然観察指導員の資格を取得したITさんが「フィールドを持って自然観察指導員をやるのがいいかな」と思って「OYFC」に参加したこと、「OYFC」の会員で「早湊川をかなでる会」の代表を務めるFTさんが「地域にいま人は必要なんです。ちょっとでも関心を持ってほしい。行政任せでなく自分たちが、という気持ちだ。数の多いサラリーマンが貢献できる部分が多いんです」とサラリーマンの地域参加を説くことなどに、この動機は認められる。

(金)の「余暇で社会に役立つことをしたいから」は、KYさん、KOさん、TUさん、NJさん、HCさん、TDさんなどに典型的な参加動機で、定年後の余暇を有効に使いたいと考える人や、子育てが終わった主婦などに特徴的にみられる。たとえば、「かたかご／七国」のKYさんが定年前に「定年後に何をしようか」と考えたり、KOさんの「現役引退」し「何かできることはないかな」と考えて、活動に参加するようになったことは典型例である。

ところで、(水)～(金)の3つの動機は独立しているのではなく、狭い人間関係を抜け出すために自分の住む地域に関わろうとしたり、余暇で社会に役立つことをしたいから地域に関わろうとしたりすることが多くみられることから、緊密な相互関係があるとしてよい。そこで、これらの参加動機の主軸となっている動機の共通項に着目すると、それは「もう1つの(alternative)」社会に足を踏み入れたいという欲求が核にあることがわかる。要するに、いままでになかった新しい社会関係を築こうとする動機であると判断されるから、「アイデンティティ追求型」動機と名付けた(5.1では、このことについて、もう少し突っ込んだ議論を展開する)。

(出)の「体を動かすことが健康によいから」は、SDさん、TNさん、TUさん、HCさんなどに典型的な参加動機で、一度大きく体を壊した人や、アウトドアが好きな人、普段は体を動かす機会に恵まれていない人に特徴的にみられる。たとえば、病気で倒れたことがある「SNECS」のHCさんが「木を伐るような、運動を兼ねた、いい汗かける作業をしたい」と話すことや、アウトドア派である「OYFC」のSDさんが雑木林の管理作業を、「お金もかからず、極めて体にいいレジャー」と捉えることに認められる。これは、「健康志向型」動機とした。

最後に、(祭)の「自然(環境)が好きだから」は、すべての人に共通した参加動機で、「環境志向型」動機とした。「OYFC」のTNさんが、子どもの頃は周りに自然が残されていたので、「自然を守りたいなあ」という漠とした気持ちを抱いたり、「かたかご／七国」のNJさんが、「[幼少時に]山に行って木を伐ったり、薪をひろったりしていたので、余計そういうもの[自然保護]に関心があるのだと思いますよ」と語ることに、この動機の典型例を見出すことができる。

表1には「仲介ルート」という項目を作ったので、これについても説明しよう。

ここで言う「仲介ルート」とは、対称とした里山保全 NPO に入会するきっかけとなった講座・研修の類で、行政等の公共機関が主催したものである。

「OYFC」には、IWさんが「おやじの腕まくり」(青葉区)を、KTさんが「鶴見川・いき・いきセミナー」(鶴見川流域総合治水対策協議会)を経由して入会した。「かたかご／七国」では、KOさん、TUさん、YTさん、NJさん、KSさんが「多摩丘陵学・自然論」(まちだ市民大学)を、ARさん、UMさんが「自然ふれあい事業」(東京都)を経由している。また、「SNECS」では、TDさん、IMさん、HMさんが「特別保護区自然環境ボランティア養成講座」(「トラスト協会」)の卒業生であるのに対

し、残りのメンバーは「植物ボランティア養成講座」の卒業生である。

ここで4章を締めるにあたっては、里山ボランティアの参加動機が多様であることと、動機としては以上のような動機があること、さらに「仲介ルート」を経由して里山保全NPOに入会した人が多いこと、を確認しておけばよい。また、8つに分類した参加動機のうち、(日)～(火)は里山に依存する動機であるのに対して、(水)～(土)は里山に依存しない参加動機であり、里山ボランティアといっても里山に依存しない参加動機があることにも注目する必要がある。なお、(祭)は里山に依存しているかそうでないかは、人によって異なるので弁別できない。

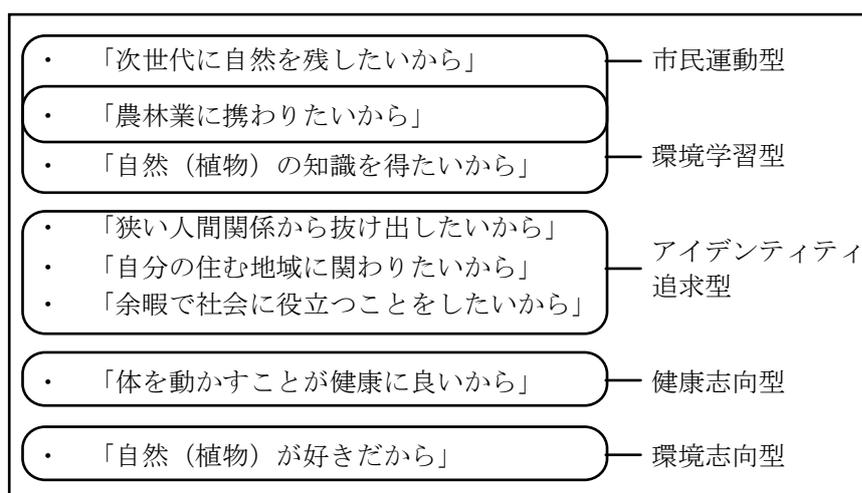


図4 里山ボランティアの参加動機

表1 里山ボランティアの参加動機と仲介ルート

	記号	年齢	性別	参加動機								仲介ルート	
				・	・	・	・	・	・	・	・		
恩田の谷戸フックンクラブ	TH	52	女	●		●						●	
	FJ	50代	女	●				●				●	
	FS	53	女			●		●				●	
	ME	55	女			●						●	
	KB	43	男	●	●			●				●	
	FT	56	男				●	●			●	●	
	OB	55	男		●			●				●	
	IW	62	男				●	●				●	お
	KT	59	男				●	●				●	鶴
	HG	55	男		●			●				●	
	IG	64	女					●				●	
	YS	52	女		●							●	
	IT	36	男	●			●	●				●	
	KN	36	男		●							●	
	HS	37	男				●					●	
	TM	42	男									●	
SD	42	男				●				●	●		
NW	53	男									●		
KU		女			●						●		
TN	26	女				●				●	●		
町田かたかごの森を守る会／七国山自然を考える会	KS	76	女	●								●	
	KY	68	男					●	●			●	
	KO	67	男					●	●			●	多
	TU	65	男						●	●		●	多
	SK	59	男					●				●	
	YT	58	女	●								●	多
	AR	52	女			●				●		●	ふ
	UM	54	女			●						●	ふ
	NJ	69	男						●			●	多
	KW	38	女									●	多
HT	77	女	●								●		
TH	52	女	●								●		
せたがや自然環境保全の会	KR	66	男	●								●	植
	KM	67	女			●						●	植
	MN	49	女									●	植
	IB	63	男			●						●	植
	TK	61	女	●								●	植
	HC	63	男					●	●	●		●	植
	KJ	56	女			●	●					●	植
	TD	68	男						●	●		●	特
	IM	40	女	●								●	特
HM	52	女			●						●	特	

注) お……「おやじの腕まくり」(青葉区)
 鶴……「鶴見川・いき・いきセミナー」(鶴見川流域総合治水対策協議会)
 多……「多摩丘陵学・自然論」(まちだ市民大学)
 ふ……「自然ふれあい事業」(東京都)
 植……「植物ボランティア養成講座」((財)せたがやトラスト協会)
 特……「特別保護区自然環境ボランティア養成講座」((財)せたがやトラスト協会)

5 里山ボランティアの参加動機と期待される社会的機能

5.1 里山ボランティアにとっての保全活動の意味

里山に依存する参加動機——市民運動型・環境学習型

参加動機の分析を始める前に、次の点に留意しておく。すなわち、4.5 では参加動機を8つに分類し、さらに5つにタイプを分けたが、これは里山ボランティアをそのように分類することを目的としていない。ボランティアには、いくつかの参加動機が組み合わさっていたり、複数の動機のあいだに重み付けがあったりすることがしばしばみられるし、またインタビューを通じて、ボランティアの参加動機を十分にすくい取れなかった可能性もある。さらに、なにかを分類するときの常であるが、8分類に解消されない参加動機もありうる。したがって以降の分析では、参加動機とボランティア個人を直接的に結びつけて論ずることは慎まなければいけない。イメージを喚起するために、個人の発言を挿入することがあるが、それはその個人について物語りたいわけではないことを強調しておく。

さて、このようなことを念頭に置いて、参加動機タイプについて分析を試みたいのだが、環境志向型動機は里山ボランティア全員に認められる動機なので、あえて分析しないことにする。したがって、これを除いた4つの動機タイプについて分析する。

これら4タイプを里山に依存するかしらないかという基準で分類すると、市民運動型動機と環境学習型動機は里山に依存する参加動機であるのに対して、アイデンティティ追求型動機と健康志向型動機は里山に依存しない参加動機として括ることができる。まずは、里山に依存する参加動機について分析しよう。

市民運動型動機は、「OYFC」や「かたかご／七国」のリーダーが運動理念として掲げているものである。しかし、リーダー以外の人でこれを挙げた人は意外に少なかった。このことから、多くの里山ボランティアは、団体の理念と参加動機を1対1で結びつけていないことがわかる。ただし、これは運動としてまとまりがないことを意味しない。たとえば、「OYFC」の場合、個人の参加動機が多様であっても、運動としては1つの方向に向いていることが会員のなかで自覚されている。代表のTHさんは、個人の参加動機が多様である現状を十分に知りながらも、それを無理に束ねるのではなく、むしろ多様性を受け入れて、会員それぞれが楽しくフィールドに「貼り付く[活動する]」ように傾注している。そしてこのことによって、行政サイドにアピールし、結果的にフィールドを担保しようという運動が成功すればよいと考えている。この考えは、所有権を持たない人たちが現場に継続的にかかわることによって、実質的に市民・住民の視線で管理していき、結果的に所有権を相対化し、管理主体を再形成していこうという新しい環境保全運動の方法論とみることができる(鳥越1997; 宮内 1999)。

一方「かたかご／七国」においては、「OYFC」とは異なったかたちの調整機能を認めることができる。設立当初から会を牽引してきた代表のKSさんは、いまでもみどりを次世代に残したいという熱い思いを抱き、会の精神的支柱となっているが、実際の運営の中心を担っている幹部にはそうした熱い情熱は感じられない。KSさんは体調を崩して以来、普段の活動日にはあまり活動に参加していない。ほかの幹部が中心となって平常作業をすすめているので、KSさんが登場するのは、一般市民を呼んでイベントを実施するときなど、会長として話す必要があるときである。そのようなとき、

KSさんは話したいことが多すぎて——かつて多くのみどりが残っていたことに対する懐古、これまでの会の活動の歴史、雑草であっても植物を大事にしようという呼びかけなど——、長時間にわたって話すことになり、周囲にいる幹部から「会長、時間が……」とやんわり制止される⁷¹。「かたかご／七国」の場合、この制止の仕方に、個人の参加動機を団体の活動の方向とすりあわせる調整をみることができる。

「OYFC」と「かたかご／七国」を比較すると、前者は市民運動的側面が強いのに対して、後者はボランティア活動団体へと変貌しつつある。「OYFC」は谷戸の保全を最終目標としているから、個人の多様な参加動機を団体の理念に引き寄せる力が働くように戦略が向けられている。対して、「かたかご／七国」は、すでに運動的色彩は褪せているので、そのような引力は働かない。逆に、KSさんが抱くような市民運動型動機は、ボランティア活動のなかにおだやかに吸収されるよう調整機能が働いているようにみえる。

まとめると、市民運動的な「OYFC」の場合、団体としての理念と市民運動型動機が重なるので、ボランティアの多様な参加動機が団体の理念と矛盾せずに共存するよう磁場が働くのに対して、市民運動色が抜けた「かたかご／七国」の場合、そのような磁場が働かず、市民運動型動機が突出しないような調整機能が働いている。

次に取り上げるのは環境学習型動機である。この動機の実在は、森林／里山ボランティアにとって、ボランティア活動が環境教育の学習機会として位置づけられていることを意味する。これは、現在、森林／里山ボランティア論で優占的になっている言説と重なる部分である。

ここで少し立ち止まって考えておきたいことは、環境学習型動機を持つ場合に、それが自然観察会への参加とボランティア活動への参加のどちらを選択するかという問題である。「トラスト協会」の「植物ボランティア」養成講座において、観察会を期待して入会した人が退会していったことを勘案すれば、両者を志向する精神性には大きな隔たりがあるように思える。しかし、「OYFC」の TH さん、FS さん、ME さんのように、自然観察会から実践的な保全活動へと移行した人も少なくない。いわゆる「お客さん」が、どのような契機で主体的に行動するようになるのか。この点は、別の機会に検討する余地があるが、「OYFC」の KB さんの例が一つのヒントになるのではないだろうか。KB さんは、「多摩丘陵野外博物館」で二次的自然を舞台に自然観察しながら、人手の関わり方と生物の生息状況の関係がわからないと「観察していても鑑賞しかしていない」と感じ、「OYFC」での農作業に積極的に関わった。この例は、里山のような二次的自然を観察しようとするとき、鑑賞でなく観察しようとするほど、実践的に活動したくなる可能性があることを示唆している。だから、観察会かボランティア活動かという二項対立は見せかけの図式であって、観察会を徹底して志向すると、結果としてボランティア活動を志向することになるのかもしれない。

里山に依存しない参加動機——アイデンティティ追求型・健康志向型

里山ボランティアのさまざまな参加動機のなかでも、とりわけ注目すべきはアイデンティティ追求型動機である。こうした動機が語られることに対して、ここでは「個人化のポテンシャル」に伴う「アイデンティティ不安症」の症状が現れた／っていると理解したい。このように診断する理由を、中野敏男の「ボランティア動員型市民社会論」(中野 1999)を参照して説明しよう。

⁷¹ 1999年8月29日に、まだ市民大学「多摩丘陵の自然入門」(旧「多摩丘陵学・自然論」)の講師として話したとき、また同年11月30日に、町田市立南大谷小学校の児童を迎えて話をしたときに観察された。

中野はメルッチの「個人化のポテンシャル (potential for individualization)」(Melucci 1989=1997: 47)という概念に注目し、「ボランティアという生き方」が求められるようになっていく現状を分析している。「個人化のポテンシャル」とは、中野の要約を借用すれば、「家族・共同体(社会諸集団)・国家などかつて諸個人のアイデンティティを保証する集合的な価値の供給源であったものがしだいにその効力を弱め、諸個人のアイデンティティが、何らかの集団の成員条件によって一義的に決定されるのではなく、むしろ社会的諸権力の抗争の場そのものになって、そこに個人の『選択の自由』の可能性もまた広がってくる」(中野 1999: 83-4)ことを指す。この概念が、「社会のアノミー化」「個人の孤立化」といった、かつては社会の病理現象とされていた概念と異なるところは、「自由の閉塞性」が一方向的に進むのではなく、「自由の可能性(ポテンシャル)」も一体となって進行していくことに着目している点にある。つまり、「個人化のポテンシャル」が含意する意味は両義的で双方向に開かれているのだ。

この「個人化のポテンシャル」への対策として、中野は相互に補い合う2つの方向への方策が追求され始めているとする。ひとつは、「今一度『わたしたち』という意識をかき立て、現状の社会システムの担い手としてその役割への忠誠を求めるという方向」で、もうひとつは、「現状とは別様なあり方を求めて行動しようとする諸個人を、抑制するのではなく、むしろそれを『自発性』として承認した上で、その行動の方向を現状の社会システムに適合的のように水路づけるという方策」(中野 1999: 86)である。そして、今日の「ボランティアという生き方」の推奨は、実は後者の方策として採用されているのではないかと問うことによって、社会システムによるボランティアのコントロールを問題にした。

こうした議論を踏まえて、アイデンティティ追求型動機における「狭い人間関係から抜け出したいから」「自分の住む地域に関わりたいから」「余暇で社会に役立つことをしたいから」という参加動機を眺めてみると、中野の指摘が驚くほどに符合することが分かる。「自分の住む地域に関わりたいから」は、1つの地域に長年住んだことがない転勤族などに特徴的にみられる動機であるが、これは「自由の閉塞性」に対処するためにボランティア活動に参加した／しているとみなすことができる。また「狭い人間関係から抜け出したいから」は、いわゆる仕事人間で家と会社を往復する毎日だった会社員に、「余暇で社会に役立つことをしたいから」は子どもから手が離れた女性や会社を退職した男性に特徴的にみられる参加動機であるが、これは「自由の可能性(ポテンシャル)」に対応して活動に参加した／しているとみなすことができる⁷²。

さらに、里山ボランティアの中には、各種ボランティア養成講座・研修を受講した卒業生が多いことも、中野の視座を補強することになる(表1参照)。たとえば、「OYFC」には、「おやじの腕まくり」「鶴見川・いき・いきセミナー」の卒業生が少なくないし、「かたかご／七国」には、まちだ市民大学(町田市教育委員会)主催の「多摩丘陵学・自然論」の卒業生が多い。また、SNECSの会員は、原則として「トラスト協会」主催の「植物ボランティア」養成講座か「特別保護区自然環境保全ボランティア」養成講座の卒業生に限られている。つまり、こうした講座・研修が、「個人化のポテンシャル」に伴って「別様でもありうる(contingent)」可能性を知覚した人びとにとって、格好の水先案内役となっているのではないだろうか。

たしかに、「個人化のポテンシャル」に伴う「アイデンティティ不安症」が理由でボランティア活動に参加した／している人びとも、参加する前から「自然が好き」だったり「登山が好き」だったりする

⁷² 金子郁容は、ボランティアの提示する関係性を、「社会の閉塞状況を打破するためのひとつの『窓』になるのではないかと思っているのだ」と言っている(金子 1992: 70)。

ことが多く、環境志向型動機を持ち合わせている。しかし、環境志向性を持つことが一般化している現在において、環境志向的動機は、眼前に広がる水路のうちどれを進むかを決めるときに参考にする程度のものであろう。アイデンティティ追求型動機を挙げる人びとのなかに、市民団体を掛け持ちする例が多いことがその傍証になるだろう。

そうすると、アイデンティティ追求型動機が多くの里山ボランティアの口から語られることは、里山が、森林／里山ボランティア論で説かれているのとは異なり、環境教育の実践される場というよりもむしろ、「個人化のポテンシャル」に伴う「アイデンティティ不安症」に悩む人びとの癒しの場、井上芳保の言葉を借りれば、「ルサンチマン処理文化の場(井上 1999)であるかのようにみなされうることを示している。

健康志向型動機については、単独でこれだけを参加動機に挙げた人がいないことから、副次的な動機であると考えられる。表1の結果から推し量ると、これはアイデンティティ追求型動機とセットになる傾向が高いように思われる。つまり、両者をセットにした参加動機でボランティア活動に関わっている場合、里山ボランティアは「アイデンティティ不安症」を癒すとともに、体を動かすことによる健康の増進も図ろうとしているようだ。このことは、里山が心身ともに健康になれる「野外型健康ランド」として認識される可能性があることを示唆している。

以上から、里山ボランティアの参加動機は多様であり、なかには里山に依存しない動機もみられること、そしてボランティアに期待されている環境教育の学習者としての役割とボランティアの参加動機との間に「ずれ」が生じていることがわかる。このことは、現在全国的に展開されている森林／里山ボランティア養成施策について、森林／里山を改善する施策として効果的であるか検討する必要を迫るものである。

5.2 里山ボランティア養成施策の射程

「ボランティア」＝「担い手」＝「学習者」

5.1 において、里山ボランティアの参加動機はきわめて多様であり、期待されている社会的機能——環境教育の「学習者」としての機能——との間に「ずれ」が生じていることをみた。東京都の「自然ふれあい事業」における目的の第一が、『保全地域』が身近で大切な自然であることを知ることだから、森林／里山ボランティア養成施策は、基本的に森林／里山ボランティア論に則って展開されていると考えられる。つまり、この施策の第一の目標は、ボランティアが森林／里山について学習することにあるだろう。するとたとえば、「かたかご／七国」の AR さんが、「この年齢(とし)になったら、働いてもお金にならないし……、家にいてもなんなんで、ボランティアをやろう」と「自然ふれあいボランティア」になり、「[ボランティア活動をしていると]木から気が取れるような気がする。……[体の]中の循環が良くなるっていうのかな。……疲れるよりも体調が良くなることが多い」と話すことは、「ずれ」が如実に表れている例とみなすことができる。

しかしこのことをもって、つまりボランティアが環境教育の「学習者」とは限らないからといって、森林／里山ボランティア養成施策の失敗を判断するのは早計である。ここで考察しなければいけないのは、こうした「ずれ」を生じさせている機制にこそあるからだ。

この「ずれ」を考察するとき、2.1 で検討した森林／里山ボランティア論の変遷をいま一度振り返っておくことが必要である。2.1 では、森林／里山ボランティアが、森林／里山整備の「担い手」としてよりも、環境教育の「学習者」として期待されるようになってきたことを確認した。しかし、ここでさらに掘り下げて考えておくべきことは、「担い手」とみなすことと「学習者」としてみなすことの違いはどこにあるのか、である。森林／里山ボランティアを「学習者」としてみなすことにより、「担い手」としてみなしたときに生じる困難を見事に克服できた。そのからくりを改めて解き明かさなければいけない。そのために、環境教育における基本的な考え方について触れておこう。

一般に環境教育では、教育目標を段階的に設定するのが標準的である。こうした発想の起源は、ベオグラード憲章にさかのぼることができる。この憲章は、1975 年に開かれたベオグラード環境教育専門会議で制定されたものであり、現在でも環境教育の準拠点となっている。ベオグラード憲章の特徴は、環境教育の最終目標を、環境のために「適切な行動を起こす」と明確にし、そこに至るまでの6段階の目標(関心・知識・態度・技能・評価能力・参加)を設定したことにある。

ここで確認しておきたいのは、環境問題の解決のために行動することが環境教育の最終目標になっていることである。このことは、森林／里山ボランティアを環境教育の「学習者」とみなすことが、実は環境問題を解消しようとする「担い手」として潜在的にみなしていることを含意する。実際、東京都の「自然ふれあい事業」においても、ベオグラード憲章からの環境教育の流れを受け継いでおり、5項目挙げられている事業目的のうちの1番目の目的は『保全地域』が身近で大切な自然であることを知ることであり、ボランティアを「学習者」とみなしているのだが、5番目の目的は「日常的に地球環境、自然保護、環境負荷低減に配慮した、行動する都民になってもらう」であり、ボランティアを「担い手」としてみなしていることは明らかだ。

2.1 で検討したように、ボランティアを直接的に「担い手」とみなすことには不可避的な困難が生じてしまうが、環境教育を媒介すると、実質的にはボランティアを「担い手」としてみなしつつも、論理の破綻を招かないようにみえる。だから次に焦点を合わせるべきは、教育というクッションを挟むこ

とによって何が変化するのか、そのからくりにある。

ボランティアの身体

ボランティアの行為を説明するモデルとして、2.1 では「予算配分と時間配分の経済モデル」を使用した。しかし、ボランティア活動と金銭的寄付との関係を互換的に捉える経済モデルには、重要な論点が抜け落ちているように思われる。それを考察するためには、ボランティア活動と金銭的寄付との相違に目を向ける必要がある。それも、時間と金銭の相違とは異なる相違に、である。

ここで、両者の間にみられる相違として、重要でありながらこれまで見過ごされてきた「ボランティアの身体」に着目したい。ボランティア活動にはボランティアの身体が介在するが、金銭的寄付には介在しない。この相違は、ボランティアの行為を説明するときには、ボランティア活動と金銭的寄付との間にみられる効用関数の違いとして、経済モデルに組み込むことができるだろう。たとえば、ボランティア活動を行なう場合、自己充足的に身体を消費する人と道具的に消費する人との間には、効用関数の形状に違いが表れるにちがいない。

しかし、ボランティアの身体は、ボランティア活動を通じてただ消費されるだけではないはずだ。SK さんの「環境に対して気を遣うようになった気がするね。……たばこの吸い殻を持ち帰ったり、ゴミを捨てるのに気を遣ったり……」という言葉や、HC さんの「フェノロジー、植物を覚える気力はないけれど、入る前に比べれば知識は雲泥の差だよ」という言葉から推測すると、意識するしないにかかわらず、身体には「環境的資本(ecological capital)」が蓄積されると考えられる。そうであるならば、ボランティア活動と金銭的寄付との間に、これまで無視されてきた明瞭な違いを見出すことができる。それは、ボランティア活動では環境的資本が蓄積されるが、金銭的寄付ではそのようなことがないという違いである。環境学習型動機を持つボランティアでなければ、無意識のうちに環境的資本は蓄積される。つまり、環境的資本の蓄積する場としての身体という見方は、経済モデルから捨象されていたのだ。

環境的資本がボランティアの身体に蓄積されるという視角を得ると、森林／里山ボランティア論において、ボランティアを「担い手」から「学習者」へとみなすように見方が変わった理由が一層理解しやすくなる。「担い手」としてみなすとき、ボランティアは短期的・局所的に効果を上げることが要請される。一方、「学習者」としてみなすときは、ボランティアが環境的資本を身体化して環境的体身体(ecological body)を手に入れ、その結果として「担い手」となればよい。この場合は、局所的な森林／里山で「担い手」として効果を上げることよりも、むしろ日常のさまざまな行為を選択する場面で、環境配慮的行動を実践することが目指されるだろう。したがって、要求される効果は長期的・大域的である。結局、森林／里山ボランティアに期待される役割が「担い手」から「学習者」へと転換したのは、短期的・局所的な効果から長期的・大域的な効果へと、ボランティア活動を評価する視点が時空間に広がったことを意味している。ボランティアの側から社会的に期待されている自分の役割をみたとき、それが短期的・局所的な効果を要求されるものよりは長期的・大域的な効果を求められるものの方が、自由度が高いはずだ。だから、森林／里山ボランティア論は、ボランティアを「担い手」ではなく「学習者」とみなすように洗練されていったのだろう。

身体における出会い

こうした考察によって、里山ボランティアの参加動機と期待されている社会的機能との「ずれ」が、ボランティアの身体の両義性によって生じていることがわかる。森林／里山ボランティアを「学習

者」とみなすとき——そしてボランティアは社会的にそのように期待されているが——、ボランティアの身体は環境的資本が蓄積される場として認識される。これに対して、ボランティア本人はあまりそのように意識しておらず、もっぱら身体は自己充足的に消費され、そのことによって効用を得ている人が多い。瞬時的・場所的な効果を求めているともいえる。

いわば、ボランティアの身体において、個人的欲求と社会的要求とが相互干渉せずに出合っているのだ。したがって、この「ずれ」は起こるべくして起こっているのであるから、「ずれ」と呼ぶのは不適當であるかもしれない。「ずれ」のように見えてしまうのは、時空間に拡散された確率分布を積分すれば、「ずれ」ていないかもしれない。だから、顕在的な「動員」レベルの「ずれ」が生じているからといって、それが潜在的な「運動」レベルの「ずれ」が生じているとは言えないのである。

もちろん、環境教育を媒介したことによって、政策効果は測定しにくくなっており、本当に「ずれ」が生じていないのか、つまり望ましい施策であるかどうかについては判断しにくい。里山やボランティアのブームに便乗して、無批判に施策が講じられているだけで、政策効果については無関心なのかもしれない。本研究の限界から、これ以上追求することはできないが、この施策を評価するための努力は必要不可欠である。

今後もし森林／里山ボランティア養成施策について評価するのならば、政策効果の時空間への広がりやを考慮に入れることはもちろんのこと、さらに森林／里山に依存しない動機で参加するボランティアが存在することの意味についても改めて考察することが求められよう。たとえば、ARさんの「福祉にお金をかけるよりも、その予防でボランティアにお金をかけるのもいいと思う」という言葉には、森林／里山ボランティア養成施策の影響圏は環境分野だけでなく福祉分野にまで滲出する可能性が示されている。

なお、行政サイドから見ても「ずれ」が生じている場合は、その「ずれ」を解消するために、瞬時的・場所的な効果を狙って、森林／里山を適正に整備するボランティアに助成金を交付するような施策が検討されるだろう。こうした施策は、審査機構がしっかり機能すれば、確実に森林／里山が整備される点で評価できる。しかし、結果として、林業家顔負けの技能を有するボランティアを優遇することを招来し、現在のボランティアの参加動機が多様さ・豊かさを削いでしまうおそれがある。たとえば、「OYFC」のHGさんやOBさんの果たしている役割を想起すると、参加動機が多様性が里山保全NPOの活動に活力を与えることが多いだろうから、そうした施策の導入には十分な配慮が必要である。

5.3 里山ボランティア・里山保全NPOのあり方

里山保全NPOに求められる自律性

これまでの考察をまとめると次のように要約できる。管理社会論から森林／里山ボランティア養成施策を診断するとき、それは行政の補完物(「担い手」としてのボランティアを動員しようとしているとみなしやすいが——中野の指摘も基本的にはそのような見方をしているが——、「担い手」として直接的に動員するような暴力的施策にはなっていないとひとまず考えてよい。しかし、無意識のうちに環境配慮的・ボランタリー的性向が身体化されて、「担い手」を自発的にすすんで引き受けている可能性は否定できない。この場合、施策は顕在的には(「動員」レベルでは)「ずれ」ているようであっても潜在的には(「運動」レベルでは)「ずれ」ておらず、一種のマインド・コントロールによって、目的を達成していることになる。だから、ここで問わなければいけないのは、森林／里山ボランティア養成施策が講じられるときに、いやもっと一般に、森林／里山ボランティアを推奨する言説が飛び交っている現代社会において、森林／里山ボランティアは政治的にコントロールされずに、自律性を保持できるのか、である。

この問いに対して、中野はMouffeの議論を引き合いに出して、アイデンティティの多元性を抗争へと導き、政治化していくべきと説き、「新しい社会運動」の潜在力を十全に高めることが必要と結論している(Mouffe 1998)。ここでも、中野の考えに基本的に沿うかたちで、自律性をテーマにして議論をすすめていく。

まず、自律性の概念について定義しよう。大澤真幸のアイデアを借りれば、自律性とは〈他者〉が想定しうるときにはじめて成立する⁷³(大澤 1994)。この場合、〈他者〉はボランティアの行為に意味を与える「第三者の審級」である。ボランティア一般にとっては、この〈他者〉の位置を「社会」が占める。このことは、(自発性、無償性を有する)暴走グループへの参加をボランティア活動と呼べないことを考慮すればわかるだろう。ボランティアとは、「社会」にとって役に立つ(公益性)人でなければならないのだ。しかし、ここでの「社会」とは、ボランティアの行為に意味を供給する「第三者の審級」であるから、きわめてあいまいである。人によっては、それが地域社会や日本社会かもしれないし、漠然としたイメージとしての社会かもしれない。そして、〈他者〉をあいまいにしてしまえるところが、中野の指摘するように「動員」される隙を与えてしまう。

したがって、〈他者〉は限定して定義する必要がある。里山ボランティアの場合は、普通には〈他者〉=「里山」と明確にするとわかりやすい。つまり、自らの行為が里山からはどのように見えているのかという視点から、ボランティア活動の意味を見出し、その意味の軽重を見ながら自発的に活動する限りにおいて、里山ボランティアは〈自律性〉を持つと定義するのだ。この場合、〈自律性〉を持つことが、里山保全に貢献することはもちろん、自らの行為に対しモニタリング能力を獲得すること自体が、ボランティアの政治的コントロールに抗する自省的自律性を持つことになるだろう。

ところで、里山ボランティアには、里山に依存しない参加動機を持って活動に参加している人が多数存在するのだから、そのようなボランティアにとっては〈他者〉≠「里山」である。このようなボランティアには、〈他者〉を再考せよと指令すべきなのか。いや、そうではない。そのことを検討するためには、ボランティア個人の自律性とNPOとしての自律性とを分けて論ずることが必要である。

里山保全という観点からみると、NPOとしての活動が全体として里山に貢献していれば良いので

⁷³ 中野の指摘に対して大澤は、「リスク社会」(Beck)において問題となるのは、自律性を保証することではなく、〈他者〉が想定しえなくなることであり責任について原理的に論じている(大澤 2000)。

あつて、NPOの構成員たるボランティア一人ひとりの活動が、里山保全に貢献している必要はない。だから、里山保全 NPO にとっての〈他者〉は「里山」でしかありえないが——そうでないならば、それは里山保全をミッションとした NPO ではありえない——、里山ボランティアにとっての〈他者〉は開かれている。たとえば、OB さんの「側面からサポートするような、……何かをコーディネートするような、そういう方面でお手伝いできればいい」という考えや、HC さんの「交渉は自分の仕事だったから、対外的な場面があるときに、自分のアビリティを活かせるかなと思って」という考えは、直接的に里山保全に貢献しているわけではないが、そのこと自体は全く問題ではない。ただし、こうした場合も、それぞれの〈他者〉にとって、自分の行為がどのように見えているのかという視点から、自らボランティア活動の意味を見出し、その意味の軽重を見ながら自発的に活動する限りにおいて、〈自律性〉を持つと定義する。この場合は、直接的には里山保全に貢献しないかもしれないが、政治的なコントロールに抗う自省的自律性を持つことになる。なお、OB さんと HC さんの場合、直接的には〈他者〉≠「里山」であるが、結果として〈他者〉＝「里山」となっており、そのことを先取りして自らの行為に意味を見出している可能性もある。

さてここで、里山保全 NPO として自律性を持つのなら、構成員たるボランティア全員が自律性を持つ必要はないのではないかという疑問が提出されるかもしれない。つまり、自律性を持たないボランティアがいても、NPO としての自律性が保持できればよいのではないのかという疑問である。しかし、その場合は、NPO 組織に個人が「動員」される危険性が生じることになり、問題が先送りされ、不透明度が増すだけである。

自律性を確保するための自己評価能力

里山保全 NPO が自律性を確保するためには、団体としての活動が里山からどのように見えるかを知ることが必要だ。ここで必要とされているのは自己評価能力である。自己評価能力のない里山保全 NPO があつたならば、その団体はおよそ2通りの方向に進んでいくだろう。1つの方向は、中野が指摘した落とし穴——抽象的に意志する主体がナショナリズムに親和的な方向に水路づけられるという陥穽——へと導かれる方向である。もう1つの方向は、自分達の行為が里山にとって適当であるか判断できず、木1本伐つたり、草1本刈つたりすれば、何もやらないよりましであるというように都合良く解釈して、結果として里山にどのような影響を及ぼしたかについては関心を寄せずにすましてしまう方向である。里山保全を目的として設立された NPO であるならば、その活動が保全に資するかどうか検証する能力は欠くことができない。逆に言えば、そうした能力を持つてこそ、NPO は批判的ポテンシャルを内在化して、ミッションに照らしながら進むべき道を模索することができる。特定非営利活動推進法が施行されて1年が経過したが、米国と比較して日本の NPO にはアドボカシー機能が圧倒的に欠落していると言われている。こうした現状を固定化しないためにも、里山保全 NPO には自己評価能力を持つことを期待したい。

ところで、里山保全 NPO が自己評価能力を有するとき、構成員である里山ボランティアのなかに、そうした能力を身に付けているメンバーがいるはずである。ここで、その能力を持つボランティア自身にとって自己評価能力は、NPO にとっての意味と異なるかたちの意味を持ちうることは注目に値する。

もし、自分の行為が里山に良い働きをもたらすと認識できれば、自分が里山から必要とされていると感ずることができる。この感覚は、自らのアイデンティティの危機からボランティア活動に参加した／している人びとに対して、その人のアイデンティティを強固にするものと考えられる。たとえば、

会社から必要とされていると感じていた会社人間が退職を契機にアイデンティティの危機に直面したり、子どもから必要とされていると感じていた専業主婦が子離れを契機にアイデンティティが脅かされたりする場合、里山から必要とされている感覚は、自分の存在価値を新たに発見する機会となりうる⁷⁴。こうしたことを可能にするのは、自己評価能力があるからこそできることであり、それを身につけていないと、自分の行動が本当に役に立っているかどうか、ボランティア活動をしなが絶えず悩むか、あるいは、見た目の変化から自らの行動に意味があることを信じるかになってしまうこともありうる。

今日、人生の節目をリセット・アンド・リベンジの機会としてみる向きが喧しく、競争社会にあってこうした強い決断力が求められているとの印象を受ける。しかし、本研究の調査結果によると、そうした節目をなだらかに過ごしたい人びとは確実に存在して、いわば「シームレス退職」「シームレス子離れ」を望む人びとにとって、ボランティアはその受け皿となっている面がある。そのようななだらかさを尊重しつつ「アイデンティティ不全症」に悩む人びとが、ボランティア活動を通して癒されるためには、ただ参加するのではなく、それが〈他者〉＝「里山」の役に立っているという感覚が必要であり、そうした感覚を得るためには、自己評価能力を身につけていることが大切なのだ⁷⁵。

ボランティアリーダーに求められる資質——危機管理型ではなくプランナー型として

ところで、里山ボランティア活動の全国的な広まりとともに、ボランティアリーダーを養成すべきとの声があちこちで挙がっている。技術の未熟なボランティアが活動に参加することが多くなり、「草刈り機が石にぶつかって、砕けた破片で足を数針縫った」とか、「あやうく太い木が頭上に落ちてくるところだった」とか、さまざまな危険が散見されるようになっている現状の改善策として、リーダー待望論がにわかに台頭している。ここで求められているリーダーは、現場での知識・技術を持ち、危機管理ができる者としてのリーダーである。

ところが、ボランティアリーダー像としては、危機管理者としてのリーダーだけでなく、これと異なるタイプのリーダーも想定できる。それは、現場のデザインを描くことができ、組織を適切に方向付けることのできるリーダーである。このタイプのリーダーは、危機管理型に対してプランナー型と呼ぶことができよう。そして、里山保全NPOが自律性を確保するためには、自己評価能力を持つプランナー型リーダーの存在が必要である。

昨今の森林／里山ボランティア・ブームのなか、知識偏重で技術が不足しているボランティアが大量に現場を訪れる例が頻繁にみられ、現場を仕切れる知識・技術が緊要となっていることは確かである。こうした問題意識に基づき、危機管理型リーダーの養成が急務とされ、たとえば、1999年10月に開かれた「里山管理リーダー養成講座・東京」⁷⁶でも、現場での実習に重きを置き、安全に作業を行なうためのプログラムが組まれた。このことは、非常に大事なことではあるが、あまりに危機管理型リーダーの必要性ばかりに目を奪われると、プランナー型リーダーの必要性がないがしろにされるおそれがある。

危機管理型リーダーは、作業計画が予め決まっているときに、その作業を安全に遂行することに

⁷⁴ 倉本宣の「生きがいは、雑木林に人手が必要なことに由来している。二次的な自然を維持する場合には原生自然とは異なり、自然の力に釣り合うだけの人間の力を加えなければならない。それを市民の立場から考えると、二次的な自然から必要とされていることになる」(倉本 1999: 48)という表現から着想を得た。

⁷⁵ 「アイデンティティ不全症」を癒すことが目的ならば、〈他者〉は「里山」に限定されない。ただし、〈他者〉＝「里山」の場合、それは個人およびNPOにとっての二重の意味を帯びることを付け加えておく。

⁷⁶ 環境事業団主催、「森づくりフォーラム」協力により、「1999年度地球環境市民大学校」の講座として1999年10月29

長けている。しかし、このタイプのリーダーには、作業計画そのものを批判する能力は問われない。すなわち、ここでもボランティアが「動員」されるという問題がはっきりと穴を空けて待っているのだ。この問題を避けて通るためには、プランナー型リーダーの養成が肝要である。

ボランティアがプランナー型リーダーとなるためには、ただ漫然とボランティア活動に参加するだけでは不十分であり、明確な意図を持ったプログラムに沿って学習することが求められる。そして、この学習機会を提供する役割は、里山保全活動の実績を持つ NPO が担うことが望ましい。なぜなら、プランナー型リーダーを養成し、批判的ポテンシャルを有する NPO を育てるためには、すでにその能力を持つ里山保全 NPO が明確な問題意識から作り上げるプログラムが最適と考えられるからだ。

プランナー型リーダーの役割——ハード林業からソフト林業へ

現在の森林／里山ボランティア活動のうち、作業系と呼ばれる活動、たとえば、間伐、草刈りなどは、お手本が農林業家の技術にある。そうした技術は、プロの技術であり、生産性を上げるための技術である。NPO は決して生産性を追求しているわけではないのだから、農林業家の技術をボランティアがそのまま習得する必要はないはずである。それにもかかわらず、無批判にプロの技術が要求されることの多い現状は、むやみにボランティアが事故に遭うリスクを増加させてしまっており、その結果が危機管理型リーダーの必要性につながっているように思われる。

なぜこのようなことになっているのか。それは、プロのやり方とは異なるボランティアが身につけるべき技術について、ほとんど何も検討されてこなかったからである。そのなかで、こうした現状を批判しているのが中川重年である。中川は、生産性第一で行なうプロの林業を「ハード林業」と呼び、これに対して市民は「ソフト林業」を追求すべきと提唱した(中川 1999)。また、林業を「森のいろいろな働きを私たちの暮らしに役立てる仕事」と定義付け、従来の林業の枠組みを取り払ったのちに、「ソフト林業」の特徴を次のように整理した。すなわち、(甲)誰でも取り組める、(乙)森林生態系とくらしの関係を知る、(丙)生活を見直す、(丁)身近な森を気づかう、(戊)まず自分たちでできることを、(己)林業を応援する、の6つが「ソフト林業」の特徴である。このような「ソフト林業」においては、危機管理型リーダーがほとんど意味をなさない。「誰でも取り組める」ことを、「まず自分たちでできることを」やるのであれば、そこには身の危険を感じるようなリスクが少ないと考えられるからである。「ハード林業」では、危機管理型リーダーの役割も重要であるが、「ソフト林業」ではあまり重要でなく、むしろプランナー型リーダーこそが重要である。危機管理型リーダーの養成が急務となっていることは、「ハード林業」にボランティアを組み込むことの難しさの現れだととらえれば、危機管理型リーダーを養成して「ハード林業」を補完するのではなく、「ハード林業」から「ソフト林業」へと転換させることが必要なのではないか。そして、プランナー型リーダーには、まさにその転換作業の先導役としての役割を担うことが求められているのではないだろうか。

NPOの自律性とボランティアの自律性

以上を縮約すると、「里山保全NPOにはプランナー型リーダーが必要である」という命題として表現される。NPOの自律性を保障するために導出されたこの言明は、個々のボランティアにプランナー型リーダーにならねばという脅迫観念を植え付ける可能性があるという批判を受けるかもしれない

～31日に開かれた。

い。しかし、調査結果からわかるように、ボランティア活動への参加動機は多様である。そして調査対象とした3NPOは、そうした多様性を保持しうる力場が内在していた。たとえば、「SNECS」のMNさんが「みんなの思いを果たしているのかどうか」を気に掛け、「危ないなって気がするんですよ。適当にゆるみがないとね。……できる人ができることをできるときにできるだけやる。辛くなったり、ノルマを感じたりしたら、いけないと思います」と言うとき、ボランティアの多様性を大切にして、NPOの可能性を広げておきたいという力を認めることができる⁷⁷。

ボランティアの特徴は「他人から言われなくても進んで行なわれる」ことだが、それは同時に「他人から言われても（自分が納得しなければ）行なわない」ことでもある。したがって、プランナー型リーダーを目指すかどうかは、原則的にはボランティア個人の判断に委ねられている。そして、NPOの高い調整機能が働いて、最もコストの低い人がプランナー型リーダーの位置に落ち着くことになるだろう。

そのように予想するのは、少なからず根拠がある。たとえば、「SNECS」では、活動計画・活動報告などの書類を世田谷区に提出する必要がある。これは、傍目には大変面倒な作業のようにみえるが、サラリーマン経験の長かった会長のKRさんにとっては、それほど負担の大きい作業ではないようだ。一方、近隣住民と話し合う必要が生じたときには、商社に務めていたHCさんが渉外役を買って出るが、慣れた仕事なので負担は小さい。このように、団体の構成メンバーの得意・不得意分野から、ほとんど自動的に自分の役割を自覚するようになっているため、「里山保全 NPO にはプランナー型リーダーが必要である」と述べても、ボランティア一人ひとりにとっては、不得意な分野だから自分には関係ないと思うか、得意分野だから自分の役割だと進んで受け止めるかのいずれかとなり、エコ・ファシズムは避けられるだろう。

⁷⁷ MNさんは、NPOが無批判に制度化してしまう流れに対して抗おうとしているように見える。環境NPOの制度化については、寺田良一の研究がある(寺田 1998)。

6 結論

燃料革命・肥料革命以降、里山は、生業・生活との関係が途絶えてしまったため、量的に減少するとともに質的にも劣化しつつある。一方、生物多様性、環境教育などの観点から、里山を再評価しようという動きが大きくなっている。こうしたことから、現在かつてないほど里山に人びとの関心が集まっており、市民ボランティアによる里山保全が活発化しつつあるとともに、行政も里山ボランティアを積極的に養成するための施策を展開させている。

このような状況を踏まえて、本研究では、個々のボランティアにとっての活動の意味の実際を明らかにするため、持ち場を持ってボランティア活動を行なっている都市近郊の里山保全 NPO3 団体(恩田の谷戸ファンクラブ、町田かたかごの森を守る会／七国山自然を考える会、せたがや自然環境保全の会)に所属し、参与観察を行なうとともに、個々のボランティア 42 名にインタビューを実施した。そして、調査で明らかにした里山ボランティアの参加動機結果と、ボランティアに求められている社会的機能とのずれを手がかりとして、全国的に里山ボランティア養成施策が講じられているなかでの里山保全 NPO・里山ボランティアのあり方を原理的に考察した。

本研究で得た結論は以下のとおりである。

(甲)近年の森林／里山ボランティア論では、ボランティアを「担い手」ではなく環境教育の「学習者」として捉えられているが、里山ボランティアの参加動機はきわめて多様で、里山に依存しない参加動機も少なくない。このことから、里山ボランティアの参加動機と期待されている社会機能との間には、一見すると「ずれ」が生じているように見える。

(乙)しかし、これは顕在的な「ずれ」であって、潜在的な「ずれ」ではないかもしれない。もし、潜在的に「ずれ」が生じていないとしたら、それは里山ボランティアが無意識のうちにゆっくり薄められたかたちで、政治的にコントロールされている可能性がある。この場合、里山ボランティアは自律性を保持できるかが問われることになる。

(丙)里山ボランティアが、里山保全に寄与しつつ、自律性を保持しようとするならば、自己評価能力を身につけることが必要である。里山ボランティアの場合、普通には、里山保全の観点から見て、自らの行為にどのような意味があるのかを見出す能力、いわばモニタリング能力を獲得することが推奨される。この場合、里山保全に貢献することはもちろん、モニタリング能力を獲得すること自体が、ボランティアの政治的コントロールに抗する自省的自律性を持つことになるだろう。そして、この能力は、里山ボランティア本人にとって有益であるだけでなく、里山保全 NPO がアドボカシー機能を高めるための資源ともなりえよう。

[文献]

- Becker, Gary S., 1965, "A Theory of the Allocation of Time", *The Economic Journal*, 75: 493-517. (=宮沢健一・清水啓典訳, 1976, 『経済理論—人間行動へのシカゴ・アプローチ』東洋経済新報社: 289-326.)
- Daws, Robyn M., 1980, "Social Dilemmas", *Annual Review of Psychology*, 31: 169-93.
- ぐりーん・もあ編集部, 1999, 「森林ボランティアと国民の森林観」『ぐりーん・もあ』8: 10-1.
- 荻原なつ子, 1998, 「“環境のみつめかた”、市民の環境研究への参加とエンパワーメント—民間財団の女性プログラムの事例から」『環境社会学研究』4: 24-43.
- 長谷川公一, 1985, 「社会運動の政治社会学—資源動員論の意義と課題」『思想』737: 126-57.
- , 1990, 「資源動員論と『新しい社会運動』論」社会運動論研究会編『社会運動論の統合をめざして』成文堂: 3-28.
- 井上孝夫, 1995, 「『社会的ジレンマとしての環境問題』の批判的検討」『環境社会学研究』, 1: 178-84.
- 井上芳保, 1999, 「対抗的社会運動とルサンチマン処理文化の隆盛」第72回日本社会学会大会報告原稿.
- 石井実・植田邦彦・重松敏則, 1993, 『里山の自然をまもる』築地書館.
- 金子郁容, 1992, 『ボランティア—もうひとつの情報社会』岩波書店.
- 木平勇吉, 1996, 『森林環境保全マニュアル』朝倉書店.
- 鬼頭秀一, 1996, 『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』筑摩書房.
- , 1998, 「環境運動／環境理念研究における『よそ者』論の射程——諫早湾と奄美大島の『自然の権利』訴訟の事例を中心に」『環境社会学研究』4: 44-59.
- , 1999, 「アミノクロウサギの『権利』という逆説」鬼頭秀一編『講座人間と環境 12 環境の豊かさをもとめて—理念と運動』昭和堂: 30-53.
- 倉本宣, 1999, 「市民参加の里山管理」第4回ランドスケープセミナー報告原稿: 46-51.
- 倉本宣・内城道興, 1997, 『雑木林をつくる—一人の手と自然の対話・里山作業入門』百水社.
- 小出仁志, 1996, 「都市林の保全—世田谷のトラスト運動」木平勇吉編著『森林環境保全マニュアル』朝倉書店: 71-84.
- , 1998, 「都市型トラスト運動における環境教育の事例」『林業経済』596: 15-24.
- 松井健, 1998, 「マイナー・サブシステムの世界」篠原徹編『民族の技術』朝倉書店: 247-268.
- Melucci, Alberto, 1987, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Temple University Press. (=山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳, 1997, 『現在に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店.)
- 緑区・自然を守る会, 1991, 『カタクリの咲く谷戸に—横浜・新治の自然誌』文一総合出版.
- 森岡正博, 1999, 「自然を保護することと人間を保護すること」鬼頭秀一編『講座人間と環境 12 環境の豊かさをもとめて—理念と運動』昭和堂: 30-53.
- 森と市民を結ぶネットワーク研究会編, 1998, 『森づくり関連市民グループ、団体、機関及び林家リスト(概報)』森と市民を結ぶネットワーク研究会.
- 守山弘, 1988, 『自然を守るとはどういうことか』農山漁村文化協会.
- 「森づくり政策」市民研究会, 1997, 「第一次提言 新たな森林政策を求めて—森林ボランティア

- 活動をすすめる市民からの提言 (<http://www.jca.ac.apc.org/morizukuri/seisaku/toppage5/thm>, 1999.10.22).
- Mouffe, Chantal, 1993, *The Return of the Political*, London and New York: Verso. (=千葉眞・土井美徳・田中智彦・山田竜作訳, 『政治的なるものの再興』日本経済評論社.)
- 永田えり子, 1988, 「自由と効率—社会的ジレンマ研究の問題点」『理論と方法』3(1): 43-56.
- 中川重年, 1996, 『再生の雑木林から』創森社.
- , 1999, 『イラストガイド まちの森生活—ソフト林業入門』(社)全国林業改良普及協会.
- 中野敏男, 1999, 「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」『現代思想』27(5): 72-93.
- 日本林業調査会編, 1998, 『森林ボランティアの風—新たなネットワークづくりに向けて』日本林業調査会.
- Norton, Bryan G., 1986, "Conservation and Preservation: A conceptual Rehabilitation," *Environmental Ethics*, 8: 195-220.
- 佐藤嘉倫, 1991, 「社会運動と連帯」盛山和夫・海野道郎編『秩序問題と社会的ジレンマ』ハーベスト社: 259-80.
- 重松敏則, 1991, 『市民による里山の保全・管理』信山社.
- , 1992, 「英国 BTCV の田園景観及び森林生物環境の保全活動について」『造園雑誌』55(5): 325-30
- , 1999, 『新しい里山再生法—市民参加型の提案』(社)全国林業改良普及協会.
- 武内和彦, 1994, 『環境創造の思想』東京大学出版会.
- 田尾雅夫, 1997, 「ボランタリー組織の経営管理」『組織科学』31(2): 20-8.
- 寺田良一, 1998, 「環境 NPO (民間非営利組織) の制度化と環境運動の変容」『環境社会学研究』4: 7-23.
- 鳥越皓之, 1997, 『環境社会学の理論と実践』有斐閣.
- Olson, Mancur, 1965, *The Logic of Collective Action: Public Goods and the Theory of Groups*, Harvard University Press. (=1983, 依田博・森脇俊雅訳『集合行為論—公共財と集団理論』ミネルヴァ書房.)
- 大澤真幸, 1994, 『意味と他者性』勁草書房.
- , 2000, 「責任論—自由な社会の倫理的根拠として」『論座』57: 158-99.
- 林野庁, 1999, 「森林ボランティア活動を支援する新たな事業のお知らせ—民間の非営利団体による『森林の整備活動支援事業』の概要」(<http://www.rinya.maff.go.jp/NPO1.html>, 2000.1.10).
- 内山節, 1997, 「森林管理と市民参加」『山林』1359: 2-10.
- 内海成治・入江幸男・水野義之編, 1999, 『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社.
- 鷺谷いづみ・矢原徹一, 1996, 『保全生態学入門—遺伝子から景観まで』文—総合出版.
- 山岸俊男, 1990, 『セレクション社会心理学 15 社会的ジレンマのしくみ—「自分ひとりくらいの心理」の招くもの』サイエンス社.
- 山本信次, 1998, 「市民参加活動における『林業教育』と森林管理」『林業経済』596: 25-32.
- 山内直人, 1997, 『ノンプロフィット・エコノミー—NPO とフィランソロピーの経済学』日本評論社.
- 依光良三, 1999, 『森と環境の世紀—住民参加型システムを考える』日本経済評論社.